

(一)

寺社仏閣が子供の頃から好きだった。

僕は「やんちゃ」な子供だった。近所の子供達のリーダーで近くの神社で鬼ごっこをしたり、三角ベースをしたりして遊んだものだ。

その一方で、夕方、一人で海を見に行ったりもした。

夕日が沈む海は鈍い銀色に輝き、波紋は縦横無尽に模様を変えて目に染み入ってくる。波の音が耳朶を打ち、思考は消えて、やがて自分が海そのものになるような感覚に覆われる。そうになると帰宅を忘れ、闇が帳を降ろす頃には母が呆れ顔で迎えに来るのが常だった。神社に一人で行くのも好きだった。近所の神社はこぢんまりしたものだだったが、歴史は相当に古い物であつたらしい。ご神木の大樹は樹齢七百年を数えると言われていた。だが、子供の僕には関係がない。一人でご神木の洞の中に入り何もせずに空を見ていることも多かった。

「変な子供」

母はよく僕のことをそう言った。

家が暇であると、仏壇の前になだ無言で小一時間過ごす子供だったからだろうか？

そういう時の自分には「自己」という意識がない。海を眺める時も、ご神木の洞に籠もるときも、「自分」と言う感覚が消えてしまう。そして僕はその感覚が好きだったのだ。

引き籠もり？ そう思ったその君。それは失礼と言うものだよ。

最初に言ったじゃないか？ 僕は子供達のリーダーだったって……

子供には時間が迂遠だ。

ちゃんと同年代の子供達と遊ぶ自分と、「自己」が消える感覚を好む自分が内在しているだけの話だ。

『あの時』の自分がこんな歪な自分を作ったのだと思う。

そういう僕も高校三年生になった。

もう、飽きるまで海を眺める時間も許されない。

受験と言う峻険を繋ぐ一本橋を渡らないといけないのだ。

表現が大袈裟だって？

いや、それは受験の苦しみを知らない、あるいは忘れてしまった人の言うことだ。

大学受験は自分の子供時代の終わりを告げるものに等しい。そして未来を自分で決めないといけないんだ。これが人生の一大事じゃなくてなんだと言うのだ？

こちら側はまだ子供の自分。あちら側は大人の自分だ。そしてそれを繋ぐ橋は空中サーカスの綱渡りのように頼りない。落ちてしまうことを恐れない人はいない。

幸い僕は勉強が出来る子供だった。別にガリ勉強してたわけじゃないよ。勉強は単純に面白かったのだ。僕の知らない知識の海がそこには広がっていた。だから食べるように勉強をした。

高校も中学の先生が都会にある受験高校を薦めてくれたが、僕は自転車で行ける近所の高校へ進んだ。部活は中学からしていた剣道を選んだ。ところがこの高校。桜ヶ丘高校と言うのだけれど、剣道は県内トップクラスの高校だったのだ。僕の高校生活は地獄の特訓に明け暮れたと言っても過言ではない。体育会系のノリは肌に合わなかったが、僕は好き嫌いをはっきりさせる性格ではなかった。すぐに馴染んだ。二年生には試合のレギュラーメンバーになっていた。剣道の世界も僕を堪能させるものだったからだ。のめり込む魅力が剣の道にはある。

成績は落ちなかった。元々、学年トップクラスで入学したのだ。相変わらず知識欲も旺盛だったから成績は逆に伸びた。ただ、勉強に睡眠時間が削られるのが辛かった。そして、いつの間にか桜ヶ丘高校の文武両道の有名人になっていた。

嫌みなことを言う。

そう思う人もいるだろう。

僕も語っていて、そう思う。でも、事実なのだから仕方がない。

先生方の受けも良く、ただ自分の生活に埋没する達観した生き方は変わらなかったのだ。

『桜ヶ丘高校の哲学者』と言うのはなはだ遺憾なあだ名をつけられるに至った。

独善的な生き方をしたつもりはない。同級生とくだらない与太話もしたし、後輩の面倒もきちんと見てきたつもりだった。だが、彼等から見ると僕はどこかで線引きをしているように見えたのだろうか。

「オジン臭い」とも良く言われた。

昼休みは雨でも降らなければ、屋上で弁当を食って昼寝と言うのが僕のライフスタイルだった。友人と一緒に飯を喰う時もあれば、一人の時もあった。

夏休み前、灼熱した日差しが降り注ぎ、屋上のモルタルも溶けるのではないかと思われ

るある日。早飯を済ませた僕が昼寝をしている時に、それは起こった。
僕・神崎浩平と彩宮鈴香との出会いだった。

お気楽なことに、僕は天女の夢を見ていた。青く雲一つない空に七人の天女が五色の着物を着て浮かんでいた。それぞれ楽器を持って妙音を奏でていた。

(ああ、美しいな……)

そう思い陶然と眺めていると、一人の天女が舞い降りて来た。天女は寝ている僕の頭の横に舞い降りて、屈んで僕の顔を見つめた。リスのような瞳をした美しい人だった。そして天女は僕の頬に口づけをした。天女の口はびっくりするほど冷たくて、僕は目を覚ました。

目を覚ますと、天女とは似ても似つかぬ無骨な顔をした男が、冷えたコーラの缶を僕の頬に当てていて、目を覚ました僕を見て笑った。

「あはははは。ようやくお目覚めか？ 哲学者？ しかし、お前、こんな暑いところでよく寝れるえ〜」

かんらんかんらんと笑うこの男は、中学生から腐れ縁が続いている伊達正彦と言う奴だった。あだ名は『桜ヶ丘高校の伊達男』。別に美男子ではないのだが、とにかく格好が派手なのだ。なにしろ髪の毛を紫に染めている。言動もとにかく目立つ男だ。剣道部の主将を務め、全国大会で三位まで行った奴だが、原色の派手な服装と髪の毛は注意されても治らない。桜ヶ丘高校は一応制服もあるのだが、私服も許されている割と自由な高校だ。僕は面倒臭いから、学校指定のブレザーで済ませているが、制服組は学園の3割程度である。

伊達男の横ではやはり中学生からの友人である三枝明美が笑っている。

彼女はブレザーにスカートの制服組だ。弓道部の主将で、ずば抜けた腕を持つ。中学の頃から全国大会入賞している常連で弓道界では名が通っている。きりりとした整った顔は男前で同性からラブレターを貰うのを苦にしているのは内緒だ。

あだ名は『姉御』。下級生からは『お姉様』とも呼ばれている。

本人はそのあだ名を酷く嫌っているので、誰も本人の前では言わないが、僕等の間で『姉御』と言えば彼女のことである。

僕ら三人は良くつるんでいる。だから、こいつらが来るのは不思議ではなかったのだが、三枝の後にあまり見かけない美少女が隠れるように立っていたので、僕は少し緊張した。先程の夢に出てきた天女に似ていたので動揺してしまう。

「貴重な睡眠時間をうばうなよ」

ぼやきながら、上半身を起こして、缶コーラを受け取りぐいと飲む。

頭が少しすすきりした。

伊達が僕に向かって手をさしのべる。

目で「なに？」と尋ねると「百二十円」と答える。

「おごりじゃないのかよ」抗議すると、伊達は「俺が男におごるタイプに見えるか？」と言う。

確かに伊達は男におごるタイプではない。

しぶしぶと財布から小銭を出して渡すと、やって来た三人は自然に円陣を組むように座った。

(はてな?)と思った。伊達と三枝は分かる。この少女は誰だろう？

三枝に視線を流すと、こう答えた。

「あ、この子知らない？ 去年のミス桜ヶ丘よ。『絶対零度の魔女』って聞いたことない？」

噂は聞いたことがある。

と言うか写真は見ていた。伊達の秘蔵品だ。

写真に比べると遙かに愛らしく楚々としているので気づかなかった。

写真集の彼女はするどい刃物を思わせる近付きがたい美人さんだった。

彼女も制服派のようである。

ミスコンでは制服姿で現れるなり、自己紹介もせずMELLのRed fractionとか言う歌を熱唱して、それまでのイメージを払拭すると共に、歌唱力の高さで場内を興奮させたと聞いている。

ただ歌詞が英語のスラングでかなり強烈な内容のハードロックであったため、ますます近寄りがたくなったとの話だった。

そのイベント直後に写真集を出した光画部は侮れない。

ストーリーカー集団かと思われる。

「ああ。去年の文化祭で光画部が写真集一冊千円で売って騒ぎになった人か！ その節はお気の毒だったね。ども、はじめまして。神崎浩平です」

頭を下げると『絶対零度の魔女』は無言で頭を下げた。

なんだか眼力めぢからのある人だ。

くりくりした目で、科学者が分析するような感じで全身を見る。

なんか解剖された気がした。

彼女は無表情のまま「彩宮鈴香です」と名前通りの鈴が鳴るような声で答えた。

でも、声に感情がないので、僕は対応に困った。

ぽりぽりと耳の後ろを搔いてみる。

姉御が言った。

「鈴香は占い師なのよ！もう百発百中で当てるの。文学部では占い目的に行列が出来るんだから」

ああ、百発百中の占い師だとの噂は聞いた。

行列が出来る占い師だと言う。

生徒どころか教師まで占って貰っているらしい。

おかげで彼女は本来の部活が出来ずにいると言う。

「ふうん。占いはタロットかな？」

彩宮鈴香嬢に尋ねると、「ルーン占い」と短く答えた。

愛想がない。

僕は警戒されているのだろうか？

それにしても、ルーン占いとはまた奇抜だなと思った。

ルーン文字の成立は神話の世界に遡る。

北欧神話で大地の父・オージンが世界樹ユグドラシルに自らを捧げ物として釣るし、九日間槍で刺されると言う苦行の下、得られたのがこのルーン文字とされている。

アルファベットの原型であるこの文字は、現代では魔術や占いの世界で良く使われる。組み合わせで呪符にもなると言う代物だ。

「カード？ 水晶？」

そう尋ねると彩宮鈴香嬢はポケットから赤い皮の袋を取り出して僕に渡した。

ずっしりとした重みがある。

「見ていいの？」

尋ねるとこくと頷く。

袋を開けて見ると足の親指の爪ほどの大きさの楕円形で平板の水晶の石がたくさん出て来た。

中央にルーン文字が刻まれていて金箔で色取られている見事なものだ。

重く感じるのは使い込まれているからだろう。

「すごく良い物だね。手作りみたいだけど、作ったの？」

我ながら疑問形ばかりの台詞が続く。

彩宮さんは袋を受け取ると、じつと僕の目を見据えて言った。

「貰ったの。家の客人の絵描きさんから」

なんか目眩がした。

えらく時代錯誤な台詞を聞いた気がした。

黙り込んだ僕のフロアに三枝が入る。

「ほら、H区の駅前の風致地区にさ、お屋敷みたいな和菓子屋さんがあるじゃない？ 『彩

宮』って言うの。創業二百年たらなんちゃら言うの。彼女その娘さんのよ」

驚いた旧城下町のお嬢様ではないか。

なんかイメージが違う。

いや、今、眼前にいる彩宮鈴香はイメージ通り旧家のお嬢様なのだが、あの写真集や『絶対零度の魔女』の通り名がイメージにそぐわない。

「鈴ちゃん、鈴ちゃん、こいつもな『れいのうしや』なんだぜ『れ・い・の・う・し・や』。

人が昨日何したかなんて分かるんだぜ。なんか守護霊て言うの？ 奈良時代の巫女さんが憑いていて、なんでも教えてくれるんだとき。すげえ、いやな奴だと思わない？」

伊達が人の頭を掴んで揺すりながら言う。

『霊能者』と呼ばれるくらいなら、『哲学者』の方がまだマシだ。

三枝も「そう。そう」と笑って頷いている。

うん。なんか腹が立った。

いきなり人の秘密を暴露するのは宜しくない。

「そうだな。伊達がこの春、一年に渡って性欲のはけ口にしていた二年一組の小泉さんを無碍に捨てたのは知ってる。それで小泉さんは引き籠もり、今、生き霊になって伊達に憑いている。にも関わらず、お前は『本当に好きなのはお前だ！』などとのたまい、三枝と付き合い始めてる訳だ。だが、厳格な三枝は、双方の両親に挨拶すること、体を許すのは大學生になってからと決めつけて……」

「うわー！ よせ！ やめろ！ やめろって！」

「ちよっと、お願い。黙って！」

伊達が僕の頭を振り回し、三枝が力まかせに僕の口を塞ごうとする。

こいつらは僕を殺す気に相違ない。

僕が喋るのを止めると、伊達と三枝の二人は大汗をかいて肩で息して脱力している。

彩宮さんとは見ると表情一つ変えていない。

静かに野菜ジュースのストローをくわえていた。

なるほど、『絶対零度』の異名の所以が分かった気がした。

「……はあ。はあ。ホントに、もおー。神崎いー。あんた誰から聞いたのよ？」

「後のお姉さんが教えてくれる。霊能者なんて言うから悪いんだよ。姉御」

「こいつは、こういう奴なんだ。明美。本当に悪魔のような奴だぜ」

「……ほお？ 悪魔と言うか？ 外道が？ じゃあ、肉欲の塊である伊達が泣いてすがって

Bまでは許してと——」

「ごん！ と頭が鳴った。

痛かった。

三枝が両手を組んでハンマーのようにして僕の頭を殴ったのだ。

「……泣くぞ！」

三枝は本当に目に涙をためていた。

ちよつとやりすぎたらしい。

「すまん。三枝。やりすぎた。でも、小泉さんの生き霊が憑いてるのは本当だぞ。これは忠告だ。伊達の方からきちんと型をつけないと、君達の恋も実らない。それにしても、親友である僕に相談もしないとは二人とも水くさいじゃないか？」

「今日、これから話そうと思ってたのよ——でも、神崎、アンタ本当に本物だったんだ？」

「なあ、俺に幸恵の生き霊憑いてるって本当か？」

三枝と伊達がなし崩しにまた詰め寄って来る。

こいつらと居るのは苦痛ではないが、静けさは望めない。

僕の平穏な昼休みを返して欲しい。

そう思っていたら、ジュースを飲み終わった彩宮さんがぼそりと言った。

「本当に憑いてるよ。呪詛までしてるみたいだから、きちんと話して分かって貰わないといけないわ」

伊達と三枝が凍り付く。

そうか。

小泉さん呪詛までしてるんだ。

追いつめられてるなあ。心なし同情する。

でも、『絶対零度の魔女』にこんな台詞言われたら、さぞかし怖いことだろうな。

三枝には同情するが、伊達は一度とことん痛い目に会っておかないといけない気がした。彩宮さんが、ちらりと空を見上げた。

屋上の上の時計塔を見ている。

もうすぐ昼休みが終わる。

「まあ、小泉さんの件は後日ゆっくり相談するとしてだ。——結局、何の用だったの？

僕に？ 昼休み終わるよ？」

そう言うと、伊達と三枝は目を見交わして、驚きの表情をする。

そしてアイコンタクトの後、伊達が言った。

「要約するとだ、来週から夏休みな訳だ。俺たちは部活からも解放される。そこでだ、隣町に出来た巨大プールに行こうと言う話になったのだ！」

どどーんと波しぶきを上げる海を背景にする勢いで伊達は言った。

「二人で行けば良いじゃん」

僕は冷めた声で答えた。

「明美が鈴ちゃんと一緒にじゃないとイヤだと言うんだ。で、バランスが取れないじゃないか？ そこでお前さんの登場と言う訳なのだ！」

伊達は人の肩をばんばん叩きながら言う。

僕は吐息をついた。

「あのな？ 僕たち、受験生だぞ？ 遊んで良いと思うか？ そりゃ、伊達と三枝は体育大に推薦決まってるから良いよ。でも、僕はこれからエンジンかけないといけないんだ」

三枝が「ふふん」と鼻で笑った。

「鈴が神崎君となら行っても良いと言ったのよ？ どう？ 貴方に、これが断れて？」

その言葉に驚いて、僕は彩宮さんを見る。

彩宮さんは人形のような表情で、本当だとかくと頷いた。

僕は正直たじろいってしまった。

頭の中を彩宮さんの水着姿が横切る。いかん。これでは伊達と同じだ。ぶんぶんと頭を振って妄念を払い落とす。すると彩宮さんが言った。

「神崎君は私とじゃイヤ？」

「いや。全然OK。カムカムエヴリュバディーだから！」

訳の分からぬ事を口走る。

「じゃ、話は決まりね！ 来週の土曜日朝九時に駅前のミストに集合だからね！」
三枝が話を纏めて立ち上がった。伊達も合わせて立ち上がる。

「おーっ！」 三枝と伊達が気合いを入れて手を合わせた。

本当に気が合っている。こういう所は羨ましい。

「神崎君」

立ち上がりながら彩宮さんが呼びかけてきた。狼狽え気味に「なに？」と返した。

「神崎君。去年の秋くらいから春まで、部活が終わると、丘の大桜の樹のそばで半時間くらい休んでいたでしょ？」

確かにそんなこともあった。桜ヶ丘高校の名前の由来となっている大きな桜の木だ。

でも、彩宮さんが何を聞きたいのかわからない。無言で頷くと、「私ね。ずっと見てたの。神崎君、優しいね」

彩宮さんにはにっこりと笑った。

その表情がずきんと胸を打った。

彩宮さんほとっととととと昇降口に消えて行った。

僕はこうして恋に落ちた。

さてと困った。

実は初恋だったのだ。

小学生の時、担任の若い女性教諭に淡い憧れを抱いたことはあったが、それは恋ではなかった。僕は女友達も多いが、それは異性を意識していなかったからだ。僕はこれまで論理的に生きて来たつもりだった。女の子に告白されたことはあるが、そのときも論理的に今は異性に興味がないことを丁寧に説明してきた。それが酷く残酷な行為であったことに今気づいた。

恋は熱病のようだ。熱に浮かされて彩宮さんの顔が授業中でも頭に浮かぶ。授業に集中出来ないなんて、これまで一度もなかったのに！

昼休みの自分の言動が酷く滑稽で彩宮さんに呆れられたのではないかと不安になる。自分が自分でない気がする。小泉さんの苦しみが手に取るように分かる。

なんて失態！

どこが『哲学者』だ？

僕は感情と言うものが希薄だっただけじゃないか。受験と言う現実の問題が吹き飛んで、

感情が喜と哀の間をめぐりまぐるしく行き来する。口から「助けて」と声が漏れそうになる。この日、僕は中学以来続いていた皆勤賞に終止符を打ち、学校を早退した。

——本当に熱病に罹ったかもしれない。

帰路、自転車をこいでいてそう思った。あまりに暑い。道が歪んで見える。自転車がふらつく。まともな思考が出来なくなる。ただ彩宮さんが見せた笑顔だけが頭に浮かんて来るのだ。

思考が出来ないなんて小学生の三年だった『あの時』以来だ。思えば、『あの時』から僕の感情は死んでいたのかもしれない。あまりにも多くの死。地獄もかくやと言う業火。

「助けて」という声がこだまする。

吐き気を覚えて僕は家の近くの公園で自転車を止めた。家まであと少しだと言うのに、その距離が迂遠に思えた。

水気を求めて公園の奥の噴水へはいずるようにたどり着き、周囲の視線を気にせず頭を噴水に突っ込んだ。

水の中は無音だった。冷たさが心地よい。ほどよく頭が冴え、呼吸が続かなくなって、ぶはっと僕は顔を上げた。

幼子を連れた主婦達が子どもをたぐり寄せ、遠巻きに僕を見つめている。

そんな中で一人僕の側に立ってる人がいた。

「やーっ」

その人は手を挙げてひまわりの様な笑顔で僕を出迎えた。お姉さんだった。

正確にはお隣のお姉さんで、杉浦響子さんと言う。

東京の一流大学に受かって外務省に勤めたのに、すぐ辞めて実家に戻った人だ。お母さんが亡くなられて、お父さん一人になったから帰って来たと言っているけど、多分、嘘だと思う。僕にとっては本当のお姉さん以上の人だから分かるんだ。今は家事手伝いと称してプー太郎を決め込んでいる。びっくりする程の美人でモデル顔負けのプロポーションをしている。Gパンに白のTシャツと言う洒落つ気のない格好だが、ノーブラなのは如何かと思う。健全な高校生の男子には目の毒と言うものだ。

「おはよう。浩ちゃんがサボり？　な、わけないか。調子悪いの？」

そう言って、いきなり屈むとおでこをくつつけに来た。思わず尻込む。長い黒髪が顔に当たって、シャンプーの臭いがした。

「おはようって、もう昼過ぎだよ」

「私はさつき起きたんだから、おはようで良いんだよ。声かけたのに気付かないで、いきなり噴水の中に頭を突っ込むからびっくりしたわ」

浩ちゃん、熱あるね。木陰のベンチで休もう♪」

輝く笑顔でそう言って僕の手を取った。僕はなんだか救いを得た気がして、それに従った。僕をベンチに座らせると響子姉は自動販売機でポカリスエットを買って来てくれた。

「暑気中りかもしれないからね。水分取らないとね」

僕はボトルを受け取るとグイと飲んだ。グイグイと続けて飲んだ。本当に体から水気が無くなっていったようだ。ボトルの中身は半分になった。助かった。少しまともになってきた。

響子姉はベンチに上半身を預けて、天を仰ぎながらジンジャエールを飲んでいる。

何も聞いて来ないのは助かった。この自由奔放な人が横にいてだけで気持ちが悪くなる。思えば『あの時』も響子姉が一晩中抱きしめてくれたのだ。それで僕らは、姉弟になった。響子姉は、僕にとってライナスの毛布のような存在なのかもしれない。

「さつきさ」響子姉は空を見上げて言う。「久しぶりに裸の浩ちゃんを見た気がしたよ」。

僕はその言葉にむせかえりそうになる。

「浩ちゃんは『あの時』から自分を鋼の鎧で包んで、自分を見せなかったじゃない。今は苦しみを外に出せたんだ。それは良いことだよ」

そう言って、僕の顔に視線を送り、優しい笑顔を向けてくる。ああ、やっぱりライナスの毛布だ。響子さん、いや、お姉ちゃんなら相談に乗ってくれる気がした。

「響子姉って、一目惚れしたことある？」

我ながら直球だとは思ったが、他に言葉が浮かばなかった。

「——！」

響子姉は驚愕の目で僕を見るとジンジャエールを飲んだ姿勢のまま固まった。口の中のジンジャエールを無理矢理飲み込んで、響子姉は僕に向き直った。

「話してみ」

僕は昼休みの出来事をつぶさに語った。

「あはははは！」

僕の悩みは響子姉に一笑にふされた。

「一目惚れで初恋なのかあ？そりや大変だね。まあ、安心した。浩ちゃんも、ちゃんと男

の子してるんだ」

「僕には笑い事じゃないけど……こんなの初めてで、自分をもてあましてる」

「でしょうね。でも、もうWデートの約束してるじゃない。女の子は好きでもない男に水着姿なんか見せないよ。彩宮さんだっけ？ その子、浩ちゃんのこと好きだと思うよ。それにしても、その彩宮って娘凄いな。笑顔一つで浩ちゃんの鎧をはぎ取ったんだ。うん。私は見てみたい。その娘『絶対零度の魔女』なんて言われるんだから、きっと凄い娘だよ」

——あつ！うっかりしてた！

そうだ。あの彩宮さんの水着姿を見るんだ！ 心臓がバクバク言い出した。

「良いなあ。そんな初恋。私なんかときめきを無くしてるよ」

「響子姉は選り取り見取りしてるんじゃない？」

「まあね。肉欲の方は問題なく片付けているんだけど、心がときめく相手はいないなあー私はそのうち男に刺されるかもね」

「あはは」と笑いながら穏やかに無いかを言う。この人は何か危ういものを感じさせる。

そして下から僕の顔をのぞき込んで「私が慰めてあげようか？」などと悪戯っぽく言ったりするのだ。顔を真っ赤にして答えられない僕の肩をとんとんと叩いて、

「今はそれどころじゃないよね。浩ちゃん、夜の7時まで家の人帰ってこないんでしょ？」

それまで私の部屋で休んでいなさいな」

そう言って響子姉は僕の手を握って椅子から僕を立ち上がらせてくれた。

響子姉の部屋に入るのは久しぶりだった。最後に上がらして貰ったのは5年前だ。響子姉が上京する時だった。部屋は壁が板張りで天窓がある。部屋は片づいている。と言うか年頃の女性の部屋にしては、質素に過ぎる気がした。

まあ響子姉なら下着が散らかったままと言う可能性もあったのでその辺は安心した。セミダブル位の大きさのベッドがどうにも目立つ。ここで響子姉が寝ているのかと思うと、なんか生々しかった。

ベッドの横には勉強机。小学校に入学した時、買って貰ったのを今でも愛用している。机の上にノートパソコンとルーターが置いてあるのが目新しかった。勉強机には色あせたセーラーームーンのシールが貼ったままなのが、彼女らしい無頓着さだった。

部屋の中央には何故か、小さなこたつが鎮座している。僕の記憶では、このこたつは片

づけられたことがない。

昔はアイドル歌手のポスターなんかが壁に貼っていたのだが、今は世界の絶景をテーマにしたカレンダーがあるばかりだ。

唯一、女の子らしいものと言えば電灯の紐に吊された「熊のプーさん」くらいだろう。首つりしてるみたいでシュールではあったが……

ただ部屋全体に良い香りが満ちている。芳香剤の臭いじゃない。おそらく始終アロマキヤンドルを焚いているのだろうと思われた。

「はい。アサツムの良いのがあったから、煎れて来たよ。プチ・ジュールのチーズケーキもあるよん」

響子姉は明るい声で茶托を持って部屋に戻ってきた。僕はこたつの前に正座したままだ。「呆れたあ？なに正座なんかしてるの？ 浩ちゃん自分の部屋だと思って良いのよ」

良いのよと言われても、緊張するものは仕方がない。今の今まで気付かなかったけど、響子姉は異性としてすごく色っぽいのだ。フェロモン出まくりと言う感じだ。東京から帰って来て女に磨きがかかった感じがする。俯いて黙っていると、「まだ辛い？」と尋ねられた。

「いや、大分マシ。響子姉のおかげだ」
にまっと響子姉が笑う。

「足、崩しな」

紅茶を入れながら響子姉は言った。いわれるままに足を崩した。とたんにどっと疲れが出た。大きな吐息を僕は吐いた。

響子姉は無言だ。ただ微笑んで僕を見つめている。僕はなんだか間が保たなくて、ぼりぼりと耳の後を搔いたその仕草を見て響子姉は玩具をみつけた猫のように目を輝かせた。

温めたミルクを入れたポットを片手にじわじわとにじり寄って来る。

「ご主人様あ。ミルクはいかがですかあ〜？」

耳元で囁くのは止めて欲しかった。響子姉はくすくすと笑いさらににじり寄る。

「もう、ミルクは自分で入れますから。あまり近寄らないで……」

ミルクを紅茶に混ぜ、チーズケーキを頂く。

「あ、美味しい！」

思わず声に出た。

「そうでしょう？ なんか予感がしたから昨日買って置いて良かったわ」

響子姉は僕のすぐ側で胸を張った。あの、ノーブラ、Tシャツだと透けて見えるんですけど……

「なあ、響子姉、胸……」

まっ赤になって呟く。

「なに？ 見たいの？」

響子姉は笑っている。これはあからさまに苛めているのだと気付いた。

「ブラくらいしろよ。垂れるぞ」

僕は精一杯の虚勢を張って言った。

「自分の部屋でブラする子はいないよー。締め付けるからしんどいんだぞ。それに私の胸は特別。もっこり堅いFカップのロケットおっぱいなのだ」

確かに見事な隆起だけど、年頃の男の子の前で言うな。

で、なんとなく二人身を寄せ合って紅茶を啜り、ケーキを頂くことになった。さっき、起き抜けだと言っていた。多分、朝風呂をしゃれ込んだのだろう。響子姉からはシャンプーと石鹸の匂いがする。なんだか、くらくらする。今日は理性が揺るぎっぱなしだ。

ケーキを食べ終わると、響子姉はこたつの中央に置かれた籠の中から処方薬を取りだして飲んだ。

「あれ……？ 姉さん、どっか悪いの？」

「うーん。これ？ 抗鬱剤だよ」

鬱？！ 響子姉のイメージにはほど遠い台詞を聞いた気がした。

「嘘だろ？」

「ん。鬱」

怠げに響子姉は言う。

「やっぱ、『あの日』の影響は大きいわ。東京行って痛感しちゃった。私達には『あの日』は強烈だったけど……東京の人達何もないって顔してるの。東海地震がどうのこうのと言っただけで騒いでる癖に、こっちの地震はもう記憶にもないのよ。

違う所へ来ちゃったとつくづく思ったわ。——なに？ 浩ちゃん、酷い顔だよ」

そりゃ酷い顔にもなる。響子姉を勝手にライナスの毛布にしていた自分が情けない。傷ついたりしたのは僕だけじゃない。この町の人たちはみんな生き残りなんだ。それなのに超然とした振りをしていた自分が憎くなる。

「東京で……東京でなんかあったのかよ！」

絞り出すようにして訊いた。体に力が籠もってしまう。響子姉は鳩が豆鉄砲喰らったような顔をした。そして視線をそらして「ふっ」と笑った。およそ響子姉らしからぬ笑い方だった。

「どこだろうと生きてりや、何かあるわよ。やめてよ。浩ちゃん、そんな顔されたら、私困ってしまう」

「僕は。僕は響子姉に救われた。姉さん、なにか出来ることあるなら言ってよ」

「……ずるい。ずるいよ。浩ちゃん。その台詞で、姉さんなんて呼ばれたら、私、何も出来なくなるじゃない……」

響子姉は拗ねた口調でぶいと横を向いてしまった。正直分らない。僕のどこがずるいと言うのだろうか？ 考えあぐねていると、いきなり横から響子姉が抱きついて来た。勢い押し倒された姿勢になる。そして、響子姉は身をよじりながら濃厚なキスをして来た。それを拒めず受け入れてしまう自分がある。響子姉の豊満な胸の感触が、いやおうなく雄の生理現象を招いてしまう。

「流されてはいけない！」 理性が警戒警報を鳴らしている。なのに体は響子姉を抱きしめ逆にキスを求めている。

永い接吻が続いた。唇だけでこんなに感じるのか？ 僕の身体は性欲に踏みにじられている。だけど理性は不思議とあった。抱き合っている僕と響子姉を中空から眺めている『僕』がいた。

「正解よ。浩ちゃん。ここで拒まれたら私達の関係は終わっていたわ」

唇を離れた響子姉が荒い息で言った。いや。姉ではない。目の前にいるのは傷ついて助けを求めている一人の女性だ。愚直なまでに生きようと、何かにすがろうとしている危うい女性だ。

「浩ちゃん。私、今だけお姉さんやめる。そうしたら生きていけるから……」

響子姉が何を言いたいか分かっていった。なによりも僕の肉体がすでに応じている。その一方で論理的な僕が『やめる！』と叫んでいる。

でも中空に浮かぶ冷めた『僕』がOKを出していた。

この日、僕は少年から男になった。

僕は童貞を失った。

なんともお手軽でスピーディーだった……

(一)

夕食を終えて、僕は自室の布団に大の字に寝転がった。

まったくとんでもない一日だった。

ギャルゲーならフラグ立ちまくり。最終攻略編突入で喜ばしいことなのだが、現実世界では許されない展開である。伊達のことを悪く言えない。

取りあえず何を悩んで良いのか分からなくなった。学校からの連絡で、仕事先の病院から直行便で帰って来た母親が「あんた今日は何もしないで寝てなさい」とありがたいお言葉を伝えてくれたので、そそくさと夕飯を食べて、仏壇を拝んでから、自室に戻った。妹の浩美が不満げに「今日はお兄ちゃんが夕食当番なのに……」とぶつぶつ言っていたが、あれは要に拗ねているのだ。浩美も中学三年生だ。受験で気が立っている。母が夕食をした時には後片付けをさせられるのを嫌がっているのだ。後、食事に限らず家事全般に僕の方が腕が良いのも一因だろう。浩美は僕の作るご飯を楽しみにして生きている節がある。

とんとんとと階段を上って来る足音がした。あの足音は浩美だ。そしてふすまの前に立つ気配。

「入ってもいいよー」と声をかけると、すーと音を立てないようにふすまが開いた。そして、また音を立てないように閉める。なに忍者みたいな真似してるんだろ？

僕は大の字に寝たまま、顔をふすまに向けた。ゴスロリ系と言うのだろうか？ 黒のびらびらしたシャツに判別不能な英文字と十字架がプリントされたのを着て、下は黒のチェックのミニスカート姿だ。上品な顔をしているのに、こう言う格好はもったいないと思う。

浩美は追いつめられた子猫みたいに『むー』とした顔をしていた。

「どうした？ 悪いけど今日は勉強見てやれないよ。本当に疲れているんだ」

「お兄ちゃん。今日どこにいたの？ 杉浦さん家？」

びっくりした。響子姉の家から出るのを見られたのかと思った。落ち着け自分。ここは落ち着いて誤魔化すのだ。準備はOKか？ 優しいお兄ちゃん？ よし！ テラリホーだ。

「だから公園で休んで寝てしまったと言ったじゃないか？ なんて、そんなこと言うんだい？」

「ここで、優しく微笑みかける。よし。完璧だ。」

「公園でお風呂入ったの？」

浩美はさらに陰悪な表情で言った。どきんとした。もしかしてこいつもお姉さんとか憑

けているのか？だが、ここで狼狽えてはいけないぞ。余裕をかませ自分。

「そんな訳ないじゃないか。気の所為だよ。悪いけど寝かせてくれないか？」

ちよつと辛そうに笑顔を浮かべる。これで同情を引きつけるのだ。

浩美は口惜しそうな表情で視線をそらす。ここで軽く嫌みを言つて退場して頂こう。

「浩美、その服似合っていないよ。もっと可愛く清楚な服の方が似合うって」

「――」

浩美は俯いて黙り込んでしまった。だが、いつものように出て行ってはくれない。

どうしたら出ていてくれるのだろうと考えあがねていると、浩美が俯いたまま、ぼそり

と呟いた。

「……匂いがした」

「えっ？」

「響子さんが使っている石けんの臭いがした！」

心臓をぐさりと抉られた気がした。

「ウソツキ！」

そう小さく叫んで浩美は出ていた。浩美はピンの抜けた手榴弾を僕のハートに残して出て行った。

――。

どうしましょう？ 神様。僕は悪いことしましたか？

……したな。いっぱい。今日一日だけで――

どんと落ち込む。頭の中で彩宮さんと響子姉がルンバを踊っている。

とにかく、まず浩美のことは置いておこう。彩宮さんも何かがあった訳でもないから、取りあえず普通に対応しておこう。何故か浮気をしたような罪悪感を彩宮さんに感じるが、そもそも彼女ではないんだし……

そうなると思子姉がやっぱ一番問題だよな。勢いでしちゃったから避妊もしなかったし……

「いいよ。気にしないで。出来たら私一人で産んで育てるから。授かり物だもの。認知してなんて言わないから気にしないでね。一度きりの過ちだから」

事が終わってから謝ったら、響子姉は笑ってそう言ったけど、男として責任持たないと

いけないと思う。響子姉はあれで頑固だから、責任を持つとか面と向かって言うと思えるだろうけれど。

冷静になってみると。響子姉は僕なんかと比べものにならないほど追い込まれていたんだ。

寝物語に、響子姉は囁くように語った。

「浩ちゃんさ『あの日』の二日前から、泣き叫んで狂乱状態になったじゃない？『怖い！怖い！』『死んじゃう！みんな死んじゃう！』『パパが死んじゃう！』って叫び続けて、わんわん泣いて、その結果、市民病院の小児科へ引き取られたでしょ。

私も付き添ったけど、本当に狂っちゃったのかと思ったわ。あの病室には同じような子供が5人いたわね。そしたら二日後の明け方、あの大地震でしょ？幸い私達の地域は倒壊も少なくて、怪我人は出たけど死者はなかった。でも、地域の人はみんな毛布を被って外へ出た。

そしたらN商店街の空が炎と煙で赤黒く染まっていた。当時、私には付き合っている人がいたのよ。N商店街の人だった。私は両親の制止も聞かず、彼の家へ走ったわ。浩ちゃんが言っていた『死んじゃう！みんな死んじゃう！』と言う言葉の意味が分かったの。

頭の中で浩ちゃんの声がこだましていた。N商店街は酷い有様だった。殆どの家が倒壊して空襲にあったようだった。火の気と煙にまかれながら私は進んだ。火の粉が風に舞って私の髪が焦げた。物の燃える臭いが固まりみたいに口に入ってきた。

彼の家の前に行って、私は一瞬息をするのを忘れたわ。3階建てだった彼の家は巨人に踏みつぶされたようにぺちゃんこになっていた。それから私は半狂乱になって叫んだの。

『秀ちゃん！秀ちゃん！どこにいるの！私よ！響子よ！』って、そしたら家のガレキの中央あたりから『響子……』と言う彼の声が聞こえた。私は嬉しかった。まだ生きてるって。それで『秀ちゃん。どこ？出れないの？』と叫んだ。『動けない。背中になにか重い物が乗っている』『待ってて！今、助けるから！』私は必死で屋根瓦の破片を『どけていった。周りに『誰か助けて！人がいるんです！まだ生きています！』』

そう叫びながら、手を血まみれにしてガレキをどけていった。

でも、周囲のどの家もそうなの。みんな家の下敷きになっていたの。何人か大人の男の人が来て、屋根板をはがしてくれた。彼は梁の下敷きになっていた。大人の男の人たちが折れて落ちていた柱をてこにして梁を持ち上げようとしてくれた。でも、その時には火がもう目の前に来ていたの。立ってるだけで雨のように火の粉が降って来るようになった。

『あかん！ お嬢ちゃん、逃げるんや！』

周りの人はそう叫んだわ。でも、私は逃げようとしなかった。『秀ちゃん！ 秀ちゃん！』そう叫び続けた。そしたらね。秀ちゃんは『逃げる！ 響子！ 逃げてくれ！』そう叫んだの。そんなこと出来る訳ないじゃない？ 生きてるのよ？ 助け出さないと生きてまま焼かれるのよ？ 私が逃げないのを知って彼は言ったわ。『逃げる！ 俺の分まで生きてくれ！』私は無理矢理大人の人にその場から引き離された。

彼は叫んでいた『愛してる！ 愛してる！』って。

『痛い』とか『熱い！』とか言わないの。ただ『愛してる！』とだけ叫んだの。その後のことはよく覚えていない。気づいたら病院で浩ちゃんに抱きしめられていたわ。浩ちゃんは覚えていないかもしれないけど、『響子姉。生きていてくれてありがとう』貴方は、そう言ったのよ。私は泣いた。浩ちゃんを抱きしめて声を上げて泣いた。あの部屋にいた五人は誰も泣いていなかった。知っていたのね。何が起きるのか。そして周囲の人より早く、精一杯に泣いたから、事が起きてから泣くことも出来なくなっていたんだわ。浩ちゃんはずっと私を抱きしめてくれていた。『あの時』助けられたのは私の方よ。浩ちゃんが抱いてくれたから、私は秀ちゃんの死を受け入れることが出来たのよ」

響子姉と僕の記憶は逆さまになっていた。僕は響子姉が抱きしめてくれたから助けられたと思っていた。響子姉はさらに続けて僕に囁いた。

「上京してから、私、また彼氏が出来たの。思えば秀ちゃんに似ていたから好きになったのかもしれない。私は処女を捧げたわ。でもね、体を重ねる度に、彼はどんどん機嫌が悪くなっていた。」

『違う』彼はそう言うの。

『お前は俺に抱かれているとき、他の男を思ってる』って……

仕方ないじゃない。忘れられるはずがない。そう怒鳴られても私は黙るしかなかった。所詮『あの日』の出来事は私達しか分からないもの。その日も彼は怒って私の部屋を出て行った。そしてバイクの事故で死んだの。そのとき私は泣けなかった。ただ呆けていたわ。そして追いかけるように母さんの『死』が伝えられた。覚えてる？ お葬式の時、父さんは泣いたけど、私泣かなかったでしょ？ もう心の穴が広がる一方で何も出来なくなっていたの。今日、浩ちゃんが私を泣かせてくれた。私は浩ちゃんの救いの主じゃない。浩ちゃんこそが私の救いの主だったのよ」

響子姉は言い終えるとついと涙をまたこぼして、僕の胸にしがみついた。ただ抱きしめ

るしか僕は出来なかった。

やっぱり響子姉は放っておけないと思う。あんな事があっても、僕の心の中で響子姉の立ち位置は変わらない。でも、重みは随分と増した気がする。体を重ねる事はもうないと思う。でも、せめて響子姉が幸せに結婚するまでは側にいなければいけないと思った。

彩宮さんに感じたときめきは忘れようと思う。

そう決めた時、響子姉が別れ際に言った台詞を思い出した。

「浩ちゃん。良く分かったでしょ？ 人間は動物なんだよ。最後の最後ではいぎたない野生の獣だよ。だから論理的に生きようなんてやめなさい。獣としての自分を受け入れてから、正しいと思う道を歩んでね」

初めてのくせに避妊もせず、抜かずの五発を決めたケダモノの自分を思い返す。かあと体が熱を持った。『若さ故の過ちは認めたくないものだ』と言った人がいたけど、確かに認めたくない。でも、響子姉は認めて前を向いて歩けと言うのだ。

前なんて分からない。どうしても今日を振り返る自分がいる。

「ほおー」と深い深い吐息が漏れて、どっと眠気が襲って来た。僕は問題を整理出来ぬまま泥のような眠りに落ちた。

夏の朝は早い。朝焼けの光で僕は目覚めた。随分、すっきりした目覚めだった。

「よし！」自分に気合いをいれて起きあがる。母も浩美も眠りの中にいるようだ。ここは前向きに朝飯の支度でもしますか。僕にとっての前向きな姿勢なんて所詮、この程度なんだ。

ネギを刻み大根を切ってみそ汁に入れる。和食党の浩美に合わせた朝食だ。浩美の好物の温泉卵も作っておく。メインディッシュは塩鮭の焼き物。三人分だからすぐに出来上がる。青物はほうれん草のおひたし。残り物を集めて仏壇に供える。チンと叩いて両手を合わせて拝む。

「父さん。僕は男になったよ」

そんな事を呟いてみる。後ろのお姉さんはご立腹らしく姿をみせない。まあ、僕は後ろのお姉さんの奴隷じゃないし、昨日の響子姉との事だって間違っているとは思わない。

目覚まし時計がけたたましく鳴り出した。母と浩美が起き出して来る頃だ。

食卓に料理を並べてしばし待つ。

低血圧の浩美が六時過ぎに寝間着のまま起きて来た。寝癖が酷くて爆発頭をしている。

「……うー。おはよう。お兄ちゃん」

「おはよう。今日は温泉卵を作ったぞ」

「えっ？ 本当！ やったー」

浩美は予想通り喜んでくれた。

「髪、整えておいで」と言うと「うーす」と素直に洗面所に行く。あれは昨夜のことを忘れてるか、まだ寝ぼけて思い出せないかのいずれかだ。その後が続いて母も起きてきた。

浩美と同じく爆発頭だ。父のストレートのきめ細かい黒髪を引き継いだのは僕だけだ。

「おはよう。浩平。ご飯作ってくれたの？」

「昨日、心配かけたからね。今日は気分が良いんだ」

母は訝しげに僕を見ている。

「なに？ 洗面所なら今、浩美が使ってるよ。今日は早番じゃないんだろ？ ゆっくり食べなよ」

「浩平。おまえ昨日何があったの？」

母は椅子に座ってじっと見つめてくる。

「なにもないよ。ちょっと疲れが出ただけだよ」

勘の鈍い母を騙すのは簡単だ。

「そうかい？ 一日で人変わったよ。おまえ」

「男子一日合わざれば刮目して見よってね。成長期だから変わりもするさ」

みそ汁をお椀に注ぎながら何食わぬ顔の演技をする。実は心臓バクバクものだったのが自分の何が変わったのか分からない。実際、童貞失っても変わるものはなかった。その行為そのものも想像通りだった。大きな変化があったとしたら、それは響子姉の重みだけだった。

いつもより早めに家を出て登校する。昨日、早退で部活を休んだので、朝練はしっかりとやろうと思っていた。三年生になると朝練は義務ではないが、今日は心身共に鍛え直そうと思った。家から大通りに出ると突き当たりに公園がある。昨日、響子姉と出会った場所だ。その公園の入り口の柵に腰掛けて足をぶらぶらさせている女性がいる。響子姉だった。目が合った瞬間、金縛りになるかと思った。

響子姉は「やー」と手を振っている。なんとなく手を挙げて応じて、響子姉の側に行く。

「おはよう。絶倫少年」

響子姉は夏の朝にふさわしい爽やかな声で、夏の朝にふさわしくない生々しいことを言った。

その一言で頭に血が上る。僕は赤面して俯いてしまった。

「凄いな。浩ちゃんは。私、腰抜けるかと思ったよ。今も腰が痛い」

うーんと伸びをしてから響子姉は腰を叩く。その肢体を見ていると、否応なく昨日のことが頭を駆けめぐる。ぶんぶんと頭を振り理性を総動員させる。

「……その、おはようございます。なにしてるんですか？」

響子姉は一瞬、むっと顔をしかめたが、すぐ悪戯っぽい笑みを浮かべて答えた。

「ま・ち・ぶ・せ……ふふ。ストーカーみたいだね」

「ま、待ってたって？ 僕を？」

「うん。言い忘れていたことがあるからね。ちゃんと聞いてくれる？」

「はい！」思わず背筋を伸ばす。

「昨日はありがとう。そして、ごめんなさい。もう、あんなことはしないから許してね」

響子姉は頭を下げ僕を拝んだ。

「や、止めてよ。響子姉。謝らないといけないのは僕の方なんだ。……その、責任だって取らなきゃいけないと思ってる……」

「責任？ また論理で考えてる。違うの、浩ちゃん。私は嫉妬で浩ちゃんの童貞奪ったんだ。強姦したんだよ。浩ちゃんの初めての人は、私がなりたかっただけなの。だから謝りに来たのよ。責任なんて言わないで」

響子姉は必死な顔をしていた。

「……分かった。責任なんて言わない。でも、響子姉。僕は地元の大学に進学する。いつでも側にいるから、頼ってくれたら嬉しい」

響子姉は両手を胸元に寄せ、目を丸くしてしげしげと僕を見た。

「……凄いな。浩ちゃん。そんな台詞が言えるようになったんだ」

「あのお、人を幾つだと思ってるの？ それに僕を男にしてくれたのは響子姉じゃないか。その事はわすれないよ。僕だけはいつまでも響子姉の味方だよ」

響子姉は黙って立ち上がると、少し頬を染めて、コンと小石を蹴った。

しばし沈黙。

そして響子姉は顔を上げた。

「ありがとう。浩ちゃん。嬉しいよ。でも、覚悟してね。私頼るときはなりふり構わず頼ると思うから……」

「まかしてよ！」

僕は胸を叩いた。響子姉はそれでひまわりのような笑顔を取り戻した。

「じゃ、私、帰って寝るわ。浩ちゃんも学校頑張ってるね」

響子姉は駆け足で家へ戻っていた。なんだか、一つ形がついた気がした。

だんっ！ 裂帛の気合いの下、強烈な突きを胸に受け僕は道場の壁まで吹き飛ばされた。稽古を終え、僕と顧問の鳴神先生の打ち合いを眺めていた部員達から「おー」と感嘆の声が上がる。

背中と後頭部をしたたかに壁に打ち付けたが、それより胸の痛みが酷い。心臓を抉られたようだ。呼吸もままならない。苦しい息の下、「ま、参りました」と絞り出すように言う。うむと鳴神先生は開始線に戻る。僕も多少頼りない足つきで開始線に戻る。互いに「ありがとうございました」と礼をする。鳴神先生は「稽古終了！ 全員正座！」と高く通る声で言った。声は若い女性のものであった。鳴神先生は全日本女子剣道を三連覇した化け物である。桜ヶ丘高校が剣道部顧問に特別招致したのだ。剣道の世界では連覇すら困難だ。実力が伯仲しているから、連覇はほぼ不可能と言っている。その中で三連覇を去年達成した鳴神先生は、『平成の女沖田』と呼ばれている。沖田とは新撰組の沖田総司のことだ。幕末の天才剣士・沖田総司にしか出来ないと言われた『三連続突き』を鳴神先生は放つ事が出来るのだ。

ちなみに「三段突き」を継承できたのは伊達と僕だけだが、実戦で使えるレベルではない。鳴神先生の三段突きは一挙動に見えるほどに早い。噂では全国レベルの社会人男子ですら、鳴神先生には勝てないのではないかと言われている。

僕は上座へ戻る鳴神先生の後をそそと付け歩く。正座した鳴神先生に「失礼します」と声をかけ、先生の面を外す。上気した鳴神先生の顔があらわになる。学校では化粧などしない鳴神先生だが、化粧すれば人目を惹く美人さんになるのではないだろうか？ 年齢も響子姉と変わらないはずだ。

面を脱いだ鳴神先生は僕を振り返り微笑んだ。

「剣筋が変わったな。神崎。筋が一本きつちりと通った。私も高校生相手に本気でやれるとは思わなかったよ」

そう言って笑顔を向ける。

「ありがとうございます」

僕は深々と頭を下げる。が、視線は鳴神先生から離さない。別に鳴神先生に見とれている訳じゃない。剣道の世界では礼をする時も目線は相手から離さないのが常識だ。

「お前なら折り紙をつける。今からでも伊達と一緒に体大に推薦でいかないか？」

「すいません。自分の進路はもう決めていますので……」

「そうか。残念だな。よし席に戻れ」

その声に応じて、僕は上座の自分の席に戻った。三年生は上座。一，二年生は下座だ。面を外して「双方礼！」と言う鳴神先生のかげ声で正座のまま黙礼をする。「神前！

礼！」そのかけ声で全員が道場の神棚に頭を下げる。

三年生はこれで解散だが、一，二年生は汗にまみれた道場の掃除がある。夏場の剣道の激しさは、言語を絶する。かかり稽古だけで二kgは体重が減る。夏場の道場は汗で水を流したようになる。

シャワールームで汗を流していると隣のシャワールームから伊達が声をかけてきた。

「おめえ、凄えな。鳴神先生に三段突きを出させるなんて……もしかして、マゾか？」

「うん？ どちらかと言うと言葉責めのサドだが……流石にあれば避けられるものじゃないな。二段目で肩射抜かれて三段目でとどめだ。参ったよ」

「いや、俺が言っているのは、おまえが強くなったって話なんだが……今の俺じゃお前に勝てる気がせん」

「マンガじゃあるまいし、いきなり強くなったりしないよ。剣道は。試合だって三本に二本は伊達が取んじゃないか？」

「そりゃ、昨日までの話だ……」

はあ、とらしくないため息をついて伊達はシャワーを止めた。

「お前の剣は正直、木訥だった。だから出籠手とかの小技で俺に分があったんだ。今日のお前の剣は木訥だが性根が据わっていた。心技体の一致と言うのかな？ 大きな波のような勢いがあった。あれじゃ、小手先の技なんぞ通用しない。だから、鳴神先生も本気になるのさ。一体なにがお前さんを変えたんだ？」

伊達の言うことは言葉としては理解出来たが、正直、自分では分からなかった。童貞捨てたから剣道が強くなるはずもないだろう。

「自分じゃ分からない」

そう答えて会話は終了した。無言でもくもくと着替えていると思いついたように伊達が言った。

「ああ、そうだ今日の朝練、鈴ちゃんが見学に来ていたぞ」
心臓がどきりと鳴る。

「彩宮さんが？」

「鳴神先生の気合いって、本気になるどギャオス並の超音波だろ？ 学校中に響き渡る。今朝は道場の窓に見学者が鈴なりだった」

伊達はやにやと笑いながら僕を見ている。その笑顔が気色悪くて僕は目線で「なんだ」と尋ねた。

「ぶっちゃけた話、どうよ？ お前、鈴ちゃんをどう思う？」

「可愛いと思う」僕は即答した。

「ほうほう」伊達は人の顔を覗き込みに来る。

「……でも、性格とかは掴みようがない女性ひとだな。うん。不思議な女性ひとだ」

「鈴ちゃんはお前のこと興味があるみたいだぜ」

伊達は真顔で言った。どうやら真面目な話らしい。

「あのさあ」僕は切り出した。

「お前と言い、三枝と言い、彩宮さんと随分親しいみたいだけど、何時からの付き合いなの？」

「あ、俺はこの春から。明美に付き合ってくれて言ったら、強引に文学部まで連れていかれて『この人との相性占って！』って、それからかな？ 明美は一年からの付き合いらしい。鈴ちゃんって雰囲気独特だろ？ 他人を寄せ付けない感じするだろ？ 人の悩みは聞いて占うけど、自分の悩みを聞いてもらう相手がいなかったみたいなんだよ。そこに明美が現れたわけ。一年の時、同じクラスだったんだよ。あの二人。明美は頼りがいあるらしいからな、親友になったんだ。去年のミスコンも、あいつの推薦で出たんだよ」

なるほど納得がいった。確かに彩宮さんには神秘的で近寄りがたい雰囲気がある。自分からミスコンなんか出るようにも見えない。姉御なら、そんなもの気にせず付き合うだろう。しかし、あまりにも好対照な組み合わせだと思った。

「……で、なんで今になって僕がその中に巻き込まれるの？」

伊達は顔をしかめて呆れ顔をした。

「お前さ、その朴念仁ぶり犯罪的だぜ」

むっとした。伊達に犯罪者扱いされるのは心外である。黙って伊達を睨むと、伊達はやれやれと言う表情で肩をすくめた。

「ぶっちゃけた話、お前、女の子キライか？ ホモか？」

「女の子キライなら、お前からエロ本借りたりしないぞ」

「じゃあ、なんで今まで誰とも付き合わなかった？ 俺が知ってるだけでも3人振ってるぞ。お前。みんな可愛い子だったじゃないか？」

こう突き詰められると自分でも何故だろうと思った。分からない。ときめかなかったからと言うしかない。

「……ときめかなかったから」

「はあ？ なに？ それ？ 思春期の男の言葉とは思えねえ！ 普通、女の子に『好きです』って言われたらときめくだろう？」

伊達の言う普通が世間の常識なら、僕は普通ではないのかもしれない。けれど僕は昨日、自分がただの雄だと痛感している。

「それは、お前だけの常識だな。僕だってときめくことはある」

「……なるほど。選り好みがあるわけだ。色男は違うね。じゃ、直球で訊くぞ。お前、彩宮鈴香にときめかなかったのか？」

「……パスはなしか？」

「なし！」

僕は黙り込んで、耳の後ろを搔く。

「ときめいたよ」

正直に口にする彩宮さんの笑顔が頭に浮かんだ。思わず赤面した。我ながら節操がないと思う。響子姉とあんなことがあったのに、僕は同級生のろくに知らない少女にときめいているのだ。浮気性なのかもしれない。

「よし！！」

伊達は強く僕の肩を叩いた。

「そういうことならお膳立てはしてやる！ 気張れよ！ 少年！」

伊達は呵々大笑した。

響子姉、ごめんなさい。貴女の弟はとんでもない人でなしです。

(三)

昼休み。

僕たちは三年校舎の裏庭の木陰にいた。昼飯を食うには絶好の場所だが、競争率も高い。紫頭の誰かさんが授業をさぼって場所を確保したらしい。伊達の言うお膳立てがこれなら次回からは止めさせないといけない。それに周囲の視線が痛いように感じる。

ミス桜ヶ丘と並んでお弁当を広げているせいだろうか？

でも、女生徒からも痛い視線が飛んでくるのはなぜだろう？

彩宮さんのお弁当は年期の入った漆塗りのお重に入っていた。流石、老舗のお嬢様は違う。彩宮さんはこの場所で三枝と並んで座って、僕を待っていた。僕を見て彩宮さんは驚いたように目を見張った。そして感情のない声でのたまった。

「お姉さん。凄く怒ってるよ。怒らせるようなことしたの？」

「いや？ 彩宮さん、マジ見えるんだ。この女性凄く気まぐれだから、気にしないで」

僕は引きつった顔で答えた。見えるなら声も聞こえるかもしれない。後ろのお姉さんが昨日のことを彩宮さんに話さないか、僕は気が気でなかった。

僕の答えに彩宮さんは黙り込み。僕は周囲の様子と彩宮さんに気を遣う状態に陥っていた。

三枝が周囲を気にする僕の様子にクスクスと笑っている。

「なにがおかしい？」

多少、八つ当たり気味にそう尋ねると「いやー。妬まれてるねえ？」 お二人とも」と、

答える。僕が妬まれるのは分かるが、なんで彩宮さんが妬まれるのだろうか？

「なんで、彩宮さんが妬まれるのさ？」

ごく当たり前の僕の問いに、三枝と伊達が同時にため息をつく。彩宮さんは顔を赤らめながらゴボウのサラダを上品に突いていた。

「神崎は本当に朴念仁だねえ」 鈴、覚悟しなよ。靴に画鋏くらいは入ってるかもよ？」

「——ん。それ位は覚悟出来てる」

彩宮さんは無表情で頬を染めると言う器用な真似で頷いた。

「なんでだよ？」

再度尋ねる僕に三枝はこめかみを手で押さえて本格的なため息をついた。

「神崎いゝ あんた自分がどんだけモテるか分かってないでしょ？ その癖、誰にでも優しいし……タチが悪いよ。」

あんた、この二年間で何人振った？ 覚えてないでしょ？ 五人だよ。五人。振った理由

が『まだ、女の子に興味ないから』だよ。女子の間じゃ『哲学者』じゃ仕方ないかと暗黙の了解が取れていたのに、『ミス桜ヶ丘』と仲良くお弁当食べてたら妬まれる。つうか、恨まれるよ」

三枝は指を立てて僕を叱りつける。なんだか理不尽なことを言われている気がした。

「全校男子からも恨みを買うな」

うんうんと伊達も頷く。

「ちよつと待てよ。僕はモテたりしてないぞ。それに女の子とお昼ご飯なんか昔は良くやってたぞ。なんで彩宮さんが妬まれたりするのさ？」

「そりゃ、お前。二年生までの話だろう？」

もくもくと、三枝と同じ品揃えの弁当をそそくさと開いてかき込みながら伊達が言う。

「お前と一緒に弁当喰うのは女子が圧倒的に多かったろう？ あれはお前のフアン倶楽部だったのさ。で、お前の鈍さに呆れた女子は不可侵条約を結んだ訳だ。三年になってから一人で飯喰うようになったのに気づかなかったのか？」

ん？ と伊達は目線を送ってくる。

知らなかった。僕はもてたんだ。

三枝はさらに畳みかけて来る。

「鈴はねえ、協定違反覚悟であんたと付き合うんだから、神崎もきちんと守ってあげないといけないんだぞ！」

「ちよつと待ていー！」

僕は思わず叫んだ。

「いつ、僕と彩宮さんが付き合うことになったんだ？！」

伊達と三枝は目を見交わして再び同時にため息をつく。

「鈴があんたとならプールに行っても良いって言ったと言ったでしょうが？」

「お前も鈴ちゃんは可愛いと言うたべ……」

だから、伊達！ そういう恥ずかしいことをばらすな！

「鈴はあんたの子供頃から知ってるって言ってたわよ！」

三枝がたたみ込む。

「……へっ？」

思わぬ言葉に我に返った。思い返したが、こんな可愛い娘が側にいた記憶がない。

「僕たち、子供の頃、会ってた？」

「……ん」

彩宮さんは小さく頷く。

「思い出せないなら良い……」

彩宮さんはそう呟くと黒豆をつまんだ。無表情なのがなんだか怖い。必死で思い出そうとしたが、どうしても思い出せない。

「……彩宮さん、ごめん。思い出せない。なんかヒントくれない？」

愛想笑いを浮かべて、彩宮さんを押む。

彩宮さんは三秒ほど真っ直ぐ僕の瞳を見つめてた。やっぱり眼力が強い。そして彩宮さんは「やっ」と拒否して、そっぽを向いた。この怒り方は知ってる。妹の浩美が最近やる怒り方だ。根が深いから、関わらぬ方が良い。

「くわばら。くわらば」

伊達が囁く。お前がするな！

「今日は部活終わったら、鈴の家行くから覚悟しておきな」

三枝がにやりと笑った。

「聞いてないぞ！ そんな話！」

僕の抗議は三枝の一言で却下された。

「今聞いたでしょ？」

三枝は指をぴつと立っててのたまった。三枝はどうやら本気で僕と彩宮さんをカップリングさせる気のようなだ。見合い写真を持ち歩いて、結婚勧めるおばさんみたいだ。そりゃ、悪い話ではない。気持ち嬉しい。けど、昨日の今日で彩宮さんの家に行くのは如何なるのかと思った。

響子姉のこともあって、彩宮さんのことは諦めようと思ったのは昨日の晩だ。妹の浩美も、機嫌を損なわせる訳にはいかない。やはり、ここは断ろう。

「いや。今日は母が遅番なんだ。妹を一人に出来ないから行けないよ」

そう答えると、三枝はむーと頬を脹らませる。案外可愛い表情になることに今気づいた。彩宮さんは小首を傾げるような仕草で、こちらを見てる。人形のように表情がやはり読めない。

「なんだ、浩美ちゃんなら大丈夫さ！ そんなに遅くならないし、俺がメールしといてやるよ！」

伊達はズボンのポケットから携帯電話を取り出し、素早い仕草でメールを打った。

なんで、こいつが浩美の携帯のメアドを知っているのだろう？　なんだか癪に障った。返信は速攻で来た。伊達はそれを見てVサインを出す。携帯をずいと僕に見せつける。『分かった〜♪　お兄ちゃんをヨロシクね!』

奇妙な絵文字で装飾されたメールの返信だった。

「グッジョブ！」

三枝が伊達にウインクを送る。

伊達の携帯を見つめたまま動かない僕の背中を三枝が叩いた。

「どう？　断る理由。他にある?」

「……いや。ない」

僕は白旗を上げざる得なかった。念のため僕も浩美にメールを打ったが、部活が終わっても返信は無かった。

H区は桜ヶ丘高校の最寄り駅から一駅行ったところにある。お屋敷が多い場所だ。小高い丘には城跡がある。

僕たち4人は、空いた普通電車で並んで座っていた。夕日の赤い光が車内を照らしている。

伊達と三枝の会話を遠くに聞き、適当に相づちを打ちながら、僕はぼんやりと夕日を眺めていた。彩宮さんは借りて来た猫のようにおとなしかった。なんだか家に近づくほど、おとなしくなるような気がする。

「おい。着いたぞ」

伊達に言われて、はたと我に返った。電車を降りて皆に聞く。

「なあ、なんで彩宮さんの家へ行くわけ？」

僕の問いに伊達と三枝は顔を見合わせる。確かに今更の質問だった。

「表向きは勉強会なんだけどな……」

伊達が言葉を詰まらせる。

「小泉さん対策して欲しいのよ。神崎は靈感あるし、鈴は言うまでもないでしょ。二人ともなんとか助けてね」

三枝が僕と彩宮さんを押さえる。僕はこめかみを押さえた。それならそうと言って欲しかった。友人とは言え、修羅場に巻き込まれるのはご免だった。それでも僕は女の子に頼まるとイヤとは言わない主義だ。で、僕は耳の後ろを搔く。

「姉御の頼みじゃことわれないな……」

吐息と共にそう呟く。

伊達と三枝が「すまん」と頭を下げた。

いや、伊達よ。悪いがお前が頼めば断っていたよ。三枝が女の子だから行くだけだ。

彩宮さんの家は、駅前之城下町を通り抜けた坂の上の高級住宅地にあった。漆喰の土塀に囲まれた純和風のお屋敷が彩宮さんの家だった。門の上に防犯カメラがある。チャイムを鳴らした彩宮さんは、仇を見るような目つきでカメラを見据えながら「私です」とインターホンに語りかけた。

門はなんとお手伝いさんが開けてくれた。お手伝いさんなのである。もう、僕のような市井の民には想像出来ない世界だった。

「あら？ お嬢様、お客様ですか？ ご連絡いただければ、ご用意いたしましたのに。あら、三枝様も」

人の良さそうな中年女性は三枝と面識があるらしい。お手伝いさんは僕と伊達を品定めするような目で見た。つうか、あれは確実に品定めしている目だった。僕はぎりぎり合格したようだが、派手な格好の伊達はあからさまに怪しげな視線を送られた。

「こんにちわ。お世話になります」

流石、弓道部の主将。三枝は折り目正しく礼をする。僕と伊達もそれに習い、礼をして名を名乗る。僕らも剣道部だ。礼儀作法は厳しく仕込まれている。お手伝いさんの僕らを見る目が少し変わった。

「では、客間のほうにご用意いたします。お嬢様」

「ちよっと勉強教えてもらうだけだからいい」

彩宮さんは本当に無機質な声で答えた。

「私の土蔵でもてなすから、来なくて良いわよ。藤沢さん」

とりつく島もない。彩宮さんはきびすを返すと母屋ではなく裏庭と思える方向に進んで行く。三枝は「藤沢さん」と呼ばれたお手伝いさんに「本当におかまいなく」と頭を下げて、彩宮さんの後を追って行く。僕と伊達は呆然としたまま、彩宮さんと三枝の後を追った。

——土蔵だった。

本当に土蔵だった。普通の木造二階建ての家くらいの大きさの土蔵だ。彩宮さんは鉄製の扉の門の錠前を古びた鍵で開けた。ぎぎいと重い音で鉄製の扉を開くと、そこは洋風の玄関になっていた。靴を脱いで上がると、赤い絨毯が敷かれた居間になっていた。度肝を抜かれた。普通、土蔵は倉庫代わりで、こんな装飾は施されていない。彩宮さんが玄関横のスイッチを入れるとシャンデリアが点った。その部屋にはアールデコ調の造り付け家具とTVがあった。赤絨毯が敷かれている。桐の大きな座卓が置いてあり、そこに座るよう言われた。

土蔵の外観と、中との差異に僕と伊達は開いた口が塞がらなかった。

「ちよつと着替えてくる」

彩宮さんは無機質な声で言うと、玄関側の階段を上がって行った。

彩宮さんがいなくなると、急に緊張が解けて僕と伊達は大きな吐息をついた。三枝はチエシヤ猫のように、にやにや笑っている。

「驚いたでしょう？ 次はもつと驚くよ」

「こんなだったら、俺、ちゃんとした制服で来たのに……」

伊達は三枝にそうこぼす。

「あんたは髪の毛戻さないと次は敷居またげないよ」

三枝はくつろいだ様子でくすくすと笑う。

「驚くって何に？」

「鈴の私服。パンチ力あるよー」

三枝はそう言うのにんまりと笑う。なにかをたくらんでいるような、宜しくない笑顔だった。

「お待ちせしました」

そう言っつて、足音も立てずに二階から下りて来た彩宮さんは着物姿だった。振り袖でも浴衣でもない。付下げと言う普段着用の着物だ。淡い桃色の下地に見えるのは、白地に桜吹雪を描いてあるからだ。帯は淡い緑色だった。

僕は見とれて声が出なかった。確かにパンチ力がある。蔵に着物の美少女とは耽美小説のような設定ではないか？

「おおー！ スゲエ！ 鈴ちゃん、無茶綺麗やん？！」

大声で騒ぐ伊達の横で、僕は黙り込むしかなかった。僕は想像を絶した出来事に遭遇す

ると黙り込む癖がある。周囲の人間は、物事に動じないと見ているようだが、違う。殻に籠もって動けなくなっているだけだ。そんな僕の背中を伊達が叩きつける。

「神崎いー！ こういう時はちゃんと感想を言うべきだぞ！ しかめっ面してるんじゃないやねえ！」

彩宮さんは、ちらりと僕に視線を流した。明らかに返事を求めているのは僕でも分かった。ちよつと上ずった声で僕は感想を述べた。

「その、凄く似合ってる。お人形さんみたいだ」

「家では着物で過ごすように言われているの」

彩宮さんは頬を染めて俯くとぼそりと言った。

「パンツもはいてないんだよ」

そう囁く三枝の頭をぽかりと彩宮さんは叩いた。驚いた。三枝の頭を叩けるんだ。彩宮さんは。

「お茶の用意してくるね」

彩宮さんはそそくさと居間の奥へと進む。簡単な炊事場もあるらしい。この土蔵には。

「ああ、私も手伝うよ」

姉御はそう言って立ち上がり、彩宮さんと共に奥へと消えた。

女二人が消えた後、僕と伊達は顔を見合わせ、大きな吐息をついた。

「着物は反則だよなあ」

伊達はそう言って座卓の上に上半身を倒す。

僕は後ろ手をついて、背中をのけぞらせた。

「確かに。パンチ力あるわ……」

着物姿の彩宮さんは本当にお人形さんのようで、触ると壊れそうだった。

「パンツはいてないんだ……」

伊達が脱力したように呟く。そこが感心するポイントなのか？ 伊達よ？

「想像しただけで、俺、勃ちちまった……」

本当に肉欲の塊なのである。この男は……

「羨ましいよ。お前の性格」

僕は吐息をつく。

「僕はダメだ。あんな姿見て、そんな想像は出来ない。なんか、ますます遠くなった感じだな。……流石は『絶対零度の魔女』。つけている隙なんかないよ」

伊達は無言でしばらく僕を見つめた。そして上体を起こすと、今から試合をするかのような目で僕の顔を覗き込んだ。

「お前な。少しは男見せろや。お前の守備範囲が狭いのは知ってる。お前の基準はお隣のお姉さんだからな。だがな、あんな美女そうそういるもんじゃねえ。それに女は外見じゃねえぞ。鈴ちゃんの方からアプローチかけているんだ。お前が応えないで、どうするよ？ そりゃ、俺はお前から見れば性欲魔神かもしれん。だがな、健全な高校生男子なら普通だよ。」

お前さんは、いかれてる。どこで間違えたのか知らんが、まともじゃない。これからもそんな態度取るんなら、ケツの穴に竹刀突っ込んでやるからな！」

響子姉の話題が出たので、正直うろたえた。伊達はどういう訳だか本気で怒っているらしい。しかし、彩宮さんは本当に僕にアプローチしているのだろうか？ なんだか、伊達と三枝に、なし崩し的にそういう形に嵌められている気がするのだ。

「OK。分かった、伊達。尻に竹刀突っ込まれるのはゴメンだ。努力するよ」

伊達は納得のいかない顔でしばらく僕を見つめていたが、ふいと横を向き黙り込んだ。

男二人の沈黙が気まづくくなる前に、三枝のキヤイキヤイ騒ぐ声と共に彩宮さんが台所から出て来た。

彩宮さんはお盆にティーカップとティーポットを持っている。三枝はやはりお盆にケーキを乗せていた。

「プチ・ジュールのチーズケーキだぞ」

三枝は笑顔で言う。響子姉の幻影が頭を通り過ぎる。どういう偶然だ？ これは？

彩宮さんは丁寧な仕草でティーカップに紅茶を注ぐと、ティーカップをそれぞれの前に並べる。ティーカップはマイセンだった。流石にお金持ちは違う。目の前のティーカップからは芳潤な香りがした。

「これ、アールグレイ？」

独特の香りに僕が尋ねると、彩宮さんはかすかに微笑んだ。

「うん。詳しいね。神崎君」

「知り合いに紅茶好きがいるんだよ。子供の頃から飲まされてるから、覚えてんだ」
紅茶を一口飲むと芳香が口中に広がった。この茶葉は間違いなく最高級品だ。

「凄いな。この茶葉」

「フオートナムメイソンから仕入れているの」

彩宮さんは小首を傾げて微笑んだ。そのなんと言うか凄く可愛い。どぎまぎする。

「神崎が紅茶に詳しいとは意外だわ」

三枝が言った。

「なんつうか、味とか品質なんかには無頓着だと思っていたわよ」

大きな誤解である。そりゃ、出されたものは残さず食うが、食へのこだわりは人一倍強い。ウチでの料理は、最近では僕が一手にまかっていると行って過言ではない。無添加の本物自然食を仕入れて料理しているのだ。

「このケーキ。無茶旨うまだぞ！」

伊達が叫んだ

。この騒がしい二人がいるおかげで、僕は彩宮さんとの間を保っている。

「プチ・ジュールのケーキは基本は予約制だし、夕方には売り切れるんだよね」

三枝はそう言いながら、案外上品な仕草でケーキを口に運んでいる。まあ、食べながら喋ると言う時点でお上品ではないのだが。

「……そろそろ始めようか？」

彩宮さんのその一言で、暫しの穏やかな時間は終わった。

彩宮さんは黒いビロードの布を広げて、赤い革袋に入ったルーン文字の石を全部、布の上にばらまいた。

「……伊達くん」

彩宮さんは強いまなざしで伊達を射抜く。

「目を閉じて、石をかき混ぜて一個ずつ石を選んで。選んだ順に左から三枚並べて」

「お、おう」と伊達は流石に緊張した様子でルーン文字を刻んだ水晶を混ぜると自分の前に三枚並べた。

左端にニイドの逆位置。真ん中にハガル。右端がウインの正位置と出た。

(ありゃ？ ハガルが出ちゃったよ)

僕は内心そう呟く。ルーンには詳しくないが、ハガルが大功に近い意味を持つ事は知っている。

彩宮さんは氷の彫像のようにその石を見つめていた。やがて無言で伊達の前の石を回収し、上から粗塩を振ってかき混ぜる。

「明美」

短く凜とした声で三枝を呼ぶ。

「はい！」

三枝は背筋をピンと伸ばして答えた。三枝も緊張しているらしい。

「貴女も今の要領で石を三枚引いて頂戴。伊達君のこと思ってるね」

三枝は緊張した面持ちで、堅く目を閉じると石を引いた。三枝が引いたのは、左からエー・ラグ・ウインであった。全部、正位置である。ウインのルーン文字は僕も知ってる。大吉みみたいな意味の石だ。

彩宮さんは、きつい目線で三枝が引く石を見つめていたが、ウインの石が出ると、軽く吐息をついた。

そして彩宮さんは自分でも一枚石を引いた。ラグの逆位地だった。

「結論から言うわね。貴方達は上手くいく。結婚するかもしれないわ。でも今の伊達君の状況は最悪。小泉さんは伊達君と復縁したい一方で、激しく貴方を呪っているわ。懐柔策はないわね。貴方達が付き合っている事は隠した方が良いわ。そうすれば、明美の力で伊達君は守られる。でも、ばれたらダメ。三すくみになっちゃうわ。卒業するまでは、貴方達の内緒にして。私から言えるのはこんなところよ」

彩宮さんはそう言い終わると僕を見た。

「神崎君はどう読んだの？」

「読んだって、ルーン文字かい？ それなら僕には知識がない、でも二人の未来にウインが出たのは良いことじゃないかな？ 彩宮さんが最後に引いたのは、小泉さんの現状だよね？ ラグの逆位地と言うことは嫉妬と恨みを現すんだよね？」

三枝はぼかーんと僕を見た。

「……神崎。あんた詳しいじゃない？」

「詳しくないよ。中学の時に嵌ったけど、もう文字の意味もうろ覚えさ」

「……俺、他に好きな女が出来たって幸恵に言ったんだけど、大丈夫かな？」

「大丈夫じゃない。事故とかには気をつけて。明美を大事にしていたら幸せになれるよ」

彩宮さんは冷徹な声でそう言うと、再び僕を見る。何か問いたげな目だった。

「……なに？」

そう問うと、

「後のお姉さんが何か言ってるでしょ？」

怖いなと思った。彩宮さんは本物の霊能者のようだった。

「まあ、言ってるというか、イメージは来てるけど……」

「どんなイメージ？」

三人揃って尋ねて来る。

「いや、多分、呪詛返しの方法なんだと思うけど……寝る部屋の真ん中に盥たらいを置いて、井戸で汲んだ水を張って、その中に、背面に黄色の五芒星を書いた鏡を置いて寝ると……」

「——うわ！ エグ！」

彩宮さんは珍しく、表情を変え、嫌悪を現した。

「なに？ そうしたら、俺、幸恵の生き霊から助かるの？」

伊達は僕と彩宮さんを交互に見ながら、身を乗り出した。

「お姉さんが言うなら確かだけど……ヤバイよね？」

僕はちよつと冷や汗をかきながら、彩宮さんに問う。

「……単なる呪詛返しじゃないわね。倍返しよ。やれば小泉さんは死ぬか狂うかどちらかね……」

ああ。やっぱりそうなんだ。後のお姉さんはキツイからなあ。

「なに？ やっぱ、神崎も霊能者なんだ！」

「違うよ！」

姉御の突っ込みに僕は即答した。本当である。僕は幽霊が見えたりしない。気味が悪いとかの気配を感じることはあっても見えはしない。お姉さんが気まぐれに映像を送ってくるだけなんだ。

「子供の時は後のお姉さんいなかったよね？ どこで拾ったの？」

彩宮さんが小首傾げて尋ねてくる。なんとなく、これがこの娘の甘えの表現なんだなと思った。でも、子供の頃って何時だろう？ 彩宮さんのことが思い出せない。

「奈良の神社で括られていたのを助けたら、取り憑かれたんだよ。殺されかけたんだぞ。契約しておとなしくなったんだ。大変だったんだぞ」

僕は三人に言い聞かせるように言った。

「ああ、神崎は人気のない夜の神社とか好きなものなあ？ 拾うのは分かるわ」

伊達が頷く。

「どんな契約したの？」

彩宮さんが僕の顔を覗き込むようにして尋ねる。誰にも話していない秘密なんだが、後のお姉さんからサインがない。言っても良いらしい。

「僕が死んだら一緒に上がるよ」

「なに？ それ？」

三枝と伊達がはもる。彩宮さんは次の言葉を待っている。

「後のお姉さんは人柱にされて、神社に括られていたんだよ。それを解放してあげたら、崇って来たんだ。誰でも良いから恨みを晴らしたかったんだな。だから、僕が死んだら一緒に天界に上げる。そう約束したんだよ」

「何？ それ？」

「意味、分からねえー」

三枝と伊達が抗議に似た声を上げる。仕方がない真実なんだから。それに理解されようとは思っていない。こんなことは一生分からない方が幸せと言うものだ。

彩宮さんは大きく溜息をついた。

「——呆れた。人が良いにも程があるわ」

彩宮さんの言い口に僕は少しむっとした。

「……仕方ないじゃないか。崇神なんだから。僕の所で止めておかないと、誰か死ぬんだよ？」

彩宮さんはじつと僕の瞳を射抜くように見る。

「それが男性だったら、貴方、助けた？」

彩宮さんはずばりと言った。痛い所を付く。僕は言葉に詰まった。確かに男なら相手にしない。近付かない。僕が黙り込んだのを、彩宮さんは肯定と受け止めたようだ。

「ほらね。女なら誰にでも優しいのよ。神崎君は。そういうの節操がないと言うのよ」

表情を変えずに歯に衣を着せぬお言葉をおっしゃる。彩宮さんって本当はキツイ性格なのかもしれない。

「神崎って生身じゃない女が良いんだあー！」

三枝が驚いたように言う。

心外である。なんだか人を変態のように言う。

「そういうんじゃない。今日だって三枝が頼んだから来たんだ。伊達の頼みなら見捨てたさ。言おうとする意味分かる？ 男は自立しなきゃいけないじゃないか。女の子守るのは男の役目じゃないか！」

「……ひでえーな。お前」

伊達がジト目してるが気にしない。

「――神崎って、古風だなあ。今は女が男守る時代だよ。それに、そんなに困った女の子助けてたらキリがないし、誤解されるよ」

三枝はしみじみと語った。彩宮さんは妙に怜悯な表情で頷いていらっしやる。

「話がそれてない？ 小泉さんの生き霊対策じゃなかったの？」

あえて話題を戻してみる。

「だから、あれだろ。要するに俺も明美も卒業まで今まで通りの対応をしていれば良いの
だろ？」

伊達は樂觀していらっしやる。気楽で羨ましい。生き霊の怖さを知らぬのだろう。

「彩宮さんが言ったのは対処療法だよ。仲良く同じお弁当食べてる場合じゃないよ」

僕は表情を消して言った。姉御と伊達が凍り付く。彩宮さんは静かに眼を閉じた。滅多に出さない僕の地の顔だ。大概の人は恐怖する悪魔の顔だ。別に般若のような形相になる訳ではない。彩宮さんのように表情が消える訳でもない。逆に薄っすらと笑みを浮かべていたりする。曰く、僕の地顔は「悪魔が心臓を鷲掴みにしたときの顔」なんだそうだ。慈愛と酷薄さが同居したあり得ない表情。それが僕のもう一つの地顔なのだ。

その表情は広隆寺の弥勒涅槃思惟像に似ているらしい。

弥勒は神様なんかじゃない、人類と言う汚れが消え去った世界で只一人薄ら笑みを浮かべている魔物なのだ。

「生き霊に取り憑かれるとね、まず精神がやられる。自殺、心中を考える。初期は事故が起きやすい。交通事故などは代表だね。運が悪いと家の階段から滑り落ちて死ぬこともある。呪詛が続くと何ごとにも上手く回らなくなり、精神状態がおかしくなる。まあ、鬱になるのさ。気味の悪い夢も見るようになるしね……」

「やめて！ 神崎くん！」

彩宮さんの一喝で僕は元に戻った。

今、僕は何をした？ 伊達と三枝の恐怖を煽っていなかったか？

僕は固まっている三枝と伊達に頭を下げる。

「すまん。今、どうかしてた」

三枝は涙目になっていた。伊達は無理矢理、表情を変えて笑った。不自然極まりない笑顔だった。

「だ、大丈夫だよ！ 明美ー！ 俺が鬱になるタイプに見えるか？ そんな顔すんなって！」

「……だよ。アンタがそんな繊細な神経してるわけないか」

三枝も無理に笑った。

彩宮さんは無表情のまま、伊達と三枝を見つめている。心配なのだろう。どんなに凶太い奴でも、相手が無意識に発生させる生き霊には対応策がないのである。

——仕方ないか。

「彩宮さん、なにか紙ある。便箋みたいので良いのだけど？」

彩宮さんは僕の考えが分かったらしい。

「折り紙の方が良いでしょう？ 取ってくるわ」

彩宮さんは再び二階へ上がる。

三枝と伊達は、同時に吐息をついた。

「神崎いー！ あんた、怖すぎ。マジ、びびった」

三枝が口をとがらせて言う。

「お前がああいう顔をするとは、初めて知った。悪魔か？ お前？」

伊達が追従する。まあ、悪魔か？ 訊かれても否定出来ない自分がいるわけで、なんともし難い。

「すまない。もう、あんな顔はしない」

そう言った時、彩宮さんが下りてきた。和紙の折り紙セットを持って来た。

三枝の横にちよこんと座ると「はい」と手渡して来る。高そうな折り紙セットだ。

「鋏と筆はいる？」

「あ、鋏は貸して。筆は要らない」

折り紙の中から赤と黄色を一枚ずつ選び、半分に分けて鋏を入れて人形を作る。それに息を吹きかけて、赤を三枝に、黄色を伊達に渡した。

「はい。お守り。折って財布にでも入れておいて」

「……なんか、お前、無茶苦茶怪しいんだけど？」

伊達と言う。

「まあ、気休めさ。気味が悪くても持っててくれ。実際、僕に出来るのはここまでだ」

彩宮さんは三枝が恐る恐る手にしている赤い人形を覗き込む。

「なるほど……式を吹き込んだのね？ お姉さんの眷属？」

驚きもせず、彩宮さんは言う。本物だわ。この娘。マジ霊能者だ。

「こういう真似は霊能者みたいでイヤなんだけど、脅したからお詫びだよ。お願いだから
霊能者扱いはやめてね」

僕はおどけた仕草で三枝と伊達を拝む。

「……これ、大丈夫？」

三枝は彩宮さんに訊く。僕の台詞はスルーかよ？

「神社のお守りなんかより、余程効くわよ。大事にしなさい」

彩宮さんの答えに、ようやく三枝と伊達が安堵の表情を見せた。

そんなに怪しげだったのかよ！

僕が多少不愉快な思いをしたのは言うまでもないだろう。三枝はそんな僕の気配を察してか、テーブルの上の僕の手をそっと握った。どきりとする。柔らかい温かみのある女の子の手だった。

「神崎君……ありがとう」

上目使いに僕を見てそう言う。なんだ？ こいつ？ 滅茶良い女じゃないか！ 今の今まで気付かなかった。なるほど伊達の審美眼にかなう女だ。

彩宮さんが無表情で三枝と僕の手を見つめてる。三枝がぱっと手を離した。

「ごめん。鈴。勝手に触っちゃダメだよね」

「……別にいいけど……」

彩宮は無感情な声で答える。

僕は話を変えるつもりで、彩宮さんに訊いた。

「彩宮さんは、なんでこの土蔵に住んでるの？ この内装に水回りまで通しているから、普通の家を買える値段かけてるだろ？ 立派な母屋があるのになんで？」

彩宮さんは氷のような目で僕を見た。じっと見据えて答えない。

「——ご、ごめん。何か立ち入ったこと訊いたみたいだ」

「壊れなかったから……」

彩宮さんは、ぼそりと呟く。

「えっ？」

低い声だったので、僕たち三人は同時に尋ね返す。

「この土蔵だけは『あの時』壊れなかった。だから、あの後もここに籠もったの。どうしても母屋に行かないから、父が改築してくれたのよ」

僕たちは声を無くした。『あの事』に触れるのはお互いにタブーになっていたからだ。

『あの事』を思い出し、僕は唐突に思いだした。他人と接するのを嫌い、ずっと僕の服の袖を挿んで後に隠れていたお人形のような女の子。

「もしかして、病院で一緒だった『鈴ちゃん』？」

彩宮さんは、ぱっと花が開くような笑顔を浮かべた。

「やっと思い出してくれた！」

喜色の籠もった声を上げる。その表情が嬉しくて僕は言った。

「そうかあゝ 鈴ちゃんかあゝ 様変わりしたから、気づかなかったよ。言ってくれれば、すぐ思い出したのに。でも、良く僕のこと覚えていたね？」

「貴方、変わらないもの。入学式で貴方と出会ったとき、声も出ないほど驚いたわ。嬉しくて堪らなかった。ずっと、貴方を見つめていたの。昔みたいに気軽に声をかけられる歳でもなかったしね。剣道の練習も、放課後のランニングもいつも遠くから見ているの。明美がそれに気付いて話せるようにしてくれたのよ」

そう一気に喋ると最後に、くすりと笑って僕の顔を見た。

「昔みたいに守ってくれる？」

胸に矢が刺さるような台詞を言った。

「う、うん！」

僕はまっ赤になって、そう反射的に答えた。

伊達と三枝がはやし立てる。

こうして僕と彩宮さんは付き合うことになった。

我ながら節操がないのである。

(四)

夏休み最初の日曜日。

これでもかと言う位に陽が差す朝。

公園のベンチで伊達を待っていた僕は、とんでもなく悪い幻を見た。反射的にその幻から逃げようとしたところ、その幻が僕の両手に抱きついた。

右腕には白いインド木綿のシャツに着古した青のジーンズの美女。

左腕には黒のゴスロリ服の少女が抱きついていて。両方とも胸の谷間に僕の腕を巻き込んでいた。

「おはよー少年！」

「おはよーお兄ちゃん！」

二人とも満面の笑みを浮かべている。後ろのお姉さんがケタケタと笑い転げていた。あんた、僕の守護をするんじゃないかなかったのか？！

遙か後方に精根尽き果てた表情の伊達が見えた。

「嘘だ！ これは悪い夢だ！」

思わず叫ぶ僕に二人は笑い声を上げる。

「あら？ お姉さんを悪い夢と言うの？」

「実の妹は悪い夢？」

二人はさらに僕に密着して来る。響子姉は今更だが、浩美！ いつの間にそんなに発育した？ B？ いやCカップはあるぞ。そのわざとらしい甘え方は恐怖だぞ！

生まれて初めてのデート。Wデートとは言え、初めてのデートだったんだ。朝からシャワー浴びて、気合い入れてお洒落して来たんだ。

これは悪い夢に違いない。

きつと、僕はまだ布団の中にいるんだ。セーブポイントからやり直せるはずだ。さあ、気合いを入れて目を覚まそう！

僕は目を堅く瞑り、そして気合いを入れて目を開けた。

僕の腕を笑いながら振り回す二人がいた……。

がつくりと項垂れている伊達に僕は叫んだ。

「伊達！ 状況を説明しろ！」

「すまん。神崎。俺は朝駆けで拘束された。止められなかった」

伊達の顔は今まさに死刑を執行される罪人のそれだった。

要約すると、土曜日にショッピングモールで水着を選らんでいた伊達を浩美が発見したらしい。

浩美は伊達に声をかけた。

「伊達先輩。明日プール行くんだよね？」

にんまりと浩美は微笑みながら。悪魔の微笑みなのだが、伊達には初々しい乙女の笑みが見えた。

「お兄ちゃんと行くんだよね？」

その引っかけに伊達はまんまと乗った。

「ああ、そうだよ」と迂闊に口を滑らしたらしい。(僕は家族には図書館へ行くと言っていた。恥じらいがあって隠したのだ)

「じゃあ、私も行くね」

浩美はにぱつと笑ってそう答えた。そこで初めて伊達は罨に嵌ったことに気付いたが、手遅れだった。

なんとかなだめすかして止めさせようとしたが、浩美が言うことを聞くがない。

「いいもん。私は勝手に行くもん！」

最後には、そう言っで意地でも動かなくなった。

押し問答をしている所に(最悪のタイミングで!)、響子姉が通りかかったのだ。こういう話をやんやと喜ぶのが、響子姉だ。

「ああ! Wデートの話ね♪」

暴露したらしい。

「デートですって?」

浩美は据わった目で伊達を見て言ったそうだ。

「激しく聞いてないわ!」

日本語、間違えてるし……

で、伊達は泥沼に嵌った。「絶対に行く!」と言い張る浩美に苦渋していると、響子姉が言ったそうだ。

「じゃ、浩美ちゃん。私と行く。保護者同伴で現地別行動。これで問題ないでしょ?」

妥協策としては妥当だと伊達は判断した。甘い男である。

で、今朝方、浩美と響子姉が伊達家に朝駆けしたと言う訳だ。

僕は空を仰いだ。

青いなあゝ このまま一人帰って寝ると言うのは無理なのかなあゝ

「達観してるな? 性少年!」

意味も無く笑って、響子姉は僕の背中を叩く。他にどうしろと言うのだ? 何気に語感が違うし……

「心配しなさんな。ちゃんとデートの時間は作ってあげるから。浩美ちゃんの単独特攻よりは、なんぼかマシでしょ?」

耳元で囁く。確かにマシではあるが、浩美を止める選択肢は無かったのかなあ?

「伊達よお?三枝にどう言う気? 流石の姉御も怒るぞ」

「メールした『大馬鹿者!』と返信が来たよ」。

血の気が引いた顔で伊達は答える。姉御は怒ると怖いからなく。彩宮さんとセットで攻められたら、命が危ないかもしれない。というか、なんで僕がそんな災禍に巻き込まれればならんのだ?

「お兄ちゃんは何で、浩美に嘘ついたのかなあ?」

浩美は僕の腕を逆手に極めて言う。痛いし、怖い。

「普通、妹に言わないだろ?! こんなこと!」

力づくで手を振りほどいて、僕は言った。筋が痛んだ。

午前九時半。僕たちは駅前のミスドに着いた。乱入者のおかげで遅刻してしまったのだ。ギャルゲーだとポイントダウンも著しいシチュエーションだ。つかバッドエンディング直行だな。恋人に惨殺されたりするんだ。

おそろおそろ店に入ると姉御と彩宮さんが満面の笑顔で僕たちを迎えてくれた。

「遅いぞー! もうドーナツ食べちゃった」

姉御が叫ぶ。

「おはようございます」

席から立って、深々と頭を下げる彩宮さん。

『おい、伊達。姉御も彩宮さんも怒ってないじゃないか? 大丈夫なんじゃないか?』

僕は伊達に耳打ちする。

伊達は太いため息をついた。

『これが怖いんだよ。全く分かってないな。お前は。今日は一日針のむしろだと覚悟しろ』

伊達は怯えていた。

三枝と彩宮さんは当然私服である。三枝はパステルカラーの黄色の半袖のポロシャツにオレンジ色のジーンズと派手な服装だが、元々艶やかな顔立ちだから良く似合っていた。

彩宮さんは淡い茶色のおとなしめにフリルが付いたワンピース姿だった。うん。可愛い。

「杉浦先輩! お久しぶりです!」

三枝は立ってお辞儀する。響子姉と僕らが在校中に顔を合わせたことはないが、桜ヶ丘高校の生きる伝説だったりするので。響子姉は。

三年期末の全国実力テストをオール満点で全国トップに立ったことがあるのだ。弓道部にも在籍していたから、三枝には神格化されて見えるのだろう。

『パーフェクトビューティー』こんな恥ずかしい通り名が今も残っている。

「いやだー！ そんな仰々しい挨拶やめてよー」

響子姉は照れながらバンバンと三枝の肩を叩いた。一流モデル級の美女が高校生と騒いでいるのだ。店中の視線が集まっている。あっちのテーブルでは響子姉に見とれて呆けている彼の腕をつねっているカップルがいる。

つまりはこういうことだ。フェロモン垂れ流しの響子姉という限り、どこであろうと目立ちまくるのだ。

彩宮さんは、響子姉のテンションが下がるまで、ピンと背筋を伸ばしたまま彫像のように動かなかった。三枝とのじゃれあいが終わった一瞬の時を狙って、彩宮さんは深々と礼をした。

「お久しぶりです。お姉さん」

「――えっ？」

響子姉は一瞬言葉を失った。それも一瞬だった。

「もしかして、市民病院の五人組の鈴ちゃん？」

どういう記憶野を持っているのか、響子姉は普通ならすぐ忘れている出来事を覚えていた。

「はい。彩宮鈴香と申します。改めてご挨拶させていただきます」

無表情のまま、彩宮さんは怜悯な声で言う。強い目力で響子姉を見つめていた。

「杉浦響子よ。よろしくね。鈴ちゃん。あの時はショックだったなあ。鈴ちゃん『浩ちゃんをとらないで！』って言ったのよ」

あははと笑う響子姉に彩宮さんは、「今でもいやです。私の神崎君を取らないでくださいね」

彩宮さんはにっこりと笑みを浮かべて答えていた。

怖えー マジ怖えー 後、『私の神崎君』と言う台詞に照れたりする。

響子姉は流石に笑みを引きつらせたが、すぐ、にばーとしたいつもの笑顔で答えた。

「大丈夫よー。鈴ちゃん。こんな可愛い彼女がいるのに浩ちゃんが、こんなおばさん相手にするもんですか！ ね、浩ちゃん！」

響子姉は僕の肩をひっぱたく。なんか本気で叩いてないか？

「こちらが妹さん？」

彩宮さんは浩美に視線を移す。浩美は珍しく彩宮さんの強い視線にたじろいでいた。無

意識だろうが、僕の後に隠れようとする気配を見せる。

「ああ、妹の浩美。無理矢理付いて来たんだ。ごめんな」

僕の言葉に彩宮さんは小さく頷くと、浩美に頭を下げた。

「はじめまして。彩宮鈴香です。浩平さんとお付き合いさせて頂いています。ふつつかものですが、宜しく願います」

あ、今度は『浩平さん』だ。くらくとする。浩美は彩宮さんの礼儀正しい挨拶に口をばくばくさせていた。響子姉が浩美の肩を軽く突いた。

「ど、ども！ 神崎浩美です。ついて来てごめんなさいー！」

浩美はドタバタとした仕草でぺこりと頭を下げた。面白い。あの浩美がたじろいでいる。

「今日は楽しませようね」

彩宮さんは普段の伶俐な顔に戻って浩美を見つめながら言った。浩美はその言葉に血の気を無くして、小声で答えた。

「……そ、その、よろしく願います。彩宮先輩」

流石だ。絶対零度の魔女は、初見でこの個性豊かで我が儘な女性陣相手に、イニシヤテイブを握っていた。

さて、朝食も済ませ、プールへ行く途中、響子姉がひそひそと話しかけてきた。

「ちよつと、浩ちゃん。まさか、鈴ちゃんに私と寝たなんて言っていないでしょうね？」

心臓が口から出るかと思った。朝っぱらから天下の往来で何を言うんだ？ この人は。

「ば、馬鹿！ そんなの言える訳ないだろ？」

「あからさまに敵意を向けられている気がするのだけど……？」

「気のせいだよ。彩宮さんは人付き合いが苦手なんだ。昔もそうだっただろ？」

うーんと響子姉は小難しい顔で腕を組み、小首を傾げる。

「……確かに人見知りの激しい子だったけど、敵意は向けられていなかったわよ。昔は。ポッキーあげたら懐いたし……。」

そか！ 餌付けしないとダメなんだ。何か奢ってあげようかな？」

他人を野生動物のように言う。悪意もなく天然にそう思ってしまうのだ。響子姉は。

「あのな。頼むから余計なことはいしないでください。今日は浩美のブロックをお願いします」

本気で頭を下げて頼む。

「浩美ちゃんねえ……」

響子姉は後ろを振り返る。しょんぼりと肩を落として遅れて歩く浩美が響子姉の視界に入る。

「そんな覇気残って無いような感じだよ。蛇に睨まれたカエル？ 流石、『絶対零度の魔女』！ 石化の魔術でも使えるのかしらねえ？」

本当に浩美は元気を無くしていた。三枝が気を利かせて何か喋りかけている。兄としては心配な限りだが、伊達と並んで前を歩く彩宮さんの視線が痛く感じる。本能的にこれ以上、響子姉や浩美に関わるのは危険だと感じた。

「響子姉、悪いけど離れてくれ。浩美を頼みます。彩宮さんが見てる」

「ほっ？」

響子姉は前方に目を向ける。

「あちゃー。威嚇射撃受けてるやん。私。まあ、浩ちゃんの幸せ第一だからねえ。おばさんは退散しますー」

浩美の方へ行こうとして、響子姉は振り向いて僕を見つめた。

「浩ちゃん、あの娘。情が怖いよ。覚悟しなよ」

真顔で言った。

僕は深く頷くと伊達と彩宮さんの間に入った。

「なんの話してたの？」

さりげなく爽やかに声をかける。伊達はげっそりした顔で振り返り、僕に助けを求めた。

彩宮さんは僕を冷たく一別すると言った。

「杉浦さんが凄い美女だと言う話『パーフェクト・ビューティー』って杉浦さんのことだったんだ。神崎君、昔と同じで、相変わらず仲が良いのね？」

「まあ、本当の姉弟みたいに育ったからなあ。あれで人は良いんだよ」

「姉弟？ 本当にそれだけ？」

彩宮さんは一瞬、恫喝するような視線で僕を見据えた。僕は激しく狼狽えたが、感情の起伏が激しくなればなるほど、表情が消える性癖が幸いした。

「それだけだよ。それ以上でもそれ以下でもない」

外見は落ち着き払って、そう答えることが出来た。誰しも墓の中まで持って行かねばならない秘密がある。この歳でそんな秘密を抱えるのはどうかと思うが、響子姉とのあの事は、誰にも口外出来るものではない。

「そう……」

彩宮さんは呟くような小さな声で答えた。

「素敵なお姉さんと妹さんがいて羨ましいわ。慕われているのね」

哀しげに視線を落とす。僕はなんだか悪いことをした気分になった。でも、不器用なので声が出ない。しばし沈黙があった。唐突に彩宮さんは顔を上げ、明るく笑った。

「私ね、今日のために水着を新調したのよ」

「あ、僕も」

ぼろりとこぼす。

「どんなの買ったの？」

彩宮さんは微笑んで下から僕の顔を覗き込む。頬が紅潮した。

「トランクス。パステルピンクの。学校の水着しか持ってなくてさ。デートっぽくしないといけないかって……」

あはははと笑う。

「それよ」

彩宮さんは人差し指で僕の鼻先を差す。

「デートよ。私もデートは初めてなの。水着はねえ、裸見せるより恥ずかしいわよって明美が言うから、神崎君に見せて恥ずかしくないように、明美と丸一日かけて選んだの」
僕はこの台詞を聞くまで、女の子とプールに行くのが、どんな大事か分かっていなかった。彩宮さんの水着姿を想像して赤面する。

「ど、どんなの買ったの？」

「ふふ。ひ・み・つ。プールサイドまでおあずけよ」

「うわっ！ それって生殺しだよー！」

「そうよー デートなんだから私しか見てはダメなのよ。杉浦さんとか明美とか見つめたらお仕置きだからね。私、嫉妬深いんだからね。あ、妹さんもダメよ。貴方、シスコンばいからー！」

彩宮さんはぎろりと僕を睨む。怖い……。

「了解。善処する」

そう答えたものの、大丈夫なんだろうか？ 自分？ 響子姉の水着って裸よりエロイ感じがする。

「嵐が来るぞー」

俯いたまま、伊達がぼそりと呟いた。サラ・ユナーではない僕は「知ってるわ」と答える根性はなかった。

で、でかい……

全天候型ドームプールはまさに偉容を放っていた。夏休み最初の土曜日と言うこともあって学生と子ども連れの家族がドームを囲むように列を作ってる。

「うわぁー大きいー」

浩美がようやく本来の元気を取り戻して驚きの声を上げた。

「ホント！ 凄い大きいねえー」

三枝がそれに頷く。

対照的にげんなりした声で響子姉が言った。

「えー？ あんなに並ぶの？ 私、やだぁ〜」

傍若無人の声を上げる。

「浩ちゃん、伊達君、並ぶの任せた。私、茶店で待ってるから順番来たら携帯鳴らして」

女王様か？ 響子姉？

「さ、女性陣は涼みましよう。三枝さん、鈴ちゃん、浩美ちゃん、おいで〜 奢るよ〜」

「えっ？ でも……」

三枝が戸惑い顔で伊達に視線を送る。体育会系だから、こういうのを他人任せに出来ないのだ。

「いいよ。明美。行ってこい。三十分以上は並びそうだからな」

伊達が格好をつける。ちなみに、彩宮さんと浩美はちやっかり響子姉に付いて行っていた。響子姉は本気で餌付けをする気らしい。

「んじゃ、よろしくね〜」

響子姉は三枝の腕を引っ張りながら、喫茶店へと消えて行く。去り際に、彩宮さんはペコリと頭を下げて行った。無言である。

デートなんですけど？ カップルなんですけど……。なんで躊躇わずに見捨てるんですか？ 彩宮さん。

まあ、そんな具合で男二人でバカ話しながら待っていると、順番が来た。携帯で呼び寄せると女性陣はすぐ現れた。響子姉の餌付けは本当に効いたみたいで、女性陣は和気藹々としていた。

まあ、善哉。善哉。

更衣室の出口で待ち合わせにして、男女別れて（当たり前だが）更衣室に入る。

伊達の水着は迷彩模様のバミューダパンツだった。やけにぶかぶかに見える。

「……なんだよ？」

異物を見るような僕の視線に気づいて伊達が言う。

「いや。重装備だな？ お前なら競泳用とか履きそうなイメージだったんだが」

「女性陣の面子考えろよ。明美の水着を見るのも初めてなんだ。その、身体が妙な反応したら困るだろ？」

ああ、納得。女性陣は百花繚乱。その水着姿に本能が反応しない保障はない。

「お前も、三枝の水着教えて貰っていないんだ……」

「お前も、鈴ちゃんの水着、聞いていないの？」

「三枝と一緒に買いに行ったららしいんだが、水着は女の勝負着だからとはぐらかされた」
ぼりぼりと耳の後ろを搔く。

「杉浦さんの水着は？」

「聞きすらしてない」

「あの人は別格だからなあ」期待もあるけど、怖いよな」

「彩宮さんに他の女に見とれるなど、釘刺されたよ」

「聞いてた。鈴ちゃん、お前とだったら普通に喋るよな？」

「そうか？ お前等、二人の時、何話してたの？」

「会話にならねえよ。何を話しても、無言で刺すように俺の瞳見つめるだけだからな。明
美くらい懐広くねえといけないんだろうな」

「……お前、守備範囲広いの？」

「鈴ちゃんとか、杉浦さんは別格だよ。平気で話せるお前が分かんねえ」

伊達はそう言って荷物をロッカーに詰めて鍵をかけた。

「じゃ、行きますか？」

僕と伊達はプールサイドへ向かった。

「おおっ！」

僕は伊達と共に感嘆の声を上げた。

でかい！ 広い！ これなら多少並んでも甲斐がある。

「おい！ 見ろ！ ウォータースライダー、十メートルはあるぞ！」

「あっちの滝はナイアガラの滝だぜ！」

男二人で盛り上がっていると、いきなり背中に抱きつかれた。

「浩ちゃん、お待たせー♪」

背中に当たるメロンのように巨大でマシュマロのような双球は間違いなく響子姉のモノだった。身体の一部が変化する。

「うわー！！！」

僕は叫ぶと、響子姉の腕を振り払い、プールに飛び込む。収まれ！ 自分！

「いきなりなにをするんですか？ アンタは！」

僕はプールに下半身を隠して抗議する。そして響子姉の水着に息を飲む。金ラメのハイレグビキニの水着はゴージャスとしか言いようがなかった。ロケットおっぱいとは良く言った。Fカップの良く張った隆起に目が行く。少ない生地には溢れんばかりの肉体を押し込んでいる感じた。峰不二子さんですか？ 貴女？

響子姉の登場にプール場全体がどよめいた。気のせいではない。男ばかりか女性まで、響子姉の肢体に見入っていた。人を引きつけるオーラがあるのか？ フェロモン分泌が異常なのか？ とにかく目立つ。

「なによお？ 逃げなくても良いじゃない！」

響子姉は腕組みしてジト目でこちらを睨んで来る。

そんなに派手な肉体と水着で、思春期の少年に抱きついてはいけません。

響子姉の真横にいた伊達は前屈みで、こそこそと離れて壁際で膝を抱えて座り込む。どこかの天才探偵みたいだ。

「なに？ なんで伊達君まで逃げるかな？」

伊達も身体に微妙な変化を来してるんだろぅな……

「いや、お姉さん。綺麗すぎ！ とても側にいれません」

伊達は引きつった笑顔で答える。

「なるほど。浩ちゃんも伊達君も私のナイスバディーにノックアウトなのね？」

うんうんと僕と伊達が頷く。

「でも、今からそんなんじや、保たないわよ。私はあくまでトップバッター。これから本命にダークホースもいるんだから」

響子姉は悪戯っぽく笑った。

「なーに？ なに騒いでるの？」

響子姉の言葉に応じるように現れた声は三枝のものだった。僕と伊達は救いを求めるように更衣室の出入り口に目を向けた。

脳が発熱して視界がホワイトアウトした。

深紅のビキニ。バストは8のEカップと見た。ウエストは5⁶。ヒップは8⁷あるのかな？ あの服の下にこんな肢体が隠されていたとは、三枝、恐るべし。トータルバランスのとれた肉体は水着モデルで食っていけそうだ。伊達はおあずけを食った犬の目で三枝を見つめている。響子姉と並んでいると、更に人目を引きつける。いや、響子姉と水着で並ぶ根性が裏打ちされている肢体が素晴らしい。響子姉が絢爛豪華な華なら、三枝は深紅の薔薇だ。

集まる視線に妬みが混じり始めた気がする。

「……賑やかね」

その怜悯な声に、僕の視界は新緑の色に染まった。言うまでもない。彩宮さんの登場なのだが、正視出来ない。水着は新緑の色のワンピース。所々にパステルイエローのラインが走っている。問題はそのカッティング！

胸元とお尻のすぐ上にハート形の大胆なカッティングが施されている。メッシュで補強されているが、あまりにも際どい。見えそうで見えない所が視線を引きつける。その肢体は若鮎を思わせた。サイズは7・5・5・8⁸と言ったところだろうか？

思考とか理性は消え失せた。スリーサイズは三枝には劣るけれど、小柄でスリムだから、トータルバランスでは申し分がない。このワンピース、ビキニ着るより根性いるんじゃないだろうか？

ミス桜ヶ丘の清楚な美少女の大胆な水着は、さらにギャラリーを増やした。

「……あら？」

響子姉が小首を傾げる。

「ダークホースが来ないわね」

彩宮さんは女子更衣室の奥へ視線をやって言った。

「出て来なさいな。浩美さん」

浩美はバスタオルで身体を隠して、背を曲げてジト目で現れた。

「隠してちゃ、意味ないじゃない？」

響子姉の揶揄を含んだ声に、浩美は意を決したようにバスタオルを勢いよく外した。

……黒のハイレグ紐ビキニ……。

一瞬、呆気に取られた後、僕はプールから飛び出し、落ちたバスタオルで浩美を隠す。

「伊達ー！ お前は見るな！ 目を瞑れ！」

「いや、見るなと言われても……」

「お前に見られたら妊娠する！」

「ひでえなあー。おい」

伊達がジト目で抗議するが、もちろん却下だ。愛する妹のあられない姿を伊達なんかに見せる訳にはいかない。

「浩美！ お前もお前だ！ いつも可愛い格好をしると言ってるだろ。ここはウォータースライダーもあるんだぞ。そんな格好で水着が外れたらどうするんだ！ ここは水着も売ってるから買ってやる。ワンピースに着替えろ！」

「ヤダ！ お兄ちゃんなんかキライだ！ 杉浦さんも来るのに普通の水着なんか着れない！ ウォータースライダーなんか行かないもん！」

今までにない激しい拒絶。思わず息を飲んでみると、響子姉が割って入った。

「まあまあ、浩ちゃん。いいじゃない。似合ってるし、人目も集めてる。この歳で色気出せるなんて凄いわよ。そういう事で収めてね。今日は浩美ちゃんは私と来ているんだから」

「私も良いと思うけど……」

彩宮さんが後ろ手に半眼で僕を見据えて言う。あれは僕の狼狽えぶりを非難する冷たい目だ。

「まあ、私らも浩美ちゃんが冒険してくれたから、恥ずかしさも半減した訳だから、許してあげなよ。神崎」

三枝まで浩美擁護に走る。

伊達はと見ると「グッジョブ！」と浩美に親指を立てていた。

この女性陣を敵に回す度胸は僕にはない。

「……まあ、皆が言うなら良いけど……浩美、何があっても僕は助けられないからな」

一応、拗ねてみた。何がおかしいのか女性陣はくすくすと笑った。

それからは遊んだ。遊んだ。百メートル自由形競泳とか、流れるプールで浮き輪からの落とし合いとか。

ウォータースライダーでは響子姉が浩美を引き離し、僕と彩宮さんと伊達と三枝をカップリングで行かしてくれた。

人気のあるアトラクションなので、階段に行列が出来ている。

彩宮さんはいつの間にか手を繋いでいた。

それまでひたすら体を動かす事で妄念を紛らわしていた僕は、その柔らかな手の感触にどぎまぎした。これから体を密着させて滑り台を降りるのかと思うと、鼓動が激しくなった。

「……ねえ」

彩宮さんが顔を俯かせて小声で囁いた。

返事の代わりに手を強く握る。

「水着の感想聞いてないんだけど……」

それだけで心臓がドクンと音を立てた。

僕は無言で繋いでいた彩宮さんの手を自分の左胸に押し当てた。

「分かるだろ？ こんなにときめいてる」

啞然とした表情で僕を見上げていた彩宮さんは、一瞬で顔を朱に染めた。僕の胸から手を放し、素早く一步後ろに下がる。

「貴男と言う人は——」

顔を朱に染めたまま、まなじりを決する。

「天然の女たらしねっ！」

そう言った。

「……はい？」

思わぬ言葉に僕は呆然とする。

彩宮さんは、赤らめた顔のままそっぽを向き、「いいわ。スライダーで目に物見せてあげるから！」

はて？ なにをして彩宮さんを怒らせたのかなと考えていると、彩宮さんは僕の左腕にぎゅっと抱きついて来た。

正直、慌てた。

「ちよっ！ ちよっ、彩宮さん？」

「これ位なによ？ これからもっと凄い事になるんだからね！」

彩宮さんは悪戯な子猫のように笑った。

どうやら怒らした訳でもないらしい。

そして、ウオーターライダーは僕の意識を真っ白にする程のものであった。

彩宮さんは「きゃーきゃー」悲鳴を上げて喜んでいたが、僕は楽しむどころじゃなかった。なにしろ意志に反して体が触れる。急なカーブで彩宮さんを落とすまいと掴むと、あらぬ所へ手が行くのだ。理性が保てる訳がない。

降りきった時には肩で息をしていた。僅か数分、滑り台を降りるだけで真夏の道場ばかり稽古を三本するより疲れた。

なんだか堅めのマシユマロで出来た桃の实の様な物を思いつきり触った感触が生々しく残っていた。

彩宮さんは僕に腰を支えられた格好でプールに着水すると、とんとプールの床を蹴って前へ出る。そして「おもしろーい！」と笑い声を上げて、僕を振り返った。

「もう一回♪」

「へっ？」

あれをもう一回するのかと思うと呆然とした。

そこに後続の暴走カップルが、けたたましい笑い声と共に下りて来る。

「神崎ー！ どけー！」

「邪魔よおー！」

伊達に抱えられて滑り下りて来た三枝は、その勢いで、一瞬宙に浮き、僕の背中にWキックを決めてくれた。僕は前のめりにつんのめって、プールの水をしたたかに飲む。

「きゃははははは！」

三枝と彩宮さんが異様なハイテンションで笑った。

（彩宮さんって、こんなキャラだったけ？）

水の中でぼんやりと考える。

「よーし！ ラスト三周決めるわよー！」

三枝が叫ぶ。

あと三回これをやるのか？

なんだか天国なのか地獄なのか、良く分からなくなった。

——好事魔多し。

みんなで昼食を済ませ、三組に分かれてビーチバレーの真似事をしている時にそれ起きた。

「おっしや！ シュート!!」

プールに轟く気合いで、響子姉は浩美が上げたビーチボールを伊達の顔に叩きつける。遠巻きに見ている人から歓声が上がる。

伊達・三枝組。僕・彩宮さん組。響子姉・浩美組。

運動神経・基礎体力で伊達・三枝組が圧勝するかと思ったビーチバレーだが、観戦者が出る程の熱い接戦になっていた。

浩美はまだ分かる。小学校の二年生から僕と同じ剣道場へ通っていて、試合のレギュラーメンバーだ。運動神経も良い。

だが、響子姉がここまで天才的な運動神経を持っているとは思わなかった。どんな球でも拾うし、上背を生かしてのシュートは鋭い。

それでも伊達・三枝組の方が分があつたはずだった。問題は、響子姉と浩美の肢体を覆う布地の少なさだった。伊達は思わずたわわに揺れる肢体に見とれて、動きが一瞬遅れるのだ。

そのために先程のように顔面でシュートを受けていたりする。三枝はそのフォローに縦横無尽の動きを見せていた。

伊達の顔から落ちるビーチボールをパスの形で三枝が彩宮さんに渡す。

彩宮さんも、イメージとかけ離れた敏捷さを見せていた。受けられない球は殆ど無い。

今、三枝から回ったビーチボールを僕の前へ高く上げる。きちんとシュートポジションに上げてくれる。僕はその球を八つ当たり気味に浩美の胸へ叩きつけた。

「きゃっ！」

と悲鳴を漏らしながらも、浩美はなんとか受け止めて響子姉にパスをする。

再びシュートを決めようとした響子姉は「あら？」と声を上げて動きを止めた。

「c。」

全員響子姉の視線の先を見る。伊達が溺れていた。水の中に沈んで、虚空を掴むように

手をバタバタさせている。水深は1メートルのプールだ。普通溺れない。

「正彦ー。あんた、さつきからなにやってんのよ？」

三枝が溜息混じりに伊達の首に手をかける。

とたんに「きゃっ！」と言う可愛い悲鳴と共に三枝も沈んだ。

僕と彩宮さんは顔を見合わせ、二人同時に潜った。

三枝は伊達から手を離して、水上に出ている。

目を疑った。

伊達の右足の脛が、プールの底に三分の一程埋まっている。僕は思わず伊達の足にしがみつき、プールの底から引き上げようとした。とたんに凄いで引つ張られた。

いったん水上に出る。大きく肺腑に息を吹き込む。同様に水上に出て空気を溜めてる彩宮さんと目が合った。それでお互い何をしようとしているのか分かった。

二人して計ったようなタイミングで水の中へ潜る。

伊達の足へ向けて、唱えるは破邪の印！

「テイル
↑！」

「カーン！」

その瞬間、コンクリートのプールの底がガラス板のように透けた。

ガラス板の向こうにパジャマ姿の少女がいた。

子鹿のような愛くるしい少女だが、今は般若のような形相で伊達の足首を掴んで引つ張っていた。

元が愛くるしいだけに、その憤怒の表情は吐き気がするほど醜かった。

目が合った。

少女は驚愕の表情を浮かべた。伊達の足首を放して、向こうの闇へ消える。伊達の足はコンクリートの底から解放された。

水を飲んだ伊達は激しく咳き込んでいる。

僕は伊達の体を抱えて、プールの外に出た。

「なに？ なにがあったの？」

狼狽える三枝に「ただのこむら返りだよ」と嘘をつく。

プールサイドで、伊達は上体を起こして座り込み激しい咳を続けていた。女性陣が心配気に見守る中、僕は伊達の背中をさすっていた。

彩宮さんと言うと、僕らに背を向け仁王立ちで、野次馬達を睥睨している。その冷え

切った刃のような視線は、野次馬達を石化させて近寄らせない。

正直、助かった。大事になると後が困る。

「す、すまん。助かった」

ようやく伊達が声を上げた。

三枝を筆頭に全員安堵の息を漏らす。

「……俺、どうなったんだ？」

伊達は自分の状況を把握していなかった。僕の口からトドメをさすようなことは言えない。

響子姉が伊達の右足首を指して小さく叫んだ。

「これ、なに？！」

それを見て「ひっ」と叫んで三枝がへたり込む。

伊達の右足首には青く手の痣が浮かんでいた。

(一)

物心ついた頃から仏間が好きだった。

私、彩宮鈴香の最初の記憶は、夜の仏間。

蒼い月光がさす夜の仏間で開いた仏壇をただ眺めていたことだ。

月光に満ちた蒼い静謐。

それが私、彩宮鈴香の原初の記憶であり、私の在り方だった。

仏間を怖いと思ったことはない。幼い私には、むしろ無限に続くかと思われる長い廊下

や、無人の客間の方が怖かった。

母が懐妊した時、父は四十を超えていた。

狂喜したらしい。

だが、難産の末、母は私を抱くことなく亡くなり、父はその愛情の全てを私に注いだ。

それは歪んだ愛情だった。父は彩宮の家の跡継ぎとして私を育て上げることに執心した。

良く覚えているが、三歳の頃には茶道と富田流と言う小太刀の流派の真似事はしていたように思う。

最悪なのは私の名を決めて貰う為に、父が訪れた神社の宮司の台詞だった。

「この娘御は世にも稀なる力をお持ちです。ですが、それ故に魔を呼ぶ。七歳までは神の内と申します。幼い内は人目にさらしてはなりません」

父はこの台詞を真に受けて、事実上、私を家に軟禁した。なにしろ九歳まで、『あの時』が来るまで、私は屋敷を出ることがなかったのだ。茶道も小太刀も屋敷の茶室と道場でマントーマンで教えられた。小学校には行かせてくれなかったのだ。

だから、私は世界に子供は自分しかないのだと思っていたくらいだ。

私付きの家政婦さんとして雇われた藤沢さんと、離れに蟄居して日本画を描いていた天野さんが、私の友人と言えれば言えたかもしれない。

実際、私の幼い頃の遊び相手はこの二人しかいなかった訳だし……

ただ遊べる時間は殆どなかった。

同年代の子供以上の学力を身につけるための家庭教師による勉強は、今考えると辛いものだった。

父は仕事に出る前と帰った時に強く私を抱きしめるだけの人だった。幼少時の私の一日は父の抱擁に始まり、父の抱擁に終わるものだった。

父は嫌いではない。

父なりに私を十分に愛していると思う。

だけど、女の子にとって父親は特別な存在であるべきだ。

ただ抱擁するだけで愛情が伝わる訳もない。

自然、天野さんが身近な異性となった訳だが、幼い私にルーン文字を教えたりする変人だった。

天野さんは私の頭を撫でながら良く言った。

「鈴ちゃんの目は『菩薩眼』と言うんだよ。普通の人には見えないモノを君は視れるんだ。お外は怖いモノがいっぱい居るからね。大きくなるまではお家にいた方が良いんだよ。大きくなったら、君はたくさんの人を救うことになるから」

天野さんと藤沢さんは卓越した能力者であつたらしい。敢えて霊能者と言ってもいい。結界の張り方。異形の落とし方などを遊びの合間に教えてくれた。

そんな天野さんも私が七歳になると家を出て行った。そういう約束だつたらしい。

去り際の挨拶もなかった。ルーン文字を刻んだ水晶が入った赤い革袋を、私の机の上に置いて消えた。

突然、消えた。

今にして思えば、それはいかにも天野さんらしい振る舞いだったが、幼い私は初めて泣いてぐずった。

「さよなら」が言えなかったのが何より悔しかった。

藤沢さんも哀しげにしていたが、私とは別の理由で悔しそうだった。最初、なだめてくれた藤沢さんも、最後には一緒に泣いた。

私はその時『決別』を知った。

人は突然いなくなるものだど悟った。

いなくなるのは辛い。

だから、私はその日から『氷の仮面』を被ることにした。ただでさえ希薄だった感情を殺した。それが。私のペルソナとなった。

『あの日』のことは今でも夢に見る。

悪夢だ。

『あの日』の二日前の夜、私はいつものように一人で仏壇と対峙していた。

唐突に『なにか』が来る予感がした。次の瞬間、サッカーボール程の大きさの朱色の火の玉が、仏壇の中から私目掛けて飛び出して来た。

その時は、私は冷静だった。

その程度の怪異に驚く程、柔ではなかった。

冷静に受け止めて、火の玉が何をするか見定めようとした。火の玉は私の頭を覆った。

その瞬間、早朝の冬の山並みが見えた。私達の街を取り巻く山並みだ。まだ、払曉前の淡い闇が残っている。その山肌に沿うように青い稲光が走った。次の瞬間、大地がはじけた。ビルが倒壊した。高速道が折れ曲がった。木造家屋が巨人に踏まれたように軒並みぺしゃんこになっていた。

そして『その時』命を失った人の苦痛と無念さが怒濤のように押し寄せた。

(しまった！)

そう思った。

幻影・幻覚とシンクロしてはいけない。例え、視えても、感情を同調させてはいけないと天野さんと藤沢さんに教え込まれていた。

その為、心に防壁を張る術も知っていたし、ちゃんと張ってもいた。

だが、今視える災厄の前に防壁は紙切れほどの意味も持たなかった。

二度目の揺れが、災厄のとどめとなった。

火の手が上がった。

倒壊した家屋の中、生きたまま焼かれる人の苦痛と怨念が私を襲った。

火の玉は私の体を覆い、生きたまま焼かれる苦痛を味合させた。

私は恐らく生まれて初めての悲鳴を上げて、狂乱した。

今なら分かる。あれは時震じしんだったのだ。

ただ、大地が揺れたのではない。時間軸さえ揺らいだのだ。

時間軸の揺らぎは共振能力のある者達に災厄を伝えた。だが、それが何になる？ 決定された災厄は回避出来ない。

出来るのは逃げるだけ。

でも、それすら出来ず、生きたまま焼かれる苦痛を体現させられた私は「熱い！ 熱い！ 痛い！ 痛い！」と泣き叫び転げ回った。

藤沢さんが「お嬢様！」と真っ先に駆けつけた。その後、父や家人が集まったが、狂乱する私をただ呆然と見るしか出来なかった。

それ程に私の狂乱ぶりは激しかった。

「オンチツシタツボダハヤタミ！」

藤沢さんは真言を唱えて、私の首筋に手刀を入れた。

瞬間、「——っ！」と手を引くと、即座に私の腹を殴った。私は昏倒した。

医師の資格を持ち、私が『はしか』で倒れた時にも病院へ行かせなかった藤沢さんは叫んだそうだ。

「旦那様！ 救急車を呼んで下さい！」

父はそれで私の容態が急を要することを悟った。

実際、私は危うかったのだ。

催眠術で「今から手に焼け火箸を当てるぞ」と暗示をかけると、手に火傷の水ぶくれが出来ることがある。

私の体は幸いそういう現象は起こさなかった。けれど、強く共振した私は心が死にかけていた。

「死ぬ！」

幼心にそう確信した。

自分が味わっているのは、これから起こる災厄の体現で、私自身の未来ではないと知りながら「死ぬ」と思った。

この「災厄」は幼い私が背負うには大きすぎた。

体の前に「心」が死ぬ。そう確信するほどに「災厄」は大きすぎた。

藤沢さんは二日後の業火に焼かれる私を、気を失わせることで、一旦回路を閉じさせたのだ。

だが、それは一時しのぎに過ぎなかった。

藤沢さんもそれが分かっていたから、救急車を呼んだのだろう。

市民病院の小児科病棟には私と同じような症状の子供が5人いた。いずれも鎮静剤を打

たれ、暴れるものだからベッドに括り付けられた。

鎮静剤で眠らされていた私は、薬が切れると、再び悲鳴を上げた。

私の悲鳴を聞きつけて真っ先に来てくれたのは、看護婦さんではなかった。

同室の少年。

それが駆けつけて、「大丈夫。僕が背負うから。もう、大丈夫だから」そう言って、私を抱きしめたくれた。

父の抱擁とはまるで違う抱擁。

与えるのではなく、全てを引き受けてくれる抱擁。

信じられなかった。

同い年であろう少年の、その抱擁で私は本当に救われたのだ。

彼は私のその時の苦しみだけではなく、幼い頃から課せられた私の枷を、ただ抱きしめるだけで、彼は払い取ってくれた。

私は声を上げて泣いた。嬉しくて。そして彼にすがりついた。

そんな奇跡を見せつけたのが「浩ちゃん」

そう。神崎浩平だったのだ。

生まれて初めて見た同い年の少年。

病室で真っ先に我を取り戻し、全てを理解した上で、全てを受け止めてくれた私の救世主。

それが彼だった。

『あの日』、私達は申し合わせたように直前に目覚めた。

もう誰も泣いていなかった。

来るのが分かっていたから、もう止めることは出来ないから、だから、ただ『その時』を待つしかなかった。

浩ちゃんが「みんな、起きてる？」そう言って、病室の中央に立った。皆、ベッドから

下りて浩ちゃんの周りに集まった。

「手を繋いで輪になろう」

浩ちゃんは、そう言った。

車座に座って、皆、しっかりと手を繋いで『その時』を待った。誰も口を開かなかった。重圧に耐えて待った。

ドン！

下から上へ突き上げる強い衝撃が来た。遠くで悲鳴が聞こえた。建物全体がぐらりとたわむように揺れた。

私は歯を食いしばった。次が来る。トドメの一撃が来る。あの業火が来る。

歯を食いしばって耐えた。

熱さも痛みも来なかった。

浩ちゃんが背負ってくれたから……

私は浩ちゃんの手をしっかりと握りしめた。

そして、二度目の大地からの鉄槌。

病院の電気は消え、悲鳴と怒号が病院を満たした。

私達の病室だけが無音だった。

いや、一人だけすすり泣いている人がいた。

浩ちゃんだった。

「……ごめんなさい。ごめんなさい」

誰に謝っているのか？ 何を謝っているのか？

浩ちゃんは唯一人すすり泣いた。私は呆然と救いの主を見つめていた。

それから病院は、まさに野戦病院と化した。血まみれでうめき声を上げる人、もはや声すら上げられない人、そしてもう明らかに息をしない人たちが続々と運び込まれた。

私達五人はベッドから下ろされ、毛布を渡されて病室の隅に追いやられた。

ベッドには明らかに息も絶え絶えになった子供達が寝かされた。

私達は声もなく、その光景に見入る事しか出来なかった。

浩ちゃんは、全くの無言となり、膝を抱えて、闇の深淵をみつめるような顔に変わっていた。正直な話、その能面のような表情は怖かった。

——夜半。

私達の病室に「浩ちゃん！」と叫んで、とんでもない美少女が飛び込んできた。

手に包帯を巻かれ目は泣き腫らしているのに、容貌を崩すことなく、天使のような清楚さを保った美少女が飛び込んで来た。

「響子姉！」

それまで無表情だった浩ちゃんが立ち上がった。二人はお互いに駆け寄り、しっかりと抱き合った。

「死んじゃった！浩ちゃんの言う通り、みんな死んじゃったよー！」

錯乱していても清楚さは失われず、少女は自分より頭二つ分小さい浩ちゃんを抱きしめる。浩ちゃんも、その清楚な美少女を抱きしめて一筋の涙を流した。

「響子姉……生きていてくれて、ありがとう」

浩ちゃんはそう言った。

なんて奇跡。

僅か九歳の少年がそんな言葉を口に出るなんて……

その言葉で二人はさらに強く抱き合い号泣した。捨てられた子犬が身を寄せ合うように二人は泣いた。

その少女の人離れた美しさに陶然としていた私は我に返った。

——絆。

私には希薄で遠い物。それをこの二人は持っている。そして、今、それを確かめ合い、更に深めている。

憧憬とかを抱く前に——

頭からバケツの水をかけてやろうかしらと、私は思った。

楽しかったプールでのひとときは陰鬱なものに変わってしまった。暗黙の了解の下、皆、早々に帰り支度をするようになった。

杉浦さんも浩美ちゃんも何が起きたのかは把握していない。

だが、伊達君の足首の手形は彼女達の肝を冷やすには十分なものだった。

明美は目に見えて暗澹としていた。

更衣室では、杉浦さんが無理矢理に明るい笑顔を作り、明美に抱きついた。

「三枝さん、元気出しなよー！大丈夫だって！あんなの何かの錯覚だよー！」

「あ、ありがとうございます……そうですね。元気出します」。

明美はそう答えたが、そんな的はずれな励ましが通用する筈もない。明美は何が起きたのか理解しているのだから……。

浩美ちゃんは、どうしたら良いのか分からない表情で、ただ明美の側に立っている。

私は杉浦さんと浩美ちゃんを排除する形で明美の前に立った。

「……鈴」

明美は縋り付くような目線で、まじまじと私を見つめた。私は無言でぐいと明美を抱きしめた。そして、なるべく優しく聞こえる口調で言った。私の口調は酷く伶俐に聞こえるらしいから……。

「泣きなさい。明美」

そう囁くと、明美は私に縋り付いて、声を殺して泣いた。泣き続けた。

(慟哭すれば良いものを……)

そう思いながら私は明美を抱き続けた。

杉浦さんと浩美ちゃんはただ呆然とするばかりだ。

明美の嗚咽は続く。明美は伊達君の一件を受け入れている。だから縋り付いて慟哭したりしない。受け入れて戦おうとしている。

(強い娘だ)

そう思う。明美なら乗り越えられる。私は僅かながら安堵した。

皆で出口へ向かう。出口では神崎君と伊達君が待っていた。

伊達君は土気色の顔をしていた。まあ、当然だろう。それでも、彼は明美が泣いたのに気付いたようだ。明美の側に駆け寄り、その手を両手で握りしめる。

「すまん、明美。心配かけた」

「みんなに謝りなさい。この大馬鹿者！」

明美は普段通りに伊達君を叱る。

明美の叱咤に伊達君は私達を見回す。そして深々と頭を下げた。

「みなさん。折角の休日を無駄にさせて、すいませんでした！」

「あら、いやね〜 みんな気にしてないわよ。それなりに楽しんだもの。不幸だったのは伊達君一人よお〜」

杉浦さんは、かんらんかんらと笑う。死霊を二人も背負っていて明るさを維持できるのは大したものだと思うが、なんか気に喰わない。

「ね？ そうでしょ？ 浩ちゃん？」

杉浦さんは神崎君の肩を叩く。

神崎君は埴輪のような無表情さで、

「ああ。今日は楽しめた。伊達、三枝、誘ってくれて、ありがとうな」

などと言う。それでカチンと来た。神崎君は何かるくでもないことを考えているに違いない。

プールからの帰り道。

会話が弾まなかったのは仕方がない。杉浦さんや浩美ちゃんが話題を持ちかけるが、それに応えるはずの伊達君と明美に覇気がない。神崎君にいたっては黙々と歩を進めるので、皆から離れて前を歩いている。

私は一人前を歩く神崎君を追いかけて尋ねた。

「ねえ？ 伊達君に渡した貴方のお札。どうなっていたの？」

神崎君は驚いたように私に視線を向ける。そして吐息混じりに言った。

「灰になってた。紙幣とかはなんとも無いのに。お札だけが灰になっていたよ」

成る程。あれが灰になるならプールでの出来事も理解出来る。尋常な呪詛ではない。思いが異常に強いのか、あるいは一流の呪術を駆使しているかのどちらかだろう。今日は呪詛をかけた人間には、千載一遇のチャンスだった筈だ。私達は浮かれていたし、侮っていても。まさか、あれほどの呪詛が発動するとは思わなかった。

それでも、私と神崎君で術を破った。

あの少女。小泉幸恵さんは、今、『返しの風』に苦しんでいる筈だ。人を呪わば穴二つ放った術が破られると、その呪詛は呪った本人に祟る。これを『返しの風』と言う。

救いような話だ。本当、どうしようもない。

けれど、神崎君の顔に苦悶の気配はない。あんなことがあったのに、穏やかな仮面のような顔をしている。

それが私には無性に気に障った。

杉浦さんと浩美ちゃんには、先に帰ってもらう事にしたが、案の定、浩美ちゃんがごねた。

「兄妹と一緒に帰らないのは、おかしいわ」

そう言うのだ。

杉浦さんまで一緒になって言う。

「大丈夫よお〜 足掴まれたくらい。階段とか電車のホームで、後に誰も居ないのに突き飛ばされるなんて、良くある事じゃない？」

そう言って明るく笑う。

明美と伊達君の顔が引きつる。浩美ちゃんはすーっと青ざめる。神崎君がこめかみを押しさえながら、律儀に応えた。

「……普通、ないです。そんな事」

杉浦さんは本当に意外そうな顔をした。

「——え？ ないの？ それじゃ、待ち合わせに行こうとしたら電車が人身事故で止まるとかはあるでしょう？」

明美と伊達君、浩美ちゃんが青ざめて、ぶんぶんと首を振る。

「……あれえ〜？ んじゃあさあ、これは私だけだと思って今まで言わなかったんだけど、バイクで交差点で右折待ちとかしてたら、地面から手が出て足首掴むとか言うのはヤバイ？」

私は黙って、皆を見ていた。

明美と伊達君は目に見えて色を失っている。浩美ちゃんは半泣きになっている。

神崎君は困惑顔で耳の後ろを掻いていた。

「響子姉、バイク乗るの止める。んでもって、一緒に行ってやるからお祓いに行け。頼むから……」

「ああ、やっぱヤバイんだあ〜 じゃあ、浩ちゃん霊能者なんだし、鈴ちゃん占い師でしょ？ 私も伊達君と一緒に見て貰おうかな？」

「響子姉は伊達とはケースが違うんだから、ダメだって！ 帰ったら一度きちんと視てみるから、今日は大人しく浩美と帰ってくれよ……」

神崎君はますます困惑の表情を浮かべ、吐息混じりにそう言った。

「へっへ〜♪ 体の隅々まで見てくれるのかなあ〜？」

杉浦さんのその台詞に、神崎君は顔を朱に染めて俯いた。

カチンと来た。

『貴女には死霊が憑いているから、恋愛なんか出来ません！』

そう言っただろうかと、一瞬、殺意と共に思った。

杉浦さんは、ちらりと私に視線を投げると、神崎君の肩を叩く。

「冗談。冗談。伊達くん、こんな私でも生きているんだから、気にしたら負けだよ〜」
屈折した慰め方をする。後、私を挑発したことは心のノートにきちんと記しておこうと思ふ。

「じゃ、帰ろうか？ 浩美ちゃん？」

杉浦さんは、浩美ちゃんに、にぱつと笑顔を向けるとそう言った。浩美ちゃんは半泣きである。

「……おにいちゃん、私、こんな人と帰るのヤダよ」
もつともな意見だが、ここは帰ってもらおうしかない。

私が視線を向けると、浩美ちゃんは息を飲んで後ずさった。人を幽霊のように見るのは良くないと思う。

「あら？ 浩美ちゃん？ 言うこと聞かないと祟るわよ」

杉浦さんは浩美ちゃんに抱きついた。

神崎君は太いため息をついた。

「浩美、諦めて一緒に帰れ。響子姉に逆らうと怖いぞ。被害が僕に及ばぬように、諦めて帰ってくれ」

懇願に近かった。

「……でも」

と口ごもる浩美ちゃんに私は言った。神崎君の挙動が痛に障っていたので、多少、八つ当たりになかったかもしれない。

「——帰りなさい」

自分でも驚くほど冷たい声が出た。

浩美ちゃんは息を飲み、

「は、はい！ 帰ります！」

裏返った声で答えた。

「おおく 怖い。怖い。浩美ちゃん、慰め合いながら帰りましょうねえ」

杉浦さんは手を振り、浩美ちゃんを引きずるようにフェイドアウトした。

なんとなくつられて手を振っていた明美と伊達君は、視界から杉浦さんが消えると脱力して全身で吐息をつく。

私達だけになると、伊達君は「さっきから気分が悪い。吐きそうだ」と漏らした。

伊達君は簡単に弱音を吐くタイプではない。少なくとも、明美に心配をかけるような言動はしない人だ。余程、気分が悪いのだろう。

あれほどの呪詛だ。残滓だけでも気分が悪くなる位は十分あり得る。

まあ、その程度で済んでいるのは僥倖だと思って貰わねば困るのだが……。

「家に帰ったら軽くマッサージしてやるから、我慢しろ。歩けるか？」

神崎君は伊達君の背中をさすって、そう言った。

甘いと言うか……優しいと言うか……

まあ、そこが神崎君らしいところだし、私が惚れた一面でもあるのだけど、八方美人では生きていけない。

私は神崎君の後ろのお姉さんに視線を向けた。

神崎君の背後、少し高い所から、神崎君を見守っていた後ろのお姉さんは、私の視線にこちらを振り向くと、鮮やかな奈良時代の官女姿で大袈裟に両手を広げてみせた。

ようするに、神崎君はお姉さんが呆れるようなことを考えているのだろう。

プールに行く途中、私は言った。

「私だけを見ないとダメだからね！」と、

あれは神崎君への警鐘でもあったのだが、意味はまるで伝わっていないらしい。

本当。朴念仁だ。

伊達君の家は、まだ新しさの残る軽鉄製の注文住宅だった。震災で倒壊した家屋の殆どが、こういう地震に強い軽鉄製か2×4ツープайフォーのものに建て替えられている。

明美の話では、伊達君はこの家でお姉さんと二人暮らしをしているとのことだった。お姉さんは新地のクラブで働き、生計を一手にみているらしい。

伊達君がインターホンを鳴らすと、咽を痛めたようなかすれ声で「——誰？」と愛想のない返事が返って来た。

伊達君は陰気な声で「俺」と応える。

「玄関は開けた。入っておいで」

かすれ声が応える。

「お邪魔します」と家に入ると、玄関で小柄な女性が仁王立ちしていた。

化粧は落としてあるので、眉がない。肩までであるであろう鳶色の髪は無造作に髪ゴムで後で括られている。淡いピンクのスエット姿の女性は、いかにも寝起きですと言う不機嫌な顔で私達を出迎えた。何故か火をつけていない煙草をくわえている。

年齢不詳のその女性は開口一番に言った。

「正彦。あんた、プールで溺れたって？ この未熟者！」

「姉貴、いきなりそれはないだろ？」

伊達君は力のない声で突っ込むが、女性はそれを無視して私達に視線を向けた。

「明美ちゃんに、神崎君か。神崎君は久しぶりだね。……ん？ あんた、誰？」

伊達君のお姉さんは訝しげに私を見た。

「彩宮鈴香と申します。伊達君とは同じ高校です」

私は丁寧な頭を下げた。

伊達君のお姉さんは無言で片方の眉を上げる仕草をした。

「あっ、小枝さん。鈴、いえ、鈴香は神崎君の彼女なんです。今日、一緒にプールに行つたんです」

明美がフォローに入る。

「——おおっ！」

小枝と呼ばれた女性は声を上げた。

「神崎君の彼女か！ それなら納得だわ。この馬鹿にこんな上品な女の子と縁があるとは思えないもんな。明美ちゃんですら十分勿体ないんだから……」

小枝さんは「くくく」と笑いを抑えて言った。

「んじや、私は寝直すわ。明美ちゃん、台所にお茶うけ置いてあるから勝手にやっておいて。おやすみ」

小枝さんは、あくびを噛み殺しながら、ひらひらと手を振って奥の部屋に消えた。

なんかさばさばした女性だった。

「んじや、俺の部屋、二階だから。散らかってるけど……」

「あ、わたしお茶の用意するわ。鈴は良いから先に上がっておいて」

明美がそう言うので、私と神崎君は伊達君の先導で二階へ上がった。

伊達君が部屋のノブに手をかけた時、神崎君がその手を押さえた。

「————待て」

「c」

私と伊達君は意味が分からず、神崎君を見た。

ぞっとした。

神崎君には表情がなかった。能面のような顔は微かに笑みのように口の端を緩ませている。人のなし得る表情ではなかった。

「僕が先に入る。良いと言うまで入って来るな」

そう言って、神崎君は部屋へ一人入った。一瞬見えたドアの向こうはコールドールの海のような匂い。魚の腐った臭いが充満していた。ドアは素早く閉じられた。

「————嘘！」

私は思わず叫んでいた。

神崎君の後ろのお姉さんも取り残されて、呆然としていた。慌てて壁抜けで部屋へ入ろうとして、何かに頭をぶつけてしゃがみ込んだ。霊体が物理的に入れない？！

「呪詛結界？」

あり得ない。小泉さんの呪詛はプールで破った。今頃、小泉さんは七転八倒する苦しみに悶え苦しんでいる筈だ。

それなのに、伊達君の部屋には呪詛が発動していた。気配を殺し、発動すると他者の侵入を許さぬ結界を発生させる最高度の呪詛だ。あり得ない。人間業じゃない。

私には、それが感知出来なかった。後ろのお姉さんですら、気付かなかった呪詛。

それに何故、神崎君は気付けたのか？

追いかけようと、私はドアのノブに手をかけた。押ししても引いても開かない。

「開かねえのか！」

伊達君が叫んだ。二人して精一杯の力で引っ張ったが、ドアはビクともしない。

ぼんっ！

伊達君の部屋の中で空気ははじける大きな音がした。

その途端、ドアが開いた。精一杯の力でドアを引っ張っていた私と伊達君は、勢いよく

廊下へ転んだ。

私はすぐさま立ち上がり部屋へ突入した。夢中だった。これほど精緻な呪詛に神崎君が一人で対処出来るとは思えなかった。

―――！

部屋に入って息を飲んだ。

神崎君は部屋の中央に自然体で立っている。部屋の空気は氷のような冴え冴えとした気で満ちていた。かいま見た呪詛の気配は綺麗に消えていた。

問題はその霊気だ。

まるで南極の氷の世界のような、人の存在を許さない氷点下の世界。

塵一つの存在も許さぬ、澄んだ硬質の霊気。

こんな霊気は見たことも聞いたこともない。

まあ、良い。大事なのは神崎君だ。

彼は呆然とした様子で立ち尽くしている。

「神崎君っ！」

私は叫んで彼の腕を掴んだ。
ぞっとした。

死人のように冷たい。

「……ああ、彩宮さんか？ どうしたの？ 血相変えて？」
そして、廊下で倒れている伊達君を見て小首を傾げる。

「——なに？ 伊達に襲われでもした？」
的外れなことを言う。私は神崎君の頬を叩きたくなる衝動を抑えて、言った。

「貴方が一人で勝手に部屋へ入ったのよ！ 私達に『待ってる』と言って！ 覚えてないの？」

我ながら珍しく感情が出た。怖かったのだ。

激口する私を見て、神崎君はぽりぽりと耳の後ろを掻いた。

「——ごめん。覚えていない。時々あるんだ。無意識で行動しちゃうこと」
それで私の怒りは例えようなない恐怖に変わった。

(二)

「あんた達。なにしてるの？」

明美の呆れ声で私は我に返った。

確かに呆れられても仕方がない光景だ。

部屋の中央に呆然と立ち尽くす神崎君。その神崎君に詰め寄っている私。廊下で尻餅をついている伊達君。滑稽と言われても仕方がない。

茶托を持って立ったまま、明美は伊達君と私達を交互に見る。

「なに？ 又、何かあったの？」

不安げにそう尋ねる。

「あつたと言えばあつたんだが……」

伊達君は廊下であぐらのまま腕組みして考え込む。

「——良く分かん！」

あつさりと結論を出した。伊達君らしい潔い結論だ。

その言葉に明美は小さく嘆息した。

「とにかく、お茶にしましょう。一息入れないと身が保たないわ」

明美の言葉に伊達君が立ち上がる。

「……あら？　なんか涼しいわね。クーラーでも入れたの？」

「いや。姉貴が入れたのかな？　でも、クーラー、スイッチ入ってないし……」

明美と伊達君が首を傾げる。

(……明美達にもわかるのか……)

私は吐息をついて、畳の上に正座した。伊達君の部屋には座卓の類がないので、自然、円座を組むように座ることになる。

「鈴の所のくず餅だから、美味しいよ！　良く冷えてるし♪」

明美がぱつと周囲に笑顔の花を開く。

(――なるほど。覚悟を決めたか)

明美の笑顔は『戦うと決めた女』のものだった。

しかし、他人の家で自分の店のものを出されるのは面映いものだった。

明美は器にお湯を入れて温めた後、急須にその湯を注ぐ。

暑い時に熱い飲み物を頂くのは理にも礼儀にも適っている。実は明美が通う茶道教室の師範代は私だったりするのだ。あの煎れ方なら、茶葉もスーパーで売っているような物ではないだろう。

(玉露の高級品かな？)

当たりをつけて、そっと一口頂いた。意表を突かれて、私は思わず声を漏らした。

「あら？　正喜撰？」

「流石、鈴。分かるわね。小枝さん、やっぱりただ者じゃないわ。こんなもの普通に用意してあるんだもの……」

明美は脱力したように言う。

確かに普通の家にあるお茶じゃない。

小気味よく一本取られた気がして、私は『小枝さん』と言う女性を見直した。明美にすれば小姑みたいなものだから、私とは違う感慨があるのかもしれない。

冷静さを取り戻した私は伊達君の部屋をつくづくと見渡した。

考えてみれば、男の子の部屋に入るのは初めてだった。少し悔しくて唇を噛んだ。私の『初めて』は全て神崎君に捧げたかったからだ。

六畳間の和室。左右の壁には本棚がある。中身はマンガが多い。ついで剣道関係の本。本棚の上には、おびたしい数のトロフィーと賞状が飾られている。奥の窓際には勉強机。意外に整理されていて、教科書と参考書が並べてある。机の横にパソコンディスクがある。

で、部屋の隅に似合わないダンボール箱が一つ、ぽんと置かれていた。太い赤マジックで『十八禁！ 無修正！ 要処分！』と書かれていた。

小枝さんが、私達の来る前に片付けたのだろう。私の視線がその箱に釘付けになっているのに明美が気付いて、それを見る。

明美と視線が合って、苦笑が漏れた。

「正彦く 後であのお箱改めさせて貰うわよ」

明美が笑顔で言う。

伊達君は目に見えて狼狽えた。奇妙な手振りで答える。

「いや、あれは男の最後の牙城みたいなもんだから！ 勘弁してくれ！ 明美！」

エロ本が最後の牙城とは、人として何か終わっている気がする。そもそも牙城の意味が分かって言っているのだろうか？

だが、私があのお箱に気を奪われた理由は他にある。

小枝さんは、神崎君の連絡の後、この部屋を片付けたのだ。何事もなく。

だが、私達が入ろうとした時、呪詛は発動した。

伊達君だけでなく、神崎君や私を呪詛の標的としていたわけだ。

小泉さんにそれだけの呪詛を行えるとは考えがたい。あの呪詛はプロの仕事だ。つまり、第三者の呪詛師がいるのだ。それもプールでの出来事を一部始終見ていた者が。

ふんっ——私は鼻を鳴らした。

上等だ。そっちがその気なら、こちらも容赦はしない。

私がそう考えている時、神崎君が言った。

「伊達。お前まだ、小泉さん絡みの物を持っているだろう！」

能面のような顔で鋭い口調で言う。

伊達君はお茶を吹いて狼狽える。それが事実を語っていた。

明美のまなじりがつり上がる。

「全部出せ。僕が処分する。後、パソコンのハードディスクは外して砕くからな」

「そこまでしなきゃ、いけないのかよー」

伊達君は口をとがらす。

「命とハードディスク。どっちが大事だ？」

神崎君の言葉は冷徹で厳しい。あのハードディスクにはろくでも無い物が入っているに違いない。

「明美。考え直した方が良いかもよ？」
そんな意地悪を言ってみる。

「そうね……別れても良いかなと思ってる……」

明美も冷淡に言い放つ。伊達君は哀れな程狼狽えた。

「すまん。明美。謝る。ほら、この通り」

伊達君は土下座した。なんだ、牙城なんか端から無いじゃないか。

明美は知らんぷりしたまま、私に問う。

「で、鈴。結局のところ何があったの？」

「呪詛よ。超一級の呪詛。小泉さんの生き霊どころじゃない。私達を狙ったプロの呪詛師がいるのよ。神崎君が破ったけれど」

そう言って私はちろりと神崎君を睨んだ。

神崎君はお茶を飲む姿勢で固まった。珍しく表情に驚愕がある。いい気味だ。

ちなみに伊達君は土下座のまま放置プレイである。いと哀れ。

「——あのさあ、僕は呪詛の存在にすら気づいてないよ。祓った覚えもない」

「じゃあ、何故、部屋に一人で入ったの？ この結界はなに？ 誰が張ったと言うつもり？」

神崎君はお茶を置き、部屋をぐるりと見回す。

そして困ったように耳の後ろを搔く。

「確かに高位の神域に近い結界だけど……こんなの人に張れる結界じゃないよ。少なくとも僕じゃない」

「貴方が部屋に入った瞬間、呪詛結界が発動したわ。後ろのお姉さんが入れないくらいの強い呪詛よ。そのただ中で貴方は何をしたの？ 何故、無事なの？」

神崎君は顔を伏せた。困惑している。記憶がないのは嘘ではないらしい。

「——あのお、それってあれか？ 盥に井戸水入れて鏡を置くってした方がいって事か？」

土下座の姿勢のまま遠慮がちに顔を上げて伊達君が尋ねる。

「駄目よ！」

「駄目だ！」

私と神崎君が同時に叱咤する。

伊達君は土下座の姿勢から上体を上げた。

「だって俺、殺されかけたんだぞ！ 自衛して何が悪い」

伊達君の目は普通ではなかった。まあ、無理もないかもしれない。

私は諭すように言った。

「もう自衛じゃないからよ。貴方は小泉さんを対象としている。それは呪詛と同じよ。落ちる所まで落ちるわよ。それに安心して。この部屋は今が霊域よ。並の呪詛など届かないわ」

神崎君は驚いたように私を見つめている。

「……なによ？」

そう尋ねると、神崎君は明るい笑顔を浮かべた。

「今日の彩宮さんは良く喋る。その方が可愛くて良い」

などと曰った。

顔に血が上り耳たぶまで朱に染まるのが自分でも分かった。この人は不意打ちでこちらの心を突いて来る。私は顔を俯かせた。

「伊達。彩宮さんの言う通りだ。今のお前に必要なのは、反省だ。なんであれ、お前は小泉さんを裏切ったんだ。然るべき反省と謝罪が必要だ。心しろ」

神崎君の言葉に伊達君は「分かった」と項垂れる。

一部始終を鋭い眼差しで見つめていた明美は、伊達君が項垂れた所で「はあ……」と吐息をついた。

「そこまで言って貰って、なんなんだけど、神崎。あんたも反省が必要だよ」

え？　　つと言う表情で、神崎君は明美を見る。

明美はぴっと私を指さした。

「鈴よ！ 真っ赤になって動けなくなってるじゃないの？ 今、あんたは鈴を口説いたんだよ？ 気付いてないの？」

「え？　　え？」

神崎君は狼狽える。私は恥ずかしさが増した。

「……明美。もう、いいから」

「駄目よ。気付かせないと、こいつ他の女の子にも同じ言葉言いかねないもの！

神崎。あんた、天然にも程があるわ。もう子供じゃないんだから、女の子への口の利き方気をつけなさい！ 鈴以外の女の子に誉め言葉は言わない！ 優しくしない！ 分かった？！」

明美はびしりと指を立てて神崎君を叱りつける。その勢いに神崎君は後ずさった。

「ぜ、善処する」

引きつった声で神崎君はそう答えた。

「正彦！」

明美は向きを変えて伊達君を睨み据える。

伊達君はびしっと正座した。明美の教育が行き届いているようだ。

「今の神崎の言葉に素直に反省の色を見せなかったら、私、本気で別れるつもりだったんだからね！ 前の彼女の物を持つてるなんて、どういうことよ？ 女を物扱いしたら別れるよ！」

「——わっ、分かった。済まなかった明美。許してくれ」

伊達君は又、土下座する。

「ふんっ！」

鼻を鳴らして、明美は伊達君を睥睨する。

三枝節ここに窮まれりと言った感じだった。

「小泉さんにも、その台詞言えたら良いのだけどね……」

急にしょぼんとして明美は呟いた。

伊達君はたらりと汗を流している。

明美の気持ちは分かる。明美の性格からして、横から男を取ったような形は避けたいのだろう。筋を通したいのだ。確かにそれが通じる相手なら良かったと思う。でも、呪詛をしてしまった。もう小泉さんは戻れない。ほんと、もう救いようがない。

私は顔を上げた。神崎君と目が合って二人して赤くなるが、ついと神崎君から視線を外して明美を慰める。

「仕方無いよ。明美。呪詛を掛けた時点で人間ではなくなるんだから……。明美は悪くない」

明美は膝の上の私の手を握った。力が籠もっていた。

「鈴。私達どうすれば良いの？」

「……悪いけど、今の段階で私に出来る事はないわ。伊達君だけでも守ろうと思ったけど、神崎君が済ませてしまったからね。伊達君はこの部屋で寝起きしてる限りは無事よ。外へ出たら安全は保証出来ないけどね」

「鈴。私、小泉さんに謝りたい！」

明美は熱の籠もった眼差しで私を見て言う。

「無駄よ。可哀相だけど、もう彼女を救う術はないわ。遅かれ早かれ、彼女は自滅する」
私は冷徹に言い切った。

「そうだろうか？」

私の言葉に神崎君が言った。私はきつ！と神崎君を睨む。

神崎君は私の視線に困ったように耳の後ろを掻いた。

そして伊達君に視線を移すと言った。

「伊達。小泉さんの住所と連絡先を教えてください。僕が説得してみせる」

呆然とした。

——あろう事か、あるまい事か、神崎君は最悪の選択肢を提示した。

伊達君の家を後にして私は一人歩く。

振り返らず、ただ前を見てひたすら歩く。慣れないヒールが「カツ！ カツ！」と音を立ててアスファルトを刻む。その後ろを、「すつ。すつ」と音を消したすり足がつけて来る。剣道の歩法が身に付いた足音だ。

ああ、癪に障る。

私はそれを無視して、更に歩を早める。後ろの足音もそれに合わせて早くなる。まるで徒競走だ。十分程続いた無言の徒競走に音を上げたのは、すり足の方だった。

「なあ、彩宮さん。何で怒らせたのか分からないけど、せめて家まで送らせてくれないかな？」

神崎君の声は途方に暮れていた。

私は固まったようにぴたりと止まった。

(何で怒らせた分からないですって?)

私は左足のかかとに体重を預けて、くるりと180度回転した。小太刀の古法の足裁きだ。小太刀は、剣術と言うより体術の要素が強い。いきなり正面から向き合う形になり、神崎君は後ずさる。

私はそんな神崎君を見据えて、きつく言い放った。

「貴方。馬鹿なの？」

横面を張られる位の覚悟で言ったのだが、神崎君は捨てられた子犬の様に消沈してしま
った。

「……そりゃ、確かに僕は鈍いし、女の子の気持ちは分からないかもしれないけれど……」

「ごによごによと口籠もる。」

「あのね。神崎君。古今東西、なまなりを祓った話はあっても救った話はないのよ！」

「なまなりって何？」

呆然とした表情で神崎君は問う。

「般若になりかけた女の妄念よ。見たでしょ？ プールで？ 小泉さんの形相を？ ああ
なつてはもう救いようがないの！ 関わるのは馬鹿を見るだけなの！」

「……………」
神崎君は呆気にとられた表情でまくしたてる私を見る。

「話し合いで解決しようと言うのは、馬鹿なんだろうか？」

まだそんな事を言う。

「馬鹿よ！」

私は神崎君を睨みつけて、再度言った。この人は本当に『女』が分かっている。女は感情で動く。理性なんかついて来ない。ましてや、ああなった『女』に話し合いが出来る筈がない。

「……そうだろうか？」

案外、頑固に神崎君は意見を変えない。耳の後ろを掻きながら「こんなの知ってる？」

と言いながら、照れ臭そうに空を見上げて謳うように言った。

「人身受け難く。今、すでに受く。」

仏法聞き難く。今、すでに聞く。

今宵、今生の悟らずんば、更にいずれの生にか悟らん」

意外な切り返しに、私は腕を組んで神崎君を見据えた。

「仏法の帰敬文ききようもんね。それがどうしたの？」

神崎君は本当に恥ずかしそうに、手で顔を撫でたりしながら言葉を繋ぐ。

「いや。だからさ。生きてるじゃないか？ 悟れなんて言わないけど、生きてるんなら、前向きにならないと意味がないじゃないか」

私はじろりと神崎君を睨む。

「私は仏法を宗教と認めていないんだけど……、まあいいわ。でもね、神崎君。『縁無き衆生は救い難たし』そう言ったのも仏法よ」

神崎君は悲しげに視線を落とした。

「彩宮さんなら、分かってくれると思ったんだけど……。」

だって、僕たちは生き残ったじゃないか。無惨に、無碍にたくさんの方が死んだのに、生き残っているじゃないか。聖人になれなんて言わないけれど、せめて死んでしまった人の分、前向きに生きないと嘘じゃないか。呪詛なんて後ろ向きな行き方はいけない。そういう人には前を向かせる義務があるじゃないか」

その言葉に私は呆気に取られた。

この人はそんな事を思っ生きてきたのか？

そんな事を背負って生きて来たのか？

なんて化け物！ それじゃあ、まともに生きられる筈がない。

「——なあ、彩宮さん」

神崎君は捨てられた子犬の瞳で私を見つめる。

「僕は間違えているんだろうか？」

ああ、もう！ この人は！

そんな目で、そんな思いを打ち明けられて、否定出来る筈がない。それに、神崎君は私の『救世主』だ。せめて私だけでも、世界が全て彼に背いても、私だけは彼を認めないといけない。それは『あの日』、あの病院で、運命づけられた約束だった。

答える代わりに——私は彼を抱きしめた。彼が教えてくれた全てを受け入れる抱擁だ。

「ちよつと、ちよつと、彩宮さん？」

「——浩ちゃん」

二人して敢えて口にしなかった、幼かった頃の愛称。私はそれを口にした。

「浩ちゃん。分かった。何があっても、私だけは貴方の味方よ」

彼は一瞬息を止めて私を見つめた。私は、私の持てる全ての愛情を注いで彼の胸の中で、彼を見上げてみせた。彼はじわりと涙ぐんだ。

「ありがとう。——鈴ちゃん」

浩ちゃんは力を込めて私を抱き返した。

そしてお互い、ぎこちなく唇を重ねた。

こうして私達は——ようやくくにして——再会を果たしたのだ。

(三)

——白状しよう。

この時、私は浮かれていた。天にも昇る心地と言う奴だ。

「ファーストキスなの……」

私は浩ちゃんの厚い胸板に顔を埋めてそう囁いた。

浩ちゃんは一瞬、硬直して応えた。

「ごめん。僕、初めてじゃない」

浩ちゃんは生真面目に答える。

「馬鹿——」。黙っていれば良いの。こう言う時は。貴方がもう経験済みだって知ってるよ。でも、良いの。これからの事もリードして貰えるしね♪」

その言葉に浩ちゃんは顔を朱に染めた。

それが可愛くて、さらにしがみつこうとしたら、両肩を押さえて体を離された。

「——なによ？」

抗議の声を上げると、彼は真っ赤になって俯いていた。

「彩宮さん、天下の往来で抱きつくのは不味いって……」

それで我に返った。羞恥が、かっと頭に登った。慌てて周囲を見回す。幸いにして人目はなかった。安堵の吐息をつく。彼も私の肩から手を放し、大きく吐息をついた。

「なんで呼び方が元に戻るわけ？」

私は頬を膨らまし拗ねて神崎君を見据える。

神崎君は赤い顔をますます赤くして慌てる。

「いや、その呼び方では理性が保てないと言うか、なし崩しになりそうだし、こういうのはもっと特別にならないといけないような気がするんだ」

（——なし崩し。良いじゃない？）

そう思ったが、あえて口にしなかった。

彼のことだ。きっと準備万端整えてくれるだろう。それもそう遠くない未来に。

「分かったわ。期待して待っているわね。神崎君」かんざきくん

私は神崎君の手を握ると、前へ向かって歩みを進めた。

「キスしちゃった♪ キスしちゃった♪」

私は神崎君と手を繋ぎなぎ、謳うように囁きながら、スキップして公園を歩く。至極、上機嫌であった。

公園には子連れの主婦とカップルしかいない。ベンチで彼女の膝枕でくつろぐカップルもいる。だから、手を繋ぐくらいは目立った行動ではない。

神崎君は苦笑を浮かべて、そんな私に付き合っている。

「なあ、彩宮さん。その歌止めない？」

そんなことを言ってくる。

「なんで？ 本当のことだし、嬉しいんだから、良いじゃない？」

私は神崎君に微笑みを返す。

神崎君は困ったように笑う。彼のもう一方の手にはデパートの買い物袋が下げられている。言うまでもなく、伊達君が保管していた小泉さん絡みの品だ。

「でも、こつち駅とは逆方向だよ。門限とか大丈夫なの？」

確かに間もなく夕刻になる。

「大丈夫よ。お父さんは、例え私が外泊しようと文句言えなくしてあるし、一番うるさい藤沢さんも、素直に理由話したら分かってくれるわ」

ふふんと、大した感慨も浮かべず神崎君は首を捻る。

「貴方はどうするつもりだったの？ 真っ直ぐ小泉さんの家へ行くつもりだったのかしら？」

「まさか……」

神崎君は真面目な顔で首を振った。

「流石に、今日は話せる状態じゃないだろう？ 彩宮さんを送ったら『これ』を処分するつもりだった」

神崎君は買い物袋を掲げて見せる。

「だと思った。手伝うわ。プレスとかあったみたいだから……。神崎君は石の浄化なんて知らないでしょう？」

「……確かに。でも、これ彩宮さんに見せて大丈夫かなあ？」

「大丈夫よ。何が出て来ても明美には黙ってる」

神崎君は安堵の笑みを浮かべた。

「彩宮さんは察しが良くて助かる」

「あら？ 殿方には困るんじゃないかしら？ 浮気なんかしたらすぐにばれるからね♪」
私の悪戯っぽい笑顔に、神崎君は目をそらした。

「そんなことしたら、本当に殺されそうだ」

「うん。殺すから、そんなことしないでね」

満面の笑顔で頷く私に神崎君は一瞬、顔を硬直させた。

公園を突き抜けると川辺に出る。川辺は整地されているが立ち寄る人は少ない。私達が川辺へ出た時は夕日が朱く輝いていた。

神崎君が買物袋から荷物を取り出した。

出てくる出てくる。

手編みのマフラーは定番。手編みのセーター。手作りのミサンガ（あろうことか、今日の今日まで身に付けていたのだ。伊達君は）。手作りのアメジストのブレスレット。銀の台座にトルコ石を詰め込んだ指輪。アメジストと水晶で組んだネックレス。あとメッセージカードと写真が多数。ハードディスクの中身は何か知らないが、神崎君が真っ先に分解して、記録媒体のガラス板を砕いて埋めていた。

どれもこれも念の籠もったものばかりだ。

「呆れた。殆ど手作りの品ばかりじゃない？ それも念の籠もる物ばかり。どういう神経なの？ こんな持つてるなんて？」

「伊達はさ——」

砕いたハードディスクを土に埋めた神崎君は、小枝や枯れ葉を集めながら答える。

「自分が気に入るかどうか判断の基準なんだ。物に籠もる念なんて最初から頭に無いんだよ」

「明美がここに居たら、本気で伊達君と別れたかもね」

私はブレスレットとネックレス、指輪にミサンガを、いつも持ち歩いている粗塩の袋に入れる。ある神社の魔祓いの塩なんだが、念の強さからして再利用は効かないな。

（灰は灰に。塵は塵に。土は土へ帰るべし）

念を籠めて、塩の袋を小枝を抱えて戻って来た神崎君に手渡す。

「これ、水辺の土に埋めてもらえる？」

「はい。随分簡単だけど、これで良いの？」

「あら？ 特別の塩なのよ。お祓いもしたし十分だと思っただけ？」

「ふうん。魔法陣刻んで『エコエコアザラク』とか唱えるのかと思った」

「それ、テレビの見過ぎね。召還魔術じゃないんだから、そんな手間かけないわ」

そういうもんなんだと呟きながら、神崎君は集めた小枝と枯れ葉をまとめて置くと、塩の袋を受け取って水辺へ行く。

「深く埋めた方が良いのかな？」

神崎君の声に私は答える。

「30センチ位でいいよ。流れてばらけるようにしてくれたら良い」

「わかった」

そんな、なんでもないやりとりが私には染み入るように嬉しかった。ちょっと前までは話しかけることも出来ず、ただ見つめるだけの日々だったのだ。一気にキスするまでの仲になれるとは思わなかった。

伊達君の呪詛もそういう意味では歓迎すべきなのかもしれない。

そんなことを考えながら、私は座ったまま葦をかき分けて作業をする神崎君を見つめていた。

戻って来た神崎君は鞆からライター用のオイルを取り出すと、枯れ葉の山にオイルをかけた。

「後のは燃やすだけで良いのかな？」

「……うん」

どこか呆けたように神崎君を見つめながら私は頷く。両足を抱いてその上に顔を置き、神崎君の一举一動を見つめ続ける。

夕焼けに染まる川辺に炎が上がる。

小泉さんが愛情を注いだマフラーやセーターが燃やされる。

感傷が湧いた。

もし自分が、愛情を注いだ贈り物を燃やされる立場になったらどうなるのだろうと……。想像したら身を切るような切なさを覚えた。駄目だ。私には耐えられない。

「……うっ」

火に小泉さんの思いの品々をくべていた神崎君が顔をしかめる。

肉を焼く臭いがした。想像通りだ。あれらの品は小泉さんの血肉そのものになっていたのだろう。呪詛の媒介にもなっていたに違いない。

全てを火にくべて、神崎君は私の横に座った。

「これで少しはマシになるのだろうか？」

神崎君は炎を厳しい目で見据えて言う。

「無理でしょうね……」

私は膝の上に埋めていた顔を神崎君に向けて、感傷的な思いを消して言う。我ながら冷たい声だった。

「——ああなつてしまったら、小泉さんはもう人ではいられないわ。被えても小泉さんは救えない。自我崩壊して狂うのがオチよ。それに小泉さんは生きている。生きている間は偏執的に伊達君を狙い続けていくでしょうね」

神崎君はため息をついた。

「理屈は分かるよ。彩宮さんは正しいんだろう。でもさ、生きているんなら、やり直しが効く筈なんだ。そうでないと嘘なんだ」

神崎君は炎を見つめながら決然と言う。頑固だ。でも、私は神崎君を守ると心に決めたんだから——だから確かな繋がりが欲しくなった。

「ねえ」

膝の上に顔を乗せて神崎君を見つめながら私は言う。

「なに？」

「キスして」

神崎君は息を飲んだ。なによ。そんな化け物を見たような顔で引くことないじゃない。

「な、なにを……」

「さつきみたいのじゃなくて、大人のキスをして。貴方から」

私は視線を外さず、姿勢も崩さず、じつと神崎君を見つめたまま言う。

神崎君は引いた姿勢のまま周囲を見回す。見回すまでもない。周囲に人の気配はない。

「あ、あのさ——」

神崎君は耳の後ろを掻きながら、私の視線を避けて言う。

「僕。これでもHなんだよ。そのキスだけで済ます自信がない」

「いいよ。Bくらい」

私は抑揚のない声で答える。

それでもたじろぎを見せる神崎君に、私は怜悯とも言える声で命令した。

「キスするの！」

「わ、分かった。良いんだね？」

神崎君はそう言う私のあごを左手でクイと上げて、唇を重ねて来た。右手で私の体を抱きしめる。

その右手が私の乳房をまさぐった。その感触にビクンと体が反応する。声が漏れた。その隙をつくように、神崎君の舌が私の口に入ってきた。本能的にその舌を自分の舌でまさぐり返す。粘膜と粘膜の接触は、私が知らなかった感応を直接脳にたたき込む。脳が白熱

して、意識がホワイトアウトする。体は声を上げ、酸素を求めるが、絡み合う舌がそれを許さない。自分でもいやらしいと思う喘ぎ声が漏れた。

気付くと私は自分から神崎君に抱きつき、さらなる接触を求めている。

永いキスが終わった。

私は神崎君に抱きついたまま、荒い呼吸を繰り返していた。

「……スゴイ。キスだけでこんなにスゴいんだ」

神崎君も呼吸が荒い。それは疲れではなく欲望から来る息だと分かった。

「——ちよっと、彩宮さん。離れて。これ以上は僕、我慢出来なくなるから」

私は神崎君の首にしがみついている自分に気付き恥じ入った。

そっと離れる。

それから二人して視線を合わせないようにして、目の前の炎へと向き直る。

体の芯が疼いている。乳房が熱い。私は自分の体が神崎君を求めているのに気付いた。

「神崎君——」

妙に色っぽい声が出た。

「……うん？」

神崎君は熱の籠もった視線で私を見る。

「伊達君のことが終わったら、ちゃんとセッティングしてね。私、早く貴方とひとつになりたいから」

普通、女から言う台詞じゃないと思うけど、口にした物はいたしかたない。

「私、貴方を守るからね」

真っ直ぐに神崎君を見据えてそう言った。

神崎君は固まってしまった。

そして気の利いた台詞が思いつかなかったのだろう。

彼は私の頭をクイと胸に抱きしめた。

「ありがとう」

ただ、その一言を耳元で囁いた。

形は不器用で、体を重ねた訳でもなかったけれど、私達は一つになれたのだと思った。

それからは二人無言で永いこと炎を眺めていた。でも手はしっかりと握り合っていた。

夕日は落ちかけている。川辺には夜のとばりの気配が訪れていた。炎も燃え尽きようと

した頃、その気配がした。

「——はあ」

私は吐息をついた。

「偶然かな？」

後ろを振り返らずに神崎君は言う。

「このタイミングじゃ、考えにくいわね」

私も後ろを振り返らずに答える。

気配は近づいて来る。六人と私は読んだ。

「よう。よう。お二人さん。この暑いのに焚き火とは焼けるねえー」

恐ろしく頭が悪そうな声が背後で響いた。

追従するような下卑た笑い声上がる。

二十歳そこそこのガラの悪い男達が私達の背後を囲んでいた。

「なにか用かい？」

音も立てずに立ち上がり、神崎君は顔に『馬鹿です』と書いてある連中と向き合った。

臆した様子は微塵もない。

男達はゲラゲラと笑った。

「てめえに用なんざねえよ。そこの可愛い子ちゃんを渡してくれれば、怪我しないで済む

ぜ」

リーダー格らしい金髪の男が言う。

「断る。僕の彼女だからね」

それだけの台詞で切れたのか、「おどりやー」と鉄パイプを持った男が神崎君に殴りか

かる。

当然、当たる訳がない。足払いをかけられて川に叩き込まれる。

「てめえ!!」

男達が殺気立つ。格の違いには気付いていないようだ。

「今、帰れば君たちも怪我をせずに済むと思うよ」

神崎君は涼しい声で言う。

「ぬかしやがれ！」

男達は吠えたが、完全に神崎君に気迫負けしている。

「ちよっと待って」

私は立ち上がると、金髪男の目の前へ歩みよった。視線は無論「絶対零度」。

「用があるのは私だけ？」

「……お、おうよ！」

「誰かに頼まれたの？」

「……へっ」

金髪男は唾を吐いた。

「上の公園だよ。変な爺に頼まれたんだ。女は回せ。男は殺しても構わんとかぬかしやがった」

素直である。

「幾ら貰ったのかしら？」

「50万だよ！ 悪いか？」

「いいえ。それなら治療費にはなるわね」

底冷えのする声で答える。

「貴方」

私は金髪男を指さした。

「そして、貴方と貴方」

そこそこ使えそうな男を指さす。

「私が相手をしましょう。私が負けたら好きにして良いわ」

「なっ——」

指さされた男が声を呑む。

二人目を川へ投げ飛ばした神崎君が、私に声をかける。

「彩宮さん、こういう時は男に華を持たすものだよ」

神崎君は笑っている。どうやら私の力量は見取っていたらしい。

「私は貴方を守ると言ったでしょ？ 三対三。平等じゃない？」

そう言った時には、神崎君はナイフを抜いてかかって来た男の逆手を取り、メキツと言う音を立てて折っていた。表情は柔らかなままである。

腕を折られた男はみつともない叫びを上げて、のたうち回る。

残る三人は表情を引きつらせた。まあ、力むこともなく、淡々と骨を折ってしまうような相手は恐怖だろう。

「こっちは終わったよ。手伝おう」

「無用よ。最近実戦がないから欲求不満なの。まあ見てて」

「て、てめえら。ここまでやって無事で済むと思うなあー！」

金髪男がわめく。

うるさい。

私は整地された土の上に正座した。

「な、なんだ？ 今更、土下座のつもりか？」

追いつめられているのがどちらか、金髪の男には分からないらしい。

「これが私の構えよ。臆することなくかかっていらっしやい」

それで金髪男は逆上した。「なめるなー!!」とさけぶと、体重の乗った良いローキックを私の顔面に放って来る。空手の心得があるらしい。私は男の足首に絡ませるように手を出した。心得がない者には拙い防御に見えただろう。だが、その瞬間に私は男の足首を決めていた。

男の蹴りのパワーをそのまま流して、その体を宙に浮かす。ビシッとアキレス腱の切れる音が静かな川辺に響いた。その痛みに男の体は硬直した。まるで一本の棒だ。その棒の後頭部から叩きつける格好で、私は金髪男を投げ飛ばした。首から叩きつけられた瞬間、男はグキッと嫌な音を立てて、数メートル程地べたを滑った。動きが止まった時には、口から泡を吹き痙攣していた。地面が舗装されていたら間違いないで死んでいる。

「富田流柳返し」

綺麗に決まったのに、神崎君を含めて、皆、彫像のように固まった。血の気も引いている。気分を害して私は言った。

「次！」

私は又、正面に向き直る。

「勘弁してください。参った。降参です！」

残り二人は泣きながら土下座した。

まあ、呪詛なんてややこしい事するくらいならヤクザかチンピラ雇う方が話は早い。

『変な爺さん』とやらは手間を省いたつもりだろうが、いかんせん、こちらの方が実戦では上だった。それだけの話だ。

しかし、これで、別の呪詛師がいるのははっきりとした。

呪詛と言うのは、相手に呪われていると実感させる方が効果が出やすいと言う。

伊達君だけじゃなく、私と神崎君が呪詛の対象とされているのは確実だった。陽の暮れた公園を私達は駅へと歩いて行く。

無論、絡んで来たチンピラには情けもかけずに放置して来た。

私と神崎君はどちらともなく、しつかりと手を繋いでいる。

それで私にはやけてしまう。恥ずかしいような嬉しいような、こそばゆい気分だ。ちなみに絡んで来た馬鹿のことは微塵だに脳裏にない。

「——しかし、ややこしいことになったなあ。彩宮さんまで、狙われるなんて」

神崎君は耳の後ろを掻きながら、困惑したように呟く。

「あら？」

私は微笑んで神崎君の顔を覗き込む。

「まるで貴方が巻き込まれるのは織り込み済みのような言いぐさね」

「あ、いや——」

私の突っ込みに神崎君は困惑を深める。

「分かっているわよ。貴方、いざとなれば伊達君の盾になるつもりだったんでしょう？ なら、私が巻き込まれるのは当然よ。私は貴方を守るんだから」

そう言うてにっこり笑うと、神崎君は苦笑した。

「実戦でも、彩宮さんの方が強そうだ。正座が構えの武術って、伝え聞く会津藩の秘技くらいしか知らないよ？ なんだい？ あの技は？」

「小太刀よ。富田流と言うの。神崎君も剣道しているんなら、中条流くらいは知ってるでしょう？」

「中条流？ 佐々木小次郎が免許皆伝した流派だね。小太刀から物干し竿と言う長剣に移ったのは皮肉だけど……」

「富田流は中条流を工夫して出来た流派なの。小太刀は使うけど、ほとんど体術に近いわ。所謂、古武術って奴ね。今の格闘技には正座している相手を想定して戦うこと考えてないから、初見では有利よ」

神崎君は感嘆の声を上げた。

「凄いな。そんな古武術、何時から習ってるの？」

「三歳からだったと思うわ。父の知り合いの宮司が富田流を継承していてね、ウチまで来て教えてくれたのよ。十四歳で免許皆伝取ったのよ。凄いでしょ？」

「そりゃ凄い。三歳から始めたのも凄いけど。十四歳で免許皆伝かあ。沖田総司みたい

だね……」

そう言つて神崎君は苦笑した。

「それでも、さっきのは過剰防衛じゃないかい？」

「笑いながら手を折るような人に言われたくないわね」

「あれは、ナイフなんか出すからだよ。怖いじゃないか」

そう言つて神崎君は明るく笑つた。

誰にでも優しいのかと思つていたが、なんだ、男には冷酷なんだ。

公園の出口にさしかかった所で、神崎君はびたりと足を止めた。私もその気配にびたりと足を止める。

水銀灯の下のベンチに、小さな黒い塊が座っている。

凄まじい瘴気を放つていた。

その塊はゆつくりと顔らしきものを私達に向けた。黒い和服の小柄な老爺だった。背は曲がり、杖を持っている。百歳以上生きているのではと思われる程に、醜いしわくちゃの顔をしていた。

「やはりな。チンピラを差し向けた程度では、動ぜぬか。流石は儂の呪詛を破つただけのことはある。いや、あつぱれじゃ」

しわがれた低い声は汚物が肌に染み込むような不快感を覚えるものだった。

神崎君が私を守るようにして一歩前へ出る。

「貴方が、あの可哀相な男達をけしかけたのですか？」

冷徹な声で神崎君が問う。

「いかにも」

くくくと嗤いを押し殺して老人は答える。

「暗示をかけて凶暴化させたのじゃが、まさか、武道にも長けているとはな。流石じゃ。

特に、お嬢ちゃん。大の男を片手で投げ飛ばすとは思わなんだわ」

愉快愉快と老人は嗤う。私の不快感は増すばかりだ。

「——見ていたの？ 隠れて」

私はこれ以上無いくらい冷たい声で老人を詰問した。

老人は笑顔を消した、眼光だけが異様に鋭い。その眼光で私を見据えた。私は気圧された。

「契約を交わした時点で、あの者等は儂のくぐつよ。あの者等の目は、儂の目よ。一部始

終見せて貰ったぞ。今時、浄眼を持つとは希有な娘御じゃな。お嬢ちゃん。察するに儂の呪詛を破ったのもお嬢ちゃんじゃな？」

神崎君は老人の視線から私を守るようにした。能面のような顔で、無言で老人を見据えている。

「呪詛と言うのは、伊達の部屋の呪詛のことか？」

その声の響きに私は背がぞわりとするモノを感じた。普段の神崎君の声じゃなかった。それまで私ばかりを見据えていた老人は、ようやく神崎君をまともに見た。

「——ほう！」

老人は感嘆の声を漏らした。

「崇神を背後霊に従えているとはな……なるほど主ら二人を相手にしては生中な呪詛は通ぜぬ」

「貴方は呪詛を生業としているのか？」

怒気を孕んだ声で神崎君は言う。

「まあ、そうじゃ。今回は商売ではないがの……」

「小泉さんから、離れてもらいたい。貴方のような汚れた人間がいては、小泉さんは救われない」

「——救う？ 救うじゃと？ 小僧？」

瘴気の塊の老人は耳に触る甲高い声を上げた。

「何様のつもりじゃ？ 儂の可愛い孫は、あの伊達と言う小僧に傷物にされたのじゃ。それをどうやって救うと言うのじゃ？ お主が？ 幸恵はすでにあの小僧を呪っておる。呪いの成就こそが幸恵を救うものじゃった。だが、お主とそこのお嬢ちゃん、その救いを断ち切ったではないか？」

おかげで幸恵は病院行きじゃ。

返しの風で臓腑が腐る苦痛にのたうち回っておるのじゃ！

それをお主が救えるか？

だから、儂はお主等を狙う事にした。

1ヶ月かけた呪詛をお主等に狙いを変えて発動させた。

じゃが、お主等は浮かれてそこにおるではないか？

儂はお主等が憎い。幸恵もお主等を憎むに決まっておる。

こういう闇の思いをお主は分からぬか？」

老人の罵倒は鬼気迫るものがあつた。闇の中で這い蹲つて生きて来た者の怨念を吐き出してた。

だが、神崎君は動じなかつた。

「闇がイヤなら這い出せば良かったんだ。手を伸ばせば救いの糸は在ったはずだ。貴方が闇を選んだだけの話だ。だが、貴方の世界に小泉さんを引き込むな。呪いで人は救われな。彼女は僕が救つてみせる」

神崎君は臆する事なく言い切つた。

「言うな。小僧。いや、神崎浩平。ならば貴様の思い上がり、切り捨ててくれるわ！」

老人は憤怒の表情で神崎君を見据えた。

「——ちよつと、待って！」

私とその会話に割つて入る。

「孫娘と言つたわね？ 貴方、小泉さんのお爺さんなの？」

「彩宮鈴香と申したな？ お嬢ちゃん。いかにもじゃ。儂は幸恵の母方の祖父じゃよ」

「じゃあ、小泉さんに呪詛を教えたのは……」

「いかにも、儂じゃ。イザナミ流完部派第二十八代宗主・完部玄白よ」

誇らしげに老人は名乗つた。

——イザナミ流。

私は息を飲んだ。日本最古の呪術集団。そしてイカサマではなく、実行力のある呪詛を行う一団。標的にされれば逃れる事は適わないと言われる闇の一族ではないか。

小泉さんは端から闇の血統だったのだ。

「お嬢ちゃんには、儂の言葉の意味が分かるようじゃな。それで良い。主らにはもう明るい未来はないと思え」

老人は落ち着きを取り戻し、くくと嗤つた。

「——かんべげんぱく……」

抑揚のない声で神崎君は呟いた。

今までにない無機質な声。およそ生きる者全てを凍り付かせる口調だった。ぞつとして神崎君の顔を見上げると、能面のような顔に人間には成し得ない笑みが浮かんでいた。

「な、なんじゃ？ お主は？ 何者じゃ？」

完部玄白と名乗つた老人は、ここに来て初めて恐怖の色を示した。

「——かんべげんぱく。なるほど。これがここまで動く訳だ。覚えておくぞ。その名前」

私は愕然とした。
違う。

今、喋っているのは神崎君じゃない！

恐怖に膝が震えた。

恐怖に震えるのは私だけではなかった。完部玄白もまた、恐怖に震えた。

「知らぬ！ あり得ぬ！」

老人は恐怖に立ち上がり、見かけよりしつかりした足で公園から駆け逃げた。

「か、神崎君——」

私は彼の肩を掴むと揺すった。彼の体は驚くほどに冷たくなっていた。

(四)

「神崎君！」

私が激しく肩を揺すると、彼はうつろな目を私に向けた。

「お爺さん、逃げちゃったね……」

呆けたように神崎君は呟いた。

良かった。意識がある。

「逃げちゃったねって……。貴方が脅したんじゃない？ 又、覚えてないの？」

「脅したって……。名前を覚えておくって言っただけだよ？」

何か根本的な齟齬を感じて、私は諦観の思いを込めた吐息をついた。

怒っても仕方がない。彼は分かっているのだ。それに私には確かめる術がある。

「貴方、分かっているわ。貴方は自分を『これ』って言うの？ 自分の体がどうなっているか分かっている？」

そう言って彼の右手を自分の頬に当てた。夏の夕べだと言うのに氷のように冷たい。

「うわっ！」

彼は驚きの声を上げた。

「彩宮さん、凄く熱いよ？ 大丈夫？ 熱あるんじゃないの？」

「貴方が冷えているのよ！ 夏の盛りだと言うのに！」

私は彼の右手首の関節を決めて、強く私の頬に右手を当て続ける。私の熱が伝わるように。私の命を注ぐように。彼の右手を頬に当てる。

「あれ？ あれ？」

神崎君は目に見えて狼狽える。

「なんで？ さつきまでなんともなかったのに、寒気がする。凄く寒い」

「——良かった。戻って来たのね。私を抱きなさい」

そう囁くと、神崎君は顔を朱に染めた。

「え？ ——だって、ちゃんとセッティングしてって……」

「違う！ 寒いなら私を抱きしめなさいと言ったの！」

真っ赤になって私は叫ぶ。

（——全く。男って奴は。それしか頭はないのか？）

神崎君は無言で私を抱きしめた。ぞっとする程、冷たい体だった。

神崎君は小刻みに震えている。余程、寒いのだろう。

体温を半分持つて行かれた気がした。が、それも数分。

「——ありがとう」

神崎君は耳元で囁くと、そっと体を離れた。

耳元で囁いて、体を離すのは反則だなと思った。

彼はとんと前へ一歩踏み出すと、まだ陶然としている私を振り返る。

「帰ろう。彩宮さん。送るよ」

にこっと笑う。

ああ。その笑顔も反則だ。

天の邪鬼な私は仏頂面で答えた。

「ええ。送って頂くわ」

母屋で藤沢さんと二人きりの夕食を済ませ、私は蔵へ戻った。

今日は鴉揚羽をあしらった淡い紫の浴衣である。

蔵の二階が誰も立ち入らない私だけの場所である。机の前で正座する。私の勉強机は和風のオーダー物だ。屋久島の千年杉から切り出した一枚板を、父の知人のインテリアデザイナーが手がけて、湾曲した半円形の変わったものである。私はその上のMACに電源を入れて、インターネットに接続する。伊達君から聞き出した小泉さんの住所を入力すると衛星写真がモニターに映し出される。

（——なに？ これ？）

内心驚愕を覚えながら、画像をアップする。三叉路の右側に二等辺三角形の形をしたマ

ンションが拡大される。三角形の頂点は北北東を向いていた。鬼門に向いたマンションなのだ。古来、鬼門からは魔物が来ると言う。この建物は意図的に魔物を集める設計になっている。建物そのものが呪詛装置なのだ。

むっと眉間に皺を寄せて眼を閉じる。意識をそのマンションに飛ばす。上空から俯瞰して見るとマンションは丸く見えた。瘴気の渦がマンションを覆っているのだ。いや、瘴気は半ば実体化している。私には黒く巨大な蛇がマンションにとぐろを巻いているように見えた。

と、その時、目を閉じていた蛇が目を開け鎌首を上げた。赤い眼光がざらりと光る。

(——見られた?)

私は慌てて意識を戻した。あんな化け物とやり合う気はない。

「——ふう」

私は大きく吐息をつき、後ろ手に背を伸ばす。今のは久々に冷や汗が出た。再度、居住まいを正して、瞑目する。今度は意識を私の心の中へと向ける。そこは深い闇だ。私はその闇の奥へ意識を集中する。無限に広がる闇の中へ私は立った。

『迅鬼いる?』

『——御前に』

眼前に紺の作務衣に身を包んだ精悍な男が片膝をついた姿勢で現れる。目を手ぬぐいで隠した男だ。周囲の闇と同化している。

『私が見ていたものは分かるわね?』

『禍々しいくちなわでござったな』

低い声で迅鬼は答える。

『あそこの四〇五号室に忍び込める? どういう呪詛をしていたか知りたいのだけれど…』

『たやすきこと』

迅鬼は笑いを含んだ声で答えた。迅鬼は手ぬぐいを外す。左目が青。右目が茶色の瞳のオッドアイだった。

『この魔眼をもってすれば、いかなる目であれ惑わし候』

『そう。では頼んだわ』

『承知』

迅鬼は消え失せる。

これが『式』の使い方だ。神崎君は『式』の使い方を知らない。お姉さんは『式』ではない。逆に神崎君が使われている。主従逆転甚だしいのだが、まあ相手が『お姉さん』では仕方がないのかもしれない。

「鮮花！ 淡雪！」

そう呼ぶと私の背後に二人の幼い少女が現れた。市松人形のような髪型。黒地に牡丹をあしらった振り袖。瓜実顔のリスの様な容貌はうり二つだ。

「あい。鈴香様」

二人ははもって答える。

「飛びます。体の守護をお願いします」

「行ってらっしゃいませ。鈴香様」

二人は丁寧に頭を下げる。居住まいを正して正座していた私の首が、こくと前へ傾く。その様を私は上から見上げていた。幽体離脱したのだ。鮮花と淡雪は天井近くにいる私の幽体に、もう一度、深々と頭を下げる。

屋根をすり抜け夜空へと私は飛んだ。

満月が輝く夜空に鴉揚羽が飛翔した。

——奇景だった。

切り立った五色の岩。その崖の下には、どこまでも清い青い川が流れている。神崎君の後ろのお姉さんは憂いを帯びた表情で崖っぷちに立ち、川の流れに見入っていた。私はお姉さんの背後五メートルの所に降り立ち、跪く。びりびりと体が痺れる。霊氣の流れが凄いのだ。ここは間違い有数の霊地だった。お姉さんは当然、私の気配には気付いているのだろうが、振り向かない。どこで仕入れたのか花魁衣装を身にまとい、およそ、お姉さんには似合わない憂いを深めて川を見つめている。

「——宮滝と言う」

嘆息するようにお姉さんは呟いた。それがこの地名だと理解するには数秒かかった。

「現世での宮滝ではない。本来あるべきこの姿だ。我が受肉していた頃は、夏の盛りはここで過ごした。巫女にはうってつけの土地じゃからな」

落ち着いた大人の女性の声でお姉さんは喋る。その声色には人の心を惑わす響きがある。

「——鈴香よ」

お姉さんは私の名を呼び振り返った。その表情があまりに色ぼかったので、私は返事を

忘れて生唾を飲んだ。

「あれの裏の顔は我にも分からん。これで三度目だが、恐怖まで覚える。あれが浩平の真の姿なら、我と契約など必要ない。念じるだけで我が存在ごときは消し去るだろう」

お姉さんは眉をひそめてそう言った。

衝撃を受けた。

神崎君のあの変化した正体を、守護霊であるお姉さんですら分からないと言うのだ。では、あれはなんだ？ 人の姿をした明らかな冷たい異形。あんな存在は古今東西聞いたことがない。背筋をぞっと怖気が走った。

「——神崎君はそのことに？」

「無論、気づいてもおらん。あれはうつけだからな」

守護霊も指導霊も駆逐して、どんと空席に居座った。パラサイトのような存在に馬鹿扱いされる神崎君に哀れを覚える。

「うつけと言えば——鈴香。そなたには謝らねばならぬ。浩平は男になった。そなたに操は捧げられぬ。止めることが、かなわなかった」

お姉さんは口惜しそうに目を閉じて、唇を噛む。

まあ、予想していたことだ。私は諦観をもって受け入れた。

「気にしないでください。殿方に操を求めるほど酔狂ではありません。それにこれからは、私が手綱を握ります。他の女に目を奪われるようなことはさせません。その意味で貴女との契約は切れておりません」

きつぱりと言い切ると、お姉さんは「くくく」とようやく笑った。

「よくぞ申した。それでこそ我が見込んだ女じゃ」

「一つ聞きたいことがあります」

「申せ」

「完部玄白。この男を如何見ましたか？」

「ああ。忌々しい物部の呪詛師じゃな。軽々しく見ることは出来んが、我とそなたが浩平に付く以上、呪詛の成就はあり得ぬ。これは請け合おう」

「すでにくちなわが形成されているのですが……」

「……ほう」

お姉さんは目を細めた。凄みのある表情に戻った。

「忘れたか？ 鈴香。我は崇神であったのだぞ？ くちなわ程度取るに足らんわ」

「神崎君はそのくちなわを浄化するつもりです。一人で」

お姉さんは大袈裟に肩をすくめてみせた。

「うつけじゃな。浩平は。確かにあれが考えそうなことじゃ。私の知る限り禍まがつ蛇へびを浄化した話はない。だが、浩平なら、あるいはそれを成すかもしれない。だが、それも浩平の問題じゃ。我らはあれを守れば良い。それにむざむざ殺られる玉ではないぞ。浩平は。あの大異変の際に、すでに魂を菩薩の位に高めた男じゃ。そこは信じて良いと思うぞ」

「安心いたしました」

私は本当に安堵の息をつき、平服して答えた。神崎君の裏の顔が分からなかったのは不安だが、今後の方針はこれで確定した。挨拶をして戻ろうとすると、お姉さんに引き留められた。

「手渡す物がある」

お姉さんはそう言うと言わんと懐から白い絹布に包まれた棒状の者を取り出した。絹布には丸に二枚の鷹の羽を交差させた家紋が透かし彫りがなされていた。妖気が漏れている。

「——それは懐刀ですか？」

やや腰を引いて私は尋ねた。漏れている妖気は微量だが、人を迷妄させる希少な妖気だ。

私の反応に、お姉さんはくすりと微笑んだ。

「そう警戒するな。これはそなたの母の形見じゃ」

「——お母さんの？ 懐刀ですか？」

「ああ、いずれそなたの物になるものだ。概念だけでも先に渡しておこうと思ってな。これならばイザナミの呪詛でも切れる」

私は恐る恐るその短剣を受け取った。ずんと重く感じたのは懐刀だからではない。孕んでいた妖気が予想以上に強かったのだ。こんな物騒な物は家にはなかった筈だ。

そんな私の考えを読んだかのようにお姉さんが言う。

「ああ。その短剣はそなたの家に今はない。持ち主に祟ると言う代物なのでな、どこぞの貧乏絵師が今は預かっている。

だが、今のそなたには使いこなせる。そして、今のそなたに必要な物だ。実物は近々、届けられよう」

そう言う絵師には心当たりは一人しかいない。

「……天野さん」

呆然と私は呟いた。

ああ、あの人は今も私を守ってくれていたのかと思うと、心に温かなものを感じた。

「抜いて良いですか？」

現世ではないにしても、これだけの妖物まよまろ、開放すればお姉さんにも影響が出る。

お姉さんは微笑んで私を見つめた。

「構わぬ。好きにしろ」

私は頷くと絹布を解いた。それだけで青白い澄んだ空気のような妖気が放たれる。

短剣は白鞘だった。絹布を口に挟んで、私は剣を抜き放った。乱れ波紋のその刃は凜とした孤高の妖気を放っていた。

（——村正！）

息を飲んだ。徳川家に崇りをなし、持つ者を鬼籍に貶めたとする希代の妖剣。現代の科学ですら、その切れ味を測定出来なかったと言う代物だ。これが私の物になると言うのか？

「その短剣ならば——」

お姉さんは言う。

「我を滅する事も可能であろう。鈴香よ。そなたなら……」

どういう心情なのだろう？ お姉さんは憂いを含みながらも慈愛が籠もった笑顔を向けていた。

「いえ——」

私は刀を懐にしまうと、お姉さんに跪く。

「形はどうあれ、貴女は神崎君の守護者です。お仕えしてお守りすることがあっても、反することはいたしません」

私の札をどう取ったのか？

お姉さんは愉快気に「くくく」と笑った。そして言った。

「鈴香よ。そなたは魂抜けをたしなむようじゃが、控えよ。それは癖になる。守りは置いてあるようじゃが、無防備には変わりない。我に会いたくば夢を渡れ。かような場所に人の身で来るものではない。そなたには我のようになって欲しくない」

驚いた。お姉さんに情をかけられた。私は素直に頭をたれた。

「あい分かりました。今後は控えます」

「急いで戻れ。そなたの式が魔所より帰っておる」

「では、失礼いたします」

私は空へ飛び、肉体に戻った。

居眠りから目覚めるように、私は垂れていた頭を戻した。

「お帰りなさいまし。鈴香様」

私の両脇にちんまりと正座していた鮮花と淡雪が可愛い声をはもらせて出迎えてくれる。私の背後には迅鬼が片膝を立てた姿勢で鎮座していた。

「ただいま。ご苦労様でした。鮮花。淡雪。もう戻って良いわ」

微笑んでそう答えると、二人はにんまりと笑って空気に溶けるように消える。

私はくると後ろを向き、迅鬼と対面する。

「早かったわね。迅鬼。首尾は？」

「生半に長居出来る所ではありませんでしたな」

迅鬼は苦笑する。この男がこういう弱音じみた台詞を言うのは珍しい。迅鬼は懐から橙色の和紙で作られた人形を出して私の前へ置く。お姉さんに渡された懐刀とは違い、実物であった。

独特の人形はやはりイザナミ流の物だ。人形の頭に象形文字のような文字が描かれ、その下に『伊達正彦』と記されていた。字は鉄錆のような色をしていた。

「……これ、墨じゃないわね。なにかしら？」

「私めが人であった頃、これと同じ物を見たことがござる。イザナミではなく真言立川流の呪詛でしたが……」

「なに？ 焦らさずに教えなさい」

「経血でござる。経血を持ってして呪う相手の名を記せば、たちどころに死に至らしめると申します。まこと、女性の情念は業が深いものですな」

ぞわりとした。只の怖気ではない。女として生理的嫌悪を交えた怖気だ。自分の生理の血を持って呪う相手の名を記す。そこにはどれほどの念が込められているのだろう。いずれにせよ、その行為、常軌を逸している。小泉さんはそこまで追いつめられていたのだろうか？

その情念はもう救えない。救いようがない。

「——あのくちなわですが……」

珍しい。迅鬼が私に言葉をかけられる前に口を開いた。

「主がおらぬで、眠っていたようでござる」

「……完部玄白がいなかったと言うの？」

「いえ、あの希代の術師はおりもうした。だが、くちなわの主ではござらん」
緊張から私は目を細め、迅鬼を見据える。

「小泉幸恵。この小娘がくちなわの主でござる」
(くちなわの主が小泉さん?)

迅鬼の言葉に心胆が冷える思いがした。それではもう、小泉さんは悪鬼羅刹の域を越えて怪物の域にある。神崎君は彼女を救うと言ったが、もはや相手は人でなくなっている。もう不可能だ。

それでも神崎君は小泉さんを救おうとするだろう。彼の性格は概ね理解出来たつもりだ。なにしろ、一人で病院へ見舞いに行くつもりで、私には何も語ろうとしなかったくらいなのだから。

ただ、彼は隠し事や嘘は苦手だ。すぐ顔に出る。

私が看破して、病院へも一緒に行く約束を無理矢理取り付けておいて良かった。

今の小泉さんは飢えて傷を負った野生の猛獣に近い。

私は自らを弁えている。毒には毒をもって制するしかない。つまり私が村正で小泉さんを殺すのだ。

そこまで考えて、ふと目前に跪く迅鬼に気づいた。律儀な男だ。

「迅鬼。ご苦労様。下がって良いわよ」

が、迅鬼は下がらない。

「一つ、無礼を承知で申し上げたあい事が在り申す」

「聞きましょう」

迅鬼はオッドアイで私を見つめた。

「申し上げます。くちなわは長く保つものではござらん。守りに徹していれば自滅するもの。ましてや主殿は呪詛の標的にすらなっております。何故に関わることがありますう?」

私は嘆息した。

「——見て見ぬ振りをしると言うのね? そんな事は分かっているわよ。ただ、思い人が頑な変人なので、巻き込まれることになるのよ。もう標的にされているしね」

肩をすくめて苦笑する私に、「なんと!」
すでに巻き込まれたとおっしゃるのか?」
迅鬼は叫ぶ。

頷くと迅鬼は怒りを抑える表情に変わった。

「主殿の思いい人を悪くは言いとうありませんが……。その者、男としての覚悟がないように思えます。やるのならば、勝手に一人でやるべきかと……」

「迅鬼。割り込んだのは私なの。その人は全て一人でやるつもりだった。そこに私が無理に割り込んだの。彼のことは悪く言わないで」

「――」

迅鬼は黙り込んだ。

「話は終わりよ。迅鬼。早々に戻りなさい」

それに答えず、迅鬼は思い詰めた表情で言った。

「主殿――」。私は生前忍びでござった。秀でた忍びの条件は何かお分かりますか？」

きよとんとした表情で小首を傾げる私に迅鬼は言った。

「それは、生き残ることでござる。敗走であろうと、役目を果たせなかったにしろ、生き残ることが忍びの信条でござった。主殿にも、その信条、貫いていただけますか？」

「分を弁えぬ発言ね。でも、有り難く受け取っておくわ。何があっても生き延びる。それは私の信条としておきましょう」

微笑んで言う私に迅鬼は平服した。

「主殿の心遣い、身に浸みました。これほどの主を持って迅鬼は果報者でございます」

「背中がこそばゆいわ。迅鬼。引きなさい。私ももう寝ます」

迅鬼は一礼すると霧散した。

部屋に一人になって、私は大きく嘆息して大の字に横たわった。

「本当。貴方、罪人よ。神崎君」

そう独りごちると何故か微笑みが浮かんだ。

神崎浩平は闇の帳が落ちようとする中、家路を急いでいた。

(ヤバイ。マジ遅くなった)

心中冷や汗をかいている。早く帰って晩飯を作らないと妹の浩美の陰湿なイジメに遭うのは明白だった。

公園に近づいた辺りで歩みを遅めた。

(警察沙汰にはなっていないようだな……)

神崎浩平は安堵を覚える。過剰防衛の自覚はあったのだ。彩宮鈴香の度肝を抜く冷酷さが余程の恐怖を与えたのだろう。

再び、歩を早めた所で「えい！」といきなり後ろから羽交い締めにされた。背中に当たるポリウムのある双球の感触は覚えがあった。と言うか生々しい。

「遅いぞー！ 少年。ご休憩でもしたのかなあ？」

耳元に息を吹き当てながら背後の女が言う。おそらくは公園の影に気配を消して隠れていたのだろうが、神崎浩平に気配を感じさせないのは、並の陰形ではない。

「——っ。離せよ！ 響子姉！ 悪ふざけにも程がある」

「あーら？ 遅いから心配して待っていたのに、つれないんだ」

手を離れた響子姉はふいと膨れる。

「有り難いけど、他にやりようがあるでしょう？ それに心配されるほど子供じゃありません」

その言葉に響子姉は、にぱっと笑う。

「そうだね。もう大人になったんだよね。立派な男になったんだよね！」

揶揄を含んだ響子姉の言葉に浩平は顔を朱に染める。この辺りまだまだウブだ。

「——もう！ それで何か用だったんですか？」

恥じらいを誤魔化すように浩平は声を上げた。

「うん。ちよっとね。辻褄が合わない気がして落ち着かなかったのよ」

響子姉は真面目な口調で言った。

長年の付き合いで分かる。響子姉は何か大事なことを伝えようとしている。

「なんです？ 辻褄が合わないって？」

「それなんだけどね」

響子姉は腕を組んで難しい顔をする。似合わない仕草だった。

「私、美人だから良く妬まれて、生き霊が来たりする訳よ。で、その経験則から言うとなんか合わないのよ」

自分で自分を美人と言うか？ と言う細かい突っ込みは置いておいて、浩平は話を進める。

「合わないって何が？」

「伊達君って前の彼女に余程酷い事した？ ネットにヌード写真をばらまくとか？」

「それはないです。あいつはそういう事だけは絶対にしません」

「じゃ、なんで恨まれるの？」

「そりゃ、三枝に乗り換えただけからでしょう？ いきなり心変わりされたら、そりゃ恨みま

すよ」

響子姉は眉間に皺を寄せた。

「男はどうかしらないけど、女はそれでは男を恨まないわ。取った相手を恨むわよ。三枝さんがまるつきり無事で、伊達君だけが命まで狙われるのは理屈に合わないのよ。私なんか何人の女に恨まれてるか分からないわ。女の思いは一途なの。好きな男と復縁望んでも、殺そうなんて絶対にしないわ。殺すなら取った女よ！」

「——あっ！」

浩平は声を上げた。純粹に驚いた。

そうだ。小泉さんの伊達への思慕は篤いものだった。伊達との復縁を望むならまだしも、殺す理由がない。ましてや自分や彩宮さんを標的にする理由はないのだ。三枝が一人茅の外なんて話は矛盾している。つまり——操られていると考えるべきだったのだ。

「ありがとう！ 響子姉！」

浩平はそう叫ぶと家へ走った。響子姉が何か叫んでいたが聞こえない。

(早く、彩宮さんに伝えないと！)

その思いが足を早める。

完部玄白。

怒りをもって、その名を脳裏に浮かべる。

小泉さんを暗示にかけたな！

ならば救える。

完部玄白の呪詛から、一刻も早く小泉さんを切り離さなくてはいけない。

浩平はぎりりと唇を噛んだ。

第三章 審判の門

(一)

「……ふう」

私は軽く吐息をつくど窓辺から見える夕映えのグラウンドを眺めた。グラウンドの奥に大きな桜の樹がある。根元に防具袋を置いて、神崎君が座っているのが見えた。

これで半月。

彼は、ここ最近、毎日、部活の終わりにここで過ごして帰る。ただ愚痴を聞くためだけに。

(……私には出来ないな)

敵わない。そう思いながら、私は恋慕を込めた視線で彼を見つめる。

「——彩宮さん？」

部長にそう声をかけられて、私は我に返る。「なんですか？」と小首を傾げると、部長は言った。

「もう一人、視て貰いたいって人が来ているのだけど、大丈夫かな？」

髪をポニーテールにして眼鏡をかけ、真っ白な肌をした、いかにも文学少女と言う容貌の部長は遠慮がちにそう言った。しかし、なぜ上級生の先輩まで私に敬語を使うのかな？

「後一人なら、大丈夫です。でも今日はこれで最後にします」

「悪いわね。ごめんなさい」

部長は本当にすまなさそうにして女生徒を一人部室に入れた。

私は布団の中で目を開けた。

——夢か。

つい最近のことなのに、随分、昔に思える夢だった。

何故だろう？ 私は涙を流していた。何に涙したのか私には分からなかった。

あんな夢を見たのは昨夜、神崎君から電話があった所為だろう。

神崎君は、珍しく少し興奮していた。

「小泉さんは操られているんだ！」

そう言う。

「男を取られたら、普通は取った相手を恨むものなんだ。いきなり伊達を呪殺するなんて事はないんだよ！」

なるほど、道理だ。私だって神崎君を取られたら、まず、取った相手を恨む。でも、そんな女心の機微に神崎君が気付くとは思えない。

「――杉浦さんね。それを教えたの。今、側にいるの？」

冷めた声で私は詰問した。

「いや、ちつ、違う。違う。今は部屋からだから、僕一人だ。響子姉とは偶然会ったんだ。そりゃ、教えてくれたのは響子姉だけど……一緒にいたわけじゃないよ」

電話口で神崎君は狼狽える。

男ならしゃんとしろ！ そう思う。狼狽えず大きく構えていれば、こちらも安心するの
に、ここで狼狽えたら、要らぬ詮索をしようものだ。

「でもさ、呪詛が小泉さんの意志じゃないなら、救える可能性が増えるじゃないか。全ては、きつと、あの爺さんが仕組んだんだよ！」

私は携帯を耳から離すと、大きく吐息をついた。凶まがつへびつ蛇の説明するのも面倒だった。

「――救いがたいな。この人は」

私は再度、携帯を取る。

「――救えないわよ。小泉さんは」

「――っ。だって！」

「黙って聞いて！ 明日、お見舞い行く前に、小泉さんの家に寄きましょう。その上で、その台詞が言えるなら聞きましよう。じゃあ、切るわよ」

我ながら、いささか手厳しいかなと思ったが、初めての電話で甘い言葉の一つも言わずに、他の女の話をする輩にはふさわしい対応だろう。

なんか腹が立って来た。

意趣返ししてやろう。そう考えた私は、翌朝、制服に着替えた。

目的の家は木造モルタルの二階建てだった。穏やかな気が結界となって家を覆っている。

(あの人らしい……)

私は内心ほくそ笑んだ。

早朝の清々しい気を深呼吸すると、私はその家のチャイムを鳴らした。

『はい。どちら様ですか？』

インターホンに出たのは浩美ちゃんだった。

「おはよう。彩宮です」

そう答えると、インターホン越しに息を飲む気配が伝わってきた。

『——っ、ちよっ、ちよっとお待ち下さい。お兄ちゃん！ お母さん！ 大変だよ！ 彩宮さんが来たー!!』

インターホン越しに浩美ちゃんの叫び声が聞こえた。

私は怪物かなにかか？ まともに朝の挨拶出来ないのはどうかと思うわよ。浩美ちゃん。平和な朝の神崎家が乱れること約五分。家から出て来たのは制服姿の神崎君とそのお母さんだった。慌てて化粧したのだろう。ルージュがずれている。

「朝早くから失礼いたします。桜ヶ丘高校の彩宮鈴香と申します」

私はびしりと札を決める。

お母さんは慌てふためいた。浩美ちゃんと反応が似てる。神崎君は一見、泰然自若と突っ立って、耳の後ろを掻いている。相当混乱していると見た。

「いや、その、浩平の母でございます。浩平がお世話になってるようで……」

「はい。お付き合いさせて頂いております。お母様にはご挨拶が遅れまして申し訳ありません」

その言葉に、お母さんはキッと神崎君を睨む。神崎君は明後日の方向を見る。

「まあ、玄関先ではなんですから、中でお茶でもどうぞ」

「今日は神崎君と約束があるのですが……。お邪魔ではないでしょうか？」

慎ましくそう言うと、お母さんは相貌を崩して笑った。

「浩平がお世話になってるのに、邪魔なんてことはないですよ。上がってください」

「では、お言葉に甘えます」

恨めしげに私を見る神崎君に私は舌をだして見せた。

「朝から、あれはないよなあ〜」

並んで歩く神崎君はぼやいている。

「あれぐらいししないと、付き合ってるって言う自覚を持たないでしょう？ ぼやかないの！」

私は繋いだ手に力を込めると叱咤する。

「ほら、見えて来た。あれが小泉さん。小泉幸恵が住むマンションよ。貴方にはあれがどう見えるのかしらね」

私は底意地の悪い声で言った。

僕は息を飲んだ。全面ガラス張りで青く輝く二等辺三角形の奇妙なマンション。『悪魔の塔』と言う言葉が脳裏に浮かぶ。

だが、驚くのはそれだけではない。

ぼんやりとだが、黒い大きな紐のようなモノが塔に巻き付いている。あれが何か僕は知っている。

「……くちなわ」

思わず呟いていた。

「やはり、見えるのね。気の質を探っておきなさい。誰があれの主なのか知らないかね……」

彩宮さんは悔しげにも取れる口調でそう言った。そして繋いだ手を強く握って前に出た。

「まさか？ あそこへ入るつもりなの？」

「ええ。筋を通しておかないとね。あそこに完部玄白がいるのよ」

彩宮さんは酷薄な笑みを浮かべた。

——完部玄白。

その名を聞いて、僕は肝を据えることにした。

そのマンションはインターホンを押して管理人の許可を取ってから中へ入れる仕組みになっていた。マンションに入るのは、くちなわの中へ入ることになる。入った瞬間、果物の腐ったような臭いの塊が鼻腔に押し込まれた気がした。

僕にだって男の矜持がある。彩宮さんの前を行き、インターホンを押した。

「どなたかな？」

尋ねる声は間違いなく完部玄白のものであった。

「神崎浩平です」きっぱりと答える。

彩宮さんは冷徹な表情のまま無言でいる。

「ほほう」

完部玄白は興に乗った声色で答える。

「入りなさい」

その声で玄関の分厚いガラス戸の扉が開いた。完部玄白はこのマンションの管理人をしていたのだ。僕たちは管理人室へ通された。

管理人室の応接間で僕たちは完部玄白と対峙した。

彩宮さんは『絶対零度の魔女』の名のとおり、氷のように冷たい表情だ。感情の読み取れない強い眼差しで完部玄白を見据えている。

「神崎浩平君に彩宮鈴香さんじゃったな。改めて挨拶しよう。儂が完部玄白じゃ。粗茶だが、まあ、飲め。良く冷やした玉露じゃ」

「こんな所で飲み食いしたら、それこそ黄泉戸喫じゃない。結構よ」

彩宮さんが冷たい声で言う。

完部玄白はククと喉の奥で笑う。

「この建物の意味も、くちなわもお見通しなのじゃな？ それで入って来るとは良い度胸じゃ。このくちなわを発動させればお主等命はないぞ」

ぎよろりと完部玄白は目を剥く。

「貴方がこの凶つ蛇の主なら入っては来ないわよ」

彩宮さんは老人の放つ禍々しい気に押されることなく言い放つ。確かに眼前の老人の気とくちなわの気は別物だ。

「呪われていることを自覚させれば、呪詛はより効果のあるものになる。そう言ったわね？」

彩宮さんは独特のウイスパーボイスで囁いた。かなり怖い。

「申したが……それがどうした？」

「こちらにも宣言しておこうと思っつてね。呪詛は返す。貴方の命。この私が貰い受けるわ」
怜悯な口調のまま彩宮さんは言い切った。凄い度胸だ。

老人は一瞬凄まじい形相で目を剥いた。すぐ俯く。やがて微かにクツククと笑いを漏らした。

「愉快！ 愉快じゃ！ これまで我が呪詛にそういう対応をした者はおらなんだ。小僧。

お主もそうか？ お主も儂の命を取ると言うか？」

僕は吐息を漏らした。馬鹿馬鹿しいことこの上ない。

「ご老人。貴方の命など、僕には興味がない。僕はただ小泉さんを救うだけだ。その為に必要なら、貴方と小泉さんの繋がりを断ち切るのみなんだよ」

僕の言葉に老人のみならず彩宮さんまで目を剥いた。

「……なんか変なこと言ったかな？」

「小僧？ この凶つ蛇を見た上でまだその台詞を言うか？」

「……ああ」

面倒臭くなってなげやりにそう答える。

「小泉さんは僕が救う」

しばし沈黙があった。

老人が沈黙を破った。

「お嬢ちゃん。お前の男は正気か？」

「——正気なのよ。これが」

彩宮さんはため息をつく。なんか扱い酷くない？

「まあ、良い。これから幸恵のところへ行くのじやろう？ お主等の手腕とくと見せて貰

おう。我が人生の幕引きに相応しい相手に巡り会えて嬉しいぞ」

老人がそう言ったときには彩宮さんは席を立っていた。

——あきれ果てた。

あの凶つ蛇を見れば、小泉さんを救うなどと言う馬鹿げた考えは捨てると思っていた。

なのに——なんだ？ この人は？

敵からも正気を疑われるほどに頑なだ。

(まあ、仕方ないか)

ため息をつき、そう思う。そういう人だから私が惚れた訳なのだから。早足で先にマン

ションから出た私を神崎君が追って来る。

「彩宮さん。僕、何か怒らせるようなことを言ったかな？」

馬鹿正直にそう尋ねて来る。頑なで融通が利かないと言うのは、ある意味致命傷だ。で

も、そういう性格だから、あの凶つ蛇の中でも己を貫けたのだ。あそこはまさしく魔界だ

った。中に入れば、気力を無くしたり、短気になったり悪影響が出る。

神崎君は影響を受けなかった。それだけでなく完部玄白と対峙してみせた。それだけ強

い自我を持つ証拠だ。それは誉めて良いだろう。

私は追いつがる神崎君に振り返り満面の笑顔で言った。

「怒ってなんかいないわよ？」

私の極上の笑顔に神崎君は何故か顔色をなくした。心持ち後ずさる。……なんでよ？

「……なんか背筋が寒いんですけど」

「私の笑顔が怖いとでも？」

私は神崎君ににじり寄る。

「——いや。可愛い！ 可愛いんだけど、いたぶられている気がする」
神崎君は困ったように耳の後ろを搔く。

「……いたぶられたいの？」

神崎君はぶんぶんと首を横に振った。

「そういうのは止めて欲しい」

「——そう？ まあ、貴方が病院で小泉さん相手にどうするかを拝見してから決めるわ」
笑顔のままそう言う私に神崎君は青ざめた。

私は神崎君に片手を差し伸べた。

「行きましょう。思い出の市民病院へ」

小泉さんの病室は最上階の特別室だった。病室のドアまでが特別の木製で重厚感がある。
神崎君は先に立ってドアをノックする。

陰気な音を立ててドアが開く。憔悴した中年女性が出て来た。小泉さんのお母さんだろ
う。制服姿の私達を見て、「学校のお友達でしょうか？」と覇気のない声で訊く。

「はい。桜ヶ丘高校の神崎と、こちらは彩宮さんです。ご容態は如何ですか？」

見舞いの花束を抱えて神崎君が尋ねる。

「どうも。幸恵の母でございます。……それが、容態は回復したのですが、誰とも会おう
としないのです」

小泉さんのお母さんは、くりくりした目を絶えず動かしながら、怯えた齧歯類のように
答える。

「彩宮と神崎が来たとお伝え願いますか？ 会ってくれればいいです」

私はよそ行きの声で言った。

「少々、お待ち下さいね」

小泉さんのお母さんは何度も頭を下げた病室へ入っていった。

しばし間があった。ドアが開いてお母さんが顔を出した。

「……あの、会うそうです。お入り下さい」

妙に不安げな表情でお母さんはそう言った。

特別室は一DK位の広さがあった。応接セットまで置いてある。

小泉さんはその応接セットに座って私達を出迎えた。急いでファウンデーションを塗っ

たようだが、顔色の悪さは隠せない。淡いピンクの入院服と点滴で、彼女が病人なのだ
改めて認識する。影で『冷血』と指さされる私でも、多少同情の念が湧いた。

(いけない！ いけない！)

私はその同情の念を打ち消した。

出来るなら、今日、この場で彼女に呪詛を止めさせるよう努めねばならないのだ。

「こんにちは。はじめましてかな？ 剣道部の神崎です」

神崎君はそう挨拶すると花束を小泉さんに手渡した。小泉さんは慌てた仕草で花束を受け取る。子リスのような顔を朱に染めている。入院服の為に体型が良く分かる。トランジスターグラマーと言う奴だ。いかにも肉感的で伊達君が好みそうな女の子だった。愛らしい顔と好対照をなしている。

小泉さんは、花束をぎゅっと抱きしめて上ずった声で言った。

「知ってます！ 神崎先輩も、彩宮先輩も！ お二人とも学校のアイドルですから！ その、お見舞いありがとうございます！」

純粹無垢に喜んでいる顔だった。とても呪詛をしているように見えない。

「あら、私のことも知ってるなんて光栄だわ。でも、お礼は要らないわよ。私達も目的があつて、わざわざお見舞いに来たのですもの」

私は笑顔で含みのある言葉を返した。

それで小泉さんの笑顔は凍り付いた。

視線を落として、小泉さんは俯く。

小泉さんのお母さんは、そんな私達を心配そうに見ながら、私が用意したお茶菓子と緑茶をテーブルに並べる。

「お母さん——」

視線を落としたまま、小泉さんが呟く。

「一時間ほど出て行って」

お母さんはその言葉に狼狽えた。

「……でも、でも、お前……」

「良いから！ 出て行って頂戴！」

面を上げて、そう叫んだ小泉さんは相貌が変わっていた。まなじりが異様につり上がっていた。見る者を萎縮させる眼力だった。

お母さんは怯えながら「娘を頼みます」と何度も頭を下げて病室を出て行った。

神崎君が「大丈夫ですから」とお母さんを気遣いながら病室の出口までお母さんを誘った。

「――」

「――」

その間、私は『絶対零度』の視線で小泉さんと対峙していた。私の視線を前にして、動じずに睨み返してくるとは大した玉だ。なるほど、これがこの娘の地顔と言う訳だ。

ソファーに戻った神崎君が身を乗り出して、小泉さんの顔を見つめる。

その優しい視線に小泉さんはたじろいで見せた。

「小泉さん、そうムキにならないで欲しい。僕たちは君を責めに来たんじゃない。君を救いたくて来たんだよ」

私は小さく吐息をついて、小泉さんから視線を外した。まだ言うか？ この人は？

小泉さんは呆気にとられた表情をした。

そりゃ、そうだろう。

この状態で助けに来たなんて台詞は普通出ない。

「――神崎先輩は、伊達先輩のことで来たんじゃないんですか？」

「勿論、そうだ。でも、この状態で君が伊達本人を恨む理由はないだろう？」

「あります！」

鬼女の形相で小泉さんが怒鳴る。中々の迫力だ。武道でもやらせれば大成するだろう。

「あの人は何もかも奪った！ 私の処女も！ 思慕も！ 面子も！ それなのに、私を裏切って他の女に乗り換えて平気な顔をしているんですよ！」

「だから呪殺するのかい？ 論理が飛躍している。相手を好きなら、泣いて縋って復縁を求めるものじゃないのかな？ 死んで欲しい位なら、顔も見たくなくなるのが普通だろう？」

「う？」

そこで神崎君はひたと小泉さんの瞳を見つめる。

「恨むのは想いが残っているからだ。それなら恨む相手は伊達を取った女じゃないのかい？」

その言葉に小泉さんは息を飲んだ。そこへ神崎君は叩き込む。

「あのプールで――君は伊達の姿を幻視していた筈だ。その気になれば、今の伊達の相手が誰かも見えた筈なんだ。なのに君は伊達だけを幻視していた。

何故だい？ 伊達を奪った相手に恨みがなかったのかい？ 矛盾してるだろう？」

君はまるで呪詛をするために伊達を恨んでいるように見えるよ。
僕たちは君のお爺さんに会った。君はお爺さんに呪詛を教えられたんじゃないかい？
それなら君は救われる。呪詛を止めれば救われるんだ。
君は十分に魅力的な女の子だよ。伊達なんかより良い男とこれから幾らでも付き合えるさ。呪詛を止めれば、まっとうな陽の下を歩けるんだ。でも、伊達を殺せば、君は二度と引き返せなくなる。まっとうな陽の下を歩けなくなる。

——小泉さん。今ならやり直せる。

くじけそうになったら、僕たちが助けてみせる。だから、呪詛なんか止めるんだ！」

神崎君は最後は小泉さんの手を取って熱弁をふるった。

小泉さんは、握られた自分の手を見張って見つめていた。

私は鼻白んだ気分でその光景を眺めていた。

やがて小泉さんは頭を垂れた。

肩口まである髪が、小泉さんの顔を隠した。小泉さんは囁くような小声で言った。

「伊達せんばいの相手って誰です？」

神崎君は表情を堅くした。

「それは言えない。知らない方が良いだろう？」

小泉さんは握られていた手をそっと離すと、暗い嗤いを噛み殺した。

「助けてくれると言いましたよね？　じゃあ、神崎先輩が私と付き合いしてくれるんですか？」

あまりの論理の飛躍に神崎君は言葉を失う。

ようやく私の出番のようだ。

「悪いわね。小泉さん。神崎君は私と付き合い合っているのよ」

小泉さんの含み笑いは狂気を帯びる。

「だと思いました。私をこんな目に遭わしたのも神崎先輩と彩宮先輩ですものね。でも、ずるいじゃないですか？　彩宮先輩。神崎先輩には手を出さないって不可侵条約があったのに……」

「あんな子供の遊びに付き合うほど暇じゃないわ。想いが真摯ならば非でも手に入れるのが女でしょう？　違うかしら？　小泉さん？」

冷酷に私は告げる。

俯いたままの小泉さんは、含み笑いを大きくする。

「あはは。ははは」
やがて顔を上げ声を出して笑い出した。神崎君は狼狽えて、私は冷徹にその変貌を見つめる。

小泉さんは笑いながら言う。

「あははは。私、惨めじゃないですか？ 友達は私と伊達せんぱいが付き合ってたの知ってるんですよ？ 私が、いつ処女を失ったかまで知っているんですよ？ 見舞いに来てくれたけど、私に会わず顔がありますか？ 神崎先輩が付き合ってくれるなら、私の顔も立ちます。フオローする？ お笑いじゃないですか？ 彩宮先輩の言う通りです。真摯な思いこそが真実です。ですから、せんぱいは私が殺します」

かちんと来た。

「貴女、男をステータスだと思ってるわけ？」

「ええ。そうです。今までさんざん自慢してきました。それを裏切るなら殺されて当然じゃないですか！」

神崎君は声もなく、笑い転げる小泉さんを見つめている。もう彼女は狂っている。これで流石に救いようがないことが分かっただろう。

神崎君は吐息をつくと言った。

「……小泉さん、僕には君が泣きじゃくっている子供のように見える。面子で人を殺すなんて言うものじゃない。君の友達も心配しているから見舞いに来てくれたんだ。その好意に気付けば、前に進めるんだよ」

火に油を注ぐ正論。

この人もいい加減救われないな。

小泉さんは笑うのを止めた。異物を見る目で神崎君を見る。

「——もう遅いんですよ。神崎先輩。私の呪詛式はもう組まれています。くちなわが起きています。後は発動させるだけ。そうしないと私が死ぬんです」

小泉さんは静かにそう言う。

「くちなわは見たよ。あれの臭いは君と同じだ。でも、僕と彩宮さんなら、あれを祓える」

「——あれが祓われたら、私が死ぬだけです。神崎先輩は私を殺すと言うのですか？」

「僕は君を助けに来た。最初にそう言ったよ。考え直してくれ。小泉さん」

小泉さんは大きな吐息をついた。

「——こんな人が彼氏だなんて、彩宮先輩も大変ですね」

私は答えなかった。彼がこんな人だから好きになったのだから……。でも、まあ妙な事に巻き込まれたのは事実だった。

小泉さんは姿勢を正すと、正面から神崎君を見据えた。

「それでも殺すと言えば、どうします？」

「伊達は僕が守る。そして君を救ってみせるさ」

「障害は排除します。それなら私も神崎先輩を先に殺します」

完全に呪詛師の顔で小泉さんは言った。

「させないわ」

私は小泉さんを見据えた。

「彼は私が守るもの」

「では、お二人の命、私が頂きます。祖父に前々から言われていたんです。私はイザナミ流完部派第二十九代宗主の名を継ぎます。

襲名の儀として、神崎先輩と彩宮先輩のお命頂戴いたします。

伊達せんばいの命はその後にゆっくりいたぶり尽くして頂きましょう」

ああ。宣言しちゃった。この娘。もう戻れないよ。

「私達がただ殺されるのを待つと思う？ 神崎君はともかく、私は殺される位なら、先にやるわよ？ 覚悟はあって？」

「——宗主を襲名するにはうってつけの贄だと評価いたします」

「——そう？ では交渉決裂ね。まっ、私にとっては降りかかる火の粉を払うだけの話よ。気を変えるなら早くすることね」

私の言葉に、小泉幸恵はぎろりと目を輝かせた。

「一週間後です。今日から七日目に私は凶つ蛇を解き放ちます」

「では、一週間後に、伊達君の家でくちなわ共々貴女を倒す。それで良いわね？」

「——はい」と小泉幸恵は頷いた。

「帰るわよ。神崎君」

私はそう言って立ち上がった。

神崎君は深く沈んだ顔でソファに座ったままだ。

「小泉さん。僕は命をかけて君を救うよ。君は呪詛の世界で生きていく人じゃない。それだけは覚えておいて欲しい」

小泉さんはまだ、そんな言葉を口にする神崎君を奇異の目で見たが、言葉は返さなかつ

た。

「——神崎君！」

苛立った私の声によく彼は立ち上がった。

私達は病院を後にした。

(二)

「……しくじった」

喫茶店で神崎君は頭を抱えてそう言った。

「そう？ 見事な誘導だと感心していたのだけだな……」

「——誘導？」

神崎君は怪訝な表情で顔を上げる。私はその顔に微笑みを返して言った。

「小泉さんに自ら呪詛をしていることを言わしめ、一週間の期限を設けさせた。これは大きいわ。私達は七日間と言う短期間で呪詛に備えれば良い。何ヶ月もかけてくる呪詛はやつかいだからね」

神崎君の顔に不満の色が浮かんだ。

「僕はそんなつもりで小泉さんと話したわけじゃない」

「ええ。分かっている。貴方はそうでしょうね。でも、結果はベストに近いものになったわ」

「ベストは小泉さんに呪詛をやめさせることだった。だから失敗だよ」

神崎君は低い声で言った。怒っている。私はそれに気付かぬように振る舞った。

「あの時点で彼女を救うのは、どんな聖人君子でも無理よ。貴方は良くやった。悔やむ必要なんかないのよ」

「それでも、僕は——」

神崎君が何か叫びかけたところで、私は右手の指で口を封じた。

「大声はいけないわ。で、どうなの？ この後、どうする気？ 案が無いなら、私から提案があるわ」

人差し指を唇に当てただけで、神崎君は真っ赤になって固まる。そして、いじけてる。ちよつと目では分からないけれど、私にも彼の表情が読み取れるようになった。

可愛い。そう思う。

唇から顎と撫でるように指を動かして、その指先を彼の喉笛にそっと刺すと、神崎君の顔から血の気が引いた。——何でよ？

神崎君は引きつった表情でバンザイの姿勢を取る。

「参った。降参だ。彩宮さんの言うことを聞く。だから指を収めてください」

色々、腑に落ちないことがあったが、私は手を納めた。神崎君は安堵の息をつく。

「……ふう。怖いな。彩宮さんは……。で、提案ってなに？」

むっとしたけど、ここで拗ねても、あやしてくれるような人じゃない。私は話を前へ進めることにした。

テーブルにプリントアウトした衛星写真を広げて見せる。私は写真の中央を指さした。

「ここが小泉さんの家。矢尻みたいな二等辺三角形でしょ？ しかも辻に立っている」

「僕は風水とかは判らないけど、このマンションからは邪気を感じるよ。……しかし、なんでこんな変な形のマンションを建てたのだろう？」

「呪詛だからよ。このマンションは鬼門を指していると言ったでしょう？ じゃあ、鬼門の先には何があるかよね？」

私は定規でマンションの頂点が指す方向を示した。

「——あっ！ 兜山か！」

兜山は平地のど真ん中に立つ円錐形の山だ。古代のピラミッドだったと言うトンデモ説があるくらいだ。いずれにせよ、この辺りの霊脈を集める場所には違いない。

「霊脈は分かるわね？」

私の静かな問いに神崎君は答える。

「大地のエネルギーだろ？ うねって伸びているから龍脈とも言うんだよね？」

「大地だけじゃないけど、まあ正解。この辺りの霊脈の中心は兜山よ。——神崎君。貴

方、自分に矢を向けられたらどうする？」

「……払いのけるだろうね」

私はその返事に頷く。

「兜山の頂上には白山神社があるわ。ここの神様はキツイから、こんな建物を使った相手を認めない。払い除けようと祟るわよ。あのマンションの住民達は全員呪詛の対象となるわ。完部玄白はその負のエネルギーを利用して呪詛をかけていると思うのよ。だから、これから筋を通しに行く。どのみち、この地で呪詛合戦するんだから話は通しておかないとね」

——兜山。

山裾の向こうに広がる平野のど真ん中に、戦国時代の武将の兜を置いたような形でそびえる異質な山、その形状故に兜山と称される。

地元の人はあまり近づくかない。——曰く、鬼が棲む山だと言う。

昔から神隠しが多いのだ。近年でも行方不明者が後を絶たない。標高300メートル程度の山だが、頂上の白山神社への参拝道から外れると迷うと言われる。

参拝道は急勾配のL字形をしている。L字形の直角に当たる所は高台になっていて、小さな公園になっている。(遊んでる子供は皆無だが……)

公園の右手はN市を一望出来る。古ぼけた双眼鏡も置いてあった。高台からは三角マンションが、こちらを指し示すように建っているのが見えた。これは神様が怒るのも同然だ。一方、左手の竹藪の奥には滝があり修行場になっている。禊ぎ場の入り口には素戔嗚尊を祀る祠があった。滝に不動明王はつきものだが、素戔嗚尊が滝に祀られるのは珍しい。

彩宮さんは二拍一礼して素戔嗚尊の祠を丁寧に伴むと、脱衣所を抜けてお滝場に向かった。一瞬、「裸になるのかしら？」と期待したが、彩宮さんは一気に脱衣所を通り過ぎ、歩みを早め、真っ直ぐ歩いて行く。確たる目的のある顔だ。邪魔になると思っ、僕は脱衣所の入り口でしゃがみ込み、額の汗をぬぐった。制服で登山は無茶があった。

これなら、軽装で出直すべきだった。だが、同じ制服の彩宮さんは汗すらかいていない。『筋を通しておかないといけないの』

彩宮さんの言葉が頭に響いている。どうにも僕の予想を超えた大事になるらしい。しかし、彩宮さんはこの手のことに本当に詳しいなと思う。

「——ええい!!」

お滝場から、彩宮さんが九字を切った裂帛の気合いが響いた。声に淀みが無く透き通るような声なので、離れていても一刀両断された気分だった。事が終わったようだ。僕は立ち上がり彩宮さんを待つ。

彩宮さんは右半身がずぶ濡れだった。驚いて「どうしたの？」と尋ねると「えへへっ」とばつが悪そうに可愛い舌を出して笑う。

「濡れなきゃいけない所があったから……」

そう言っ、ぐいと右手を僕に差し出す。開かれた掌には水気を吸って腐りかけた蕈人形があった。聞くと滝の裏側に小さな洞窟があり、そこに置かれていたのだと言う。質が悪い。滝行する人は真摯に塵芥を流して、その魂を清めようとする人たちなのだ。

怒り。憎しみ。悲しみ。恨み。

それらを集めて増幅するのがこの藁人形だったわけだ。

完部玄白。

こんな呪詛をするのは奴くらいしか思いつかない。僕は怒りを覚えた。

「それなら、僕に言ってくれば良かったのに……」

「こんな妖物ようぶつ、他所様にふれさせるわけにいかないわ。特に貴方には」

うわ！ いきなり他人扱いされた。傷ついた僕は無表情になる。そんな僕の心の機微を読み取ったのか、彩宮さんは少し膨れた顔で言った。

「あのね。私には貴方が一番大事なの。だからこんな瘴気にまみれたものは渡せないの！
分かった？」

嬉しかった。大事な人と言われて本当に嬉しかった。でも、今回の一件は僕が首を突っ込んだ話だ。彩宮さんは関わりを嫌っていた。今、彩宮さんは率先して動いてくれている。それも、僕を守る形でだ。これでは男・神崎浩平としての立場がない。

「彩宮さん！」

僕は思わず彼女の両肩を掴んだ。彩宮さんは驚きに目を丸くしている。

「僕は男だ。男なんだよ！」

「——わ、分かっているけど……」

「だったら、何でも自分でせずつに頼って欲しい。その僕たちは……」

そこで僕は声が出なくなった。顔が紅潮する。

「……恋人同士なんだから？」

彩宮さんは子どものように、真っ直ぐ僕を見つめた。

僕は彩宮さんの瞳から目を離して、俯きながら頷いた。

彩宮さんは僕の頬にキスして、とんと軽やかに距離をとった。

「——ありがとう。神崎君。でも、私、甘えるときは際限なしだから気をつけてね」

以前、どこかで聞いた言葉だ。なぜか思い出せない。大事なことなのに……

彩宮さんは上機嫌の顔でアツカンベーをした。

胸にどきゅんと来た。

……又、惚れ直してしまった。

「心臓殺しの百八段」

お滝場から直角に曲がると白山神社へ登る階段に出る。あまりの急勾配に下から見上げると垂直に見える石畳の階段はそう呼ばれている。ちなみに石は墓石が使われていて、夏の真昼でも鬱蒼としている。魂抜きをした無縁さんの墓石を再利用していると言うが、登る者には気分が重くなる。まるで参拝を拒んでいるような造りなのだ。

彩宮さんは、上に見える鳥居をきつと見据えると足を進めた。

「手すりを使いなよ。少し楽になる」

そう声をかけると、彩宮さんは無表情で答えた。

「それも行かないわ。ここが私の意地をはるところなのよ」

彩宮さんは頂上の鳥居をきつと見据えている。僕には何も見えないが、彩宮さんの視線からして、そこに何者かがいるのだろう。鈍い僕にも何かに見られている感じがするのだ。

『『あの日』の前後にここら辺りで『件』の目撃例が増えたのを知ってる?』

彩宮さんは喘ぐように囁く。

「……くだんか。知らない人の方が少ないんじゃないかな? 牛頭の着物の女の妖怪だろ?

震災の前には話題になったけど、事が事だったから、『あの日』以来、誰も口にしないだけで……」

僕は口籠もった。やはり『あの日』の話は重い。

「——凶事を伝える妖怪だと言うのよ」

一瞬、五月蠅い蝉の声が消えた気がした。

「人偏に牛と書いて『くだん』。凶事を伝える妖怪。それがこの山に祀られているの。奥の院にね」

彩宮さんは滔々と語る。顔はいつもの無表情に戻っていた。なにか無性に怖かった。

「件の一番古い記録は平安時代まで遡るわ。鉄砲水で村が崩壊するのを走りながら叫んだそうよ。村の人々はその異形を畏れるばかりで、その言葉には耳を貸さなかった。結果、村は予言通り全滅し、異形の『件』の話が喧伝された。

私はね、神崎君。『件』の心情を考えてしまうの。

走り回ってまで『異変』を伝えたのに、自らの異形に畏れられるだけで、誰も助けられなかった。まるで私達みたいじゃない? 泣き叫んで訴えたのに、精神安定剤を打たれて、ベッドに縛り付けられて……哀しいじゃない?」

立ち止まって、上にいる僕を見つめる彩宮さんは、白い仮面をかぶっているようだった。

迂闊な答えは出来ないなと思った。

しばし間を置いて、僕は答えた。

「——それでも僕は叫ぶよ。たった一人でも理解出来る人がいたら、たった一人しか救えなかったとしても叫ぶ」

呆然とした顔で僕を見ていた。彩宮さんは、「あはは」と笑った。少し涙ぐんでいた。

「ああ。貴方らしい。そうよね。迷いごとだったわ」

僕には彩宮さんの心情が分からない。それでも笑うところじゃないだろうとは思った。

「……なんで、笑うかな？ 真面目に答えたんだぜ？」

「ごめん。ツボに入った。本当に貴方、太陽のような人ね。時々、眩しいわ」

彩宮さんは階段の途中でお腹を押さえてまだ笑っている。

「まっ、真つ当にお天道様の下を歩けつてことよね。呪詛なんか貴方の前では意味もなさないからね」

彩宮さんは笑いながら、そう言うのとポンと僕の肩を叩いて、階段を上る。すれ違いざまにぼそりと呟いた。

「でも、それだけ真つ当な人間を見たら眩めなくなるけどね……」

鬱蒼とした森の影にぞわりと浸食される心地がした。

鳥居の前で二人仲良くお辞儀して、神社の境内に入る。本殿の前は開けていて陽がさしている。気が無く、蝉の声だけがこだましていた。

お手水の所で彩宮さんはポケットを探って、掌に収まる大きさの着物の生地で作られた袋から、水晶玉を出した。

手水の水を、彩宮さんは、水晶玉に入念にかけていた。その奇異な行動に僕は彩宮さんに声をかけた。

「それ何をしてるの？」

「……うくん、足跡帳兼探知機かな？ 寺社仏閣には大抵、水場があるからね、この子にこういう場所か探知してもらおうの。この子、私の百倍は感度よいらね」

どうにも理解し難い台詞を言う。

彩宮さんはハンカチを口に加えた姿で水晶を絹袋に戻した。

「強い神様が居るところでは、水晶から電気が出るみたいにビリビリ来るのよ。そう言うのは要注意。ここは大丈夫みたいね」

そう言うって彩宮さんは僕に笑顔を向ける。なんとも返事が出来なくて耳の裏を搔く。

彩宮さんは慈愛に満ちた表情で僕を見つめていたが、ずっと視線を外すと社務所の方へ

歩いて行った。

社務所にまとめられた竹箒の一本を逆さに持つと、本殿の前で畳一畳分の長方形を書き、四隅にルーン文字の刻まれた水晶の石を置く。

「……何してるの？」

再び尋ねる。彩宮さんは右手に中指をあてて宙を眺める。

「神下ろしの場所を作るのと、人払いの結界の強化だね。山に入る前に人払いの結界張ったから誰も来ないと思うけど、用心しないとね」

「すみません。何を言っているのか分かりません。」

彩宮さんは素足になると、長方形の中に入った。後方の隅に正座すると、一礼して柏手を二つ打って、再び拝礼すると手を合わせて目を閉じる。

何となくだけど、お行儀良くして控えてないといけないんだろうなと思って、彩宮さんの斜め後ろに背筋を伸ばして立ってみる。瞑目して手を合わせ、何かを真摯に唱えている彩宮さんのうなじに僕は魅せられる。

（——— 凄い娘だな）

心底、僕はそう思う。ルーンを扱えるだけでも凄いのには神道の知識まである。とびっきりの美少女で霊能力まであるなんて、「天は二物を与えず」と言うのは嘘だなぁと思うていると、「——— 神崎君！」

彩宮さんが瞑目の姿勢を崩さず、凜とした声を発した。

「はい！」思わず背筋を伸ばした。

「そのまま後ろ足で鳥居まで戻って！ 間違っても振り返らないで！ 境内から出て頂戴！」

うわ！ いきなり出て行けと言われた。言葉が心臓に突き刺さる思いだった。それを察したのか？ 「お願いね」と最後に優しい声をくれた。良く分からないけれど、剣道の歩法で鳥居の所まで行き、体を鳥居にもたれかける。空を見上げる。雲一つない蒼天。痛い程の日差しが真上から降り注ぐ。

「かぁ！」とカラスが僕を馬鹿にしたような声を上げると鳥居の上から飛び立った。

違和感があった。音だ。ここでは五月蠅いまでに聞こえる蝉の声が神社では無かった。境内とその外側は全く別の空間になっていたのだ。

彩宮さんとは見ると、彼女の前に淡い金色の光りの柱の様な物があるような気がした。彩宮さんは丁寧に一礼すると、立ち上がり柏手を打った。その瞬間、境内の蝉が激しく鳴

き出した。彩宮さんはルーンの石を拾い、やや小走りに僕の方へやって来た。

「ごめんなさい。追い出して。気分悪くしたでしょう？」

彩宮さんは不安げに僕を見つめて言う。そんな表情にも見とれてしまう僕がいる。

僕はただ首を振って微笑むしかなかった。

彩宮さんの顔に安堵の色が浮かぶ。

「ブレザー。脱いで良いわよ。暑いわね」

彩宮さんは言いながら、自分もブレザーを脱ぎワイシャツ姿になる。白いブレザーを通して淡いピンクのブラが透けて見えるのがなんとも心をくすぐる。僕は無表情になってブレザーを脱ぐ。社務所の側に自動販売機があったので、冷えた缶ジュースを買って来て、彩宮さんと階段に座って息を抜く。

「——結局さ、彩宮さんは何をしたわけ？」

「見てたじゃない？」

彩宮さんは冷えたジュースの缶を頬に当てて言う。

見ていて分からないから訊いているんです。

「神崎君は神様見えなかったの？」

彩宮さんは不思議気に尋ね返した。

「金色の柱みたいなのは見えた気がするけど……」

「——なんだ。見えてるじゃない？」

彩宮さんはくすりと笑う。僕の方は事情がいよいよ分からなくなってきた。

「……なんで僕は境内に追い出されたの？」

そう尋ねると、彩宮さんの表情が凍った。『絶対零度の魔女』の顔になる。

「訊きたいのは、こっちよ。貴方、いったい何者？ 神様が『畏れ多い』と現れないなんて……」

思考が停止する。神様が僕を畏れたと言うのか？ 理解出来ない。

無言でいると、彩宮さんは「はぁ……」とため息をついた。

「まあ、いいわ。神降ろしも成功したし、話もつけたしね。あのマンションに手を出さない、パワーを送らないと言う約束の対価は貴方よ」

「くっ」

「へ？ じゃないわよ。貴方はこの神社に入らない。それが対価よ。業突張りの神様が多

い中で、破格の対応よ。貴方、あちらの世界では有名みたいね？」

まるで話が分からない。僕のどこが恐いのだろう？ 後ろのお姉さんに訊こうと思ったが、笑いを必死でこらえている状態で相手にしてくれない。表情と言うものがどンドン抜けて行くのが自分でも分かる。そんな僕の肩を彩宮さんが元気良く叩いた。

「哲学者にならないの！ お昼食へに行きましょう。クーラーが、がんがん効いている所へ行きましょう」

そう言って彩宮さんはエイと立ち上がった。子細の説明はなかった。おそらく説明しても無駄だと判断したのだろう。階段を下りるとき、僕は一瞬後ろを振り返った。音もなく降り立ったカラスが五匹、鳥居の上で僕を睨み付けていた。

（——僕の何が悪かったのだろう？）

少し哀しく思う。二度と来ることのない鳥居を目に焼き付けて僕は階段をおりた。少し階段を下りると、微かな風が吹き、竹藪がさわさわと鳴った。僅かだが涼感を味わえる。

「去年の秋の話だけどさ」

彩宮さんは慈しみのある笑顔を僕に向けて言った。

「神崎君、部活が終わると、桜の木の下で暗くなるまで休んでいたでしょう？」

「……そう言えばそんなことがあったね。帰りが遅いとよく浩美に怒られた」

僕は頬を膨らませて怒る浩美の顔を思い出して苦笑した。彩宮さんも笑顔を返す。

「——何をしていたの？ 夜の桜の樹の下で？」

一瞬、頭の中が真っ白になった。何故そんなことをしていたか、理由が分からない。ただ、なんとなく桜の樹が泣いている気がしたのだ。だから、部活で火照った体の熱を伝えるように樹の幹にもたれかかっていた。

「……寂しそう……だったからかな？」

彩宮さんはその答えにくすりと笑う。

「私はずっと見ていたわ。文学部の部屋からはあの桜が良く見えるのよ。それで再び貴方に恋をしたの。でないと眺めるだけで終わっていたわ。明美が気付いてくれて良かった。あの娘、本当は女らしくて繊細なの。で、私達はこうしている訳。明美に感謝しないとね」
こう面と向かって言われると照れる。それ以前に、なんで、ただ桜の樹の下で座ってるだけで惚れられるのが分からない。

「嬉しいけど……。彩宮さん、桜の樹の下に座ってるだけで惚れるの？」

我ながら直球ど真ん中だが、伊達のように口先の魔術師ではない僕にはそうするしかない。

彩宮さんは「どうしようかなあ？」と明らかに僕をからかいながら、階段を下りて行く。

「ごめん。教えて。なんか気になって仕方がない」

そう言って拝むと彩宮さんにはっこりと笑う。

「私もね夏休み前にはあの樹の下に通いつめた口なの……。でも、諦めちゃった。天上界への道を開いて上げているのに、気づきもしない。私の話も聞かない。ただ、怨嗟と泣き言を言うばかり。だから私は諦めた。でも、あなたは延々二ヶ月愚痴を聞くだけで、あやしむとい地縛霊を浄化してみせた。

敵わない。

心の底からそう思ったわ。その瞬間に思いは恋へと変わったのでした」

彩宮さんはそう言うと、照れ隠しに「えへへ」と笑った。

その可愛さに僕は思わず彩宮さんの頭を撫でていた。

「——な、なによ!」

「いや、彩宮さんは可愛いなって思った」

素直にそう言うと彩宮さんは真っ赤になって距離を取る。

「貴方、本気で女たらしね!」

そう不思議な怒り方をする。

「浩美ちゃんがブラコンになる訳だわ。これじゃあ、危なかしくって外に出せないわよ」

ふんすかとお怒りになる。

浩美ってブラコンかな？ どちらかと言うと怒り顔しか見えないような気がするが：

…。でも昔は可愛かったな「お兄ちゃん。お兄ちゃん」と懐いて、最近、機嫌の悪い顔が増えたような気がする。

「だいたい、貴方は——」

そう言いかけた彩宮さんの口を手で押さえて、僕は彼女を抱きかかえるように石段から竹藪に倒れ込み、彩宮さんに覆い被さる。体中から危険信号が出ていた。

「——来る!」

僕はそう叫んだ。彩宮さんもその気配を感じ取ったらしい。僕の胸の中で身を屈める。言うなれば、それは巨大な津波に似ていた。

彩宮さんは、ようやく我に返った。恥ずかしげに顔を背け、両手で僕を押しつけた。

そして、鞆の中にあつた別のペットボトルとタオルを出すと、タオルに水を濡らして、僕の顔を拭く。嫌がる僕を「動かないで！」の一言で凍結させる。一通り拭き終わると背中を向けて化粧直しを始めた。曰く「見たら、殺すわよ」。洒落にならないことを仰る。

「——なぜ、気付いたの？」

背中を向けたまま。絶対零度の魔女の声で言う。

「殺気の類には敏感なんだよ」

「——そう」

彩宮さんはこちらを振り返った。もう涙の後はない。目が少し赤いだけだ。そしてなにも無い空間に視線を走らせる。

「義理堅い神様で良かったわ。あれで激怒して返し風の風を送られたら、どうなっていたか分からない」

「どうなるのさ？」

「……人死に出たでしょうね、こことあの三角マンションを繋ぐラインで。でも流石と言うべきかしら？ 兜山の霊脈を断たれたとたんの呪詛返し。並の者に真似出来るものではないわ」

僕は不快を感じた。完部玄白は当然としても、ここの神様とやらにも腹が立った。

「——全く、人の命をなんだと思っているのだ？」

二人して無言で立ち上がり、山裾の町を見つめながら階段を下りる。

さっきの続きだが、この階段も腹が立つ。

墓石だぞ。

魂抜きをしてあるから大丈夫と言う理屈らしいが、墓を人に踏ませる神経は理解し難い。と、唐突に彩宮さんが僕の左腕にしっかりと捕まって来た。顔は何かに耐えるような苦渋に満ちている。

「どうしたの？」

なるべく優しい声で問うた。

「……サイレン。ほらサイレンの音が聞こえない？」

言われれば微かに救急車らしきサイレンの音がする。

「さっき、あんなことがあったし、『あの日』以来サイレンの音は苦手なのよ」

か細い少女の声で彩宮さんは言う。
僅かな合間に、サイレンの音が増えた。救急車と消防の他にパトカーの音すら響いている。真昼のけだるさに音をひそめていた町が騒然としている。

いつのまにか側に来たのか？

彩宮さんも高台の展望所に来ていた。

「……これ。ただごとじゃないわね」

「ああ、街中の救急車・消防署・警察が総出だぞ。これ！」

僕は目をこらした。街のどこで異変が起きているのか？ 何が起きているのかを見定めようとした。

「彩宮さん」

「なに？」

「三角マンションが炎上している」

「——ウソ！」

彩宮さんが展望鏡にしがみつく

完部玄白の三角マンションは3階辺りから出火していた。それ以上の高さには、何故か消防の高層マンション用のはしごがかけられている。避難したのだろうか？ベランダに若い女性がいた。次の瞬間には、その女性はマンションから飛び降りた。

戦いののろしは上がっていたのだ。

(三)

三角マンションの前で私達は立ちすくんだ。

——阿鼻叫喚のるつぼ。

そう表現するしかない。十五階建ての賃貸マンションで燃えているのは四階から下。ほぼ全室で火災が起きているようで救いを求める絶叫が聞こえる。ガソリンの臭いがつんと鼻を突く。放火だ。

玄関ホールの上には脳漿を飛び散らかした男性の体がある。死体だろうが、キャンバスで隠す人はいない。手が足りないのだ。そしてベランダからは次々と飛び降りが続く。「助けて！」と、そう叫んで、飛び降りる。

マンションの回りは奇妙に体をくねらせた死体のオブジェが取り巻いている。

そのオブジェ（多少に息があるうか構うことなく）を作業靴で踏みにじり、飛び降りても大丈夫なように警官隊と消防隊がマットが敷く。かつて人間であったモノを踏みにじるその顔には怒りと恐怖が混じり合っていた。一階の消火は先程終わったようだ。まだ黒い煙が異臭を漂わせて漂っている。その臭いは『あの日』を思い起こさせる。集まって来る群衆は後を絶たない。機動隊が盾で壁を作っている。それでも人々は集まって来る。何も出来ない。そんな事は分かっている。だが、それでも見届けようと群衆は集まり続けた。

「説得は聞きません。『助けてくれと』言って飛び降りて来るんですよ!! どうやって助けるんです?! ええ。一階の消火は今出来たようです。ちょっと待って下さい。一階フロアに生存者無し! 無理心中に自殺ばかりの様です。とにかく増援を下さい。それから報道を下げさせて下さい! ヘリの音にマンションの住民が怯えます!」

最前列に居たから、指揮官らしき警官の声を聞き取れる事が出来た。

隣にいる神崎君の顔は能面の様に表情がない。が、彼は私の手を強く握った。燃え上がる炎をもとせず飛び降りて来る様を眼に焼き付けんばかりに見据えていた。私は彼の手を強く握り返す。震えが止まらなかった。膝が笑っている。どうしたって『あの日』の事が蘇る。私を襲った壮絶な痛みと嗚咽。それが今再現されている。見たくない。こんな光景は見たくない。でも、終わるまでは見届けなければいけない。

それは私だけの思いではなかった。

この群衆は野次馬ではない。それが証拠にしんと静まりかえって、皆、かたずを飲んで祈るように見つめている。『あの日』を生き抜いた人々が集まっている。

私の正面上、八階のバルコニーを乗り越えようとしている二十歳後半の女性と視線が合った。強い思念が流れ込んで来た。

（いやだ! 死にたくない! 誰か私を止めて! 怖い! 近づかないで! ああ――。落ちる。落ちちゃう! いやだ! 死にたくない!）

「いやー!! 死にたくない!!」

私とその女性は同時にそう叫んだ。

私は卒倒して、神崎君に抱きしめられた。

凄まじい爆音がしてアスファルトの地面が揺れた。女性は誰にも抱きしめられる事なく、まだマットが敷かれていない大地に叩きつけられた。

大きな悲鳴が群衆から上がった。私同様卒倒する人が何人か出た。悪夢は終わらない。今度は赤子を抱いた女性がバルコニーに現れた。怯えきった表情で、幼子をしっかりと抱きしめている。女性はバルコニーに置かれた洗濯機の上に登った。

それを見守る群衆からは微かなどよめきが漏れた。次の光景が分かるから、それでも救えないから、吐息を漏らす。

私を支える神崎君の手に力が入る。

「——死ぬな!!」

腹の底に力を籠めた大音声、それは周囲の空気を震撼させた。

「死ぬな!!」

再び響く神崎君の大音声。それは明らかに女性の動きを止めさせていた。それで回りの人々も叫んだ。

「死ぬな!」

その叫びは伝播した。群衆は「死ぬな! 死ぬな! 死ぬな! 死ぬな!」と連呼する。

その叫びはシュプレヒコールとなりマンションを取り巻いた。私も神崎君の腕の中で拳を上げて叫んだ。

「死ぬな!」

その願いは届いた。今まさに飛び降りようとしていた住民達はへたり込み嗚咽をもらす。警官隊や消防の人々にマンションの住民達は次々と運ばれて行く。最後に警察の指揮官が群衆に感謝の言葉を贈り、群衆は歓声を上げて解散——しなかった。皆、神崎君を賞賛しながら集まって来る。中には泣きながら神崎君を拝んでいるお婆さんまでいた。報道陣のクルーや、警察官の指揮官が感謝状を贈りたいからと住所と名前を訊いて来る。

神崎君は無表情で耳の後ろを掻いていた。

「そこ!」

神崎君は輪のような群衆の一角を指さして叫んだ。

「道を空けてください!」

モーゼのように群衆の渦に道が出来る。

「それでは失礼します」

神崎君はそう言って頭を下げると私を抱きかかえて疾走した。陸上部でも通用するほどに早かった。

神崎君は——あの時と同じ。やはり私の救世主だった。



「ひや！ ひや！ ひや！ 見よ！ 見よ！」

奇声を上げて完部玄白は嗤う。

市内のホテルの最上階に完部玄白はいた。32インチの液晶TVには燃え上がる三角マンションの様子が『ライブ』と言う表示と共に流れていた。マンションの下半分は業火に焼かれ、上からは面白いように人が飛び降りている。

「ぎゃっ！ ぎゃっ！ ぎゃ！」

最早、笑い声なのか奇声なのか分からぬ音を吐きながら玄白はTVの前で踊る。

その姿は狂人のそれだった。

警察の指示なのか、空からの映像は、地上からマンションを見上げるもの変わった。臨時ニュースの画面は、燃え上がる三角マンションをバックにしたアナウンサーに変わる。アナウンサーの表情は硬く青ざめている。

『真昼の怪異！ 謎の集団自殺！』

そうテロップが流れる。

「現場から原田がお送りします。現場の光栄マンションから最初の飛び降りがあったのが十二時五十二分です。それから時を同じくして火災が発生。飛び降りは今も連鎖的に繰り返されています」

アナウンサーはそこで唾を飲む。

「——悪夢としか言えません——」

その言葉の直後。どおんと言う爆発音のような音が響き大地が揺れた。

「——お聞きになられたでしょうか。たった今、飛び降りがありました。十八人目の自殺者です。私感を交えて良いものなら、十八人目の被害者です」

アナウンサーは膝が笑っている。

「スタジオの荻原です。原田さん、ただの自殺ではなく、被害者と思われるのは何故ですか？」

「被害者のみなさんは飛び降りる時、例外なく『死にたくない』と叫んでいるのです。にも拘わらず、警官や消防隊の救助には応じないのです。私には怪奇現象としか思えません。

又、マンション下層の火事は無理心中のものようです。火災のためマンション入り口からの突入は出来ず、高層マンション用のはしご車で警官と消防が救助に出ているのですが、

逆に住民は怯えて逃げてしまいます」

「一旦、放送をスタジオに戻します。花沢大学心理学部の諸星教授に来て頂いております。

教授。この現象をどう思われますか？」

諸星と言われた初老の男は、緊張した面持ちで答えた。

「教科書的な回答なら集団ヒステリーです。元々、光栄マンシオンは震災の被害者に安価で住居を与えようと完部玄白氏が私費を投じて建てられたものです。従って、居住者は全て震災の被害者で、結束力は相当に高いものでした。故に、何かを機に集団ヒステリーを起こしても不思議ではありません。

しかし、集団自決のような行為を起こす事は考えられません。どこそこから飛び降りろと言う暗示はかけられますが、それが死に繋がる場合、本能的に暗示をキャンセルするからです。

終末信仰のような宗教的集団が集団自決を計ったケースはありますが、今回、宗教的に住民が繋がっていた形跡はありません。

マンシオンは『三角マンシオン』と呼ばれる奇異な形をしています。風水とか霊能者が解説する方がしっくり来るかもしれませんが」

そこで完部玄白はチャンネルを変えた。

現場を見たかったからだ。知ったかぶりの学者の意見など面白くもない。

玄白は白山神社からの霊的攻撃を、受け流し、その力をため込んでいた。菩薩眼を持つあの少女が来た以上、その霊脈が断たれるのは必然と言えた。

だから玄白はあのマンシオンを阿鼻叫喚で満たすことにした。憎悪、悲しみを集めることにした。イザナミ流でこの規模の呪詛を行えるのは自分以外ないと玄白は自負している。

そしてそれは成就した。

呪詛師として玄白が喜色に踊り狂うのも当然だった。

「——奇跡です!!」

唐突のアナウンサーの叫びに玄白は我に返った。

『死ぬな！ 死ぬな！ 死ぬな！ 死ぬな！ 死ぬな！ 死ぬな！ 死ぬな！ 死ぬな！』

そのシュプレヒコールが大きな波となってマンシオンを包み込んで行くのを、玄白は驚きに見開いて、それを見た。

マンシオンを覆う呪詛が人々の叫びで消えて行く。カメラはそのアジター青年を

映し出す。

「——神崎浩平！」

そう呟いて、大きな眼をさらに狂気で凶暴なものにして玄白はTVを睨む。

彩宮鈴香——その少女に術を破られたなら、玄白も納得がいっただろう。

だが、多少靈感が過敏なだけの平凡な少年に、自らの術が破られた事に玄白は深い憤りを覚えた。玄白はぎりりと唇を噛む。正直な話、玄白はこの少年が恐ろしい。強い式神が憑いている点を踏まえても、あの彩宮鈴香の霊能力に比べれば少年の脅威は木石に近い。

だが、玄白の本能が自らの天敵が神崎浩平だと告げている。

「……あの小僧は幸恵にまかせるか……」

凶つ蛇の最初の生け贄は神崎浩平に決めた。あの呪詛は破れない。玄白にはその自信がある。そして自分は生身で現れようと決めた。神崎なる小僧が倒れば、あの氷のような小娘は正気を失う。そこを蹂躪してやろうと玄白は決めた。元々、伊達とか言う男に興味はない。幸恵が呪詛師として後を継ぐ事だけを玄白は考えていたのだから……

「……つくくく」

玄白は狂人の表情で笑みを漏らした。

慌ただしくサイレンが鳴り響く病院の特別室で、小泉幸恵は母と共にTVを凝視していた。そのマンションの下層は黒い煙と炎をちらつかせている。そして炎に覆われていない所では、人形のように次々と人が落ちていく。その恐怖・悲しみ・恨みを糧に玄白の術式が組まれていく。

怖気に体が震えた。自分の体をしっかりと抱きしめて、小泉幸恵はTVに魅入る。

「……これが……これがイザナミ流完部派の呪詛なの？」

「——完部玄白。希代の呪術師の術よ。いくらイザナミ流でもここまで出来る者は少ないわ」

やはり震える声で、それでいて芯の強さを備えた声で小泉幸恵の母は答えた。

「好恵ちゃんは？ 由佳ちゃんは？ 日下部のお婆さんは？ 美子さんは？ 浜崎さんは？
死んだの？

私はそんな事、望んでいない！ ただ、伊達先輩を貶めたかっただけなのよ！ こんな事、私は望んでいない！」

狂乱する娘を前にして、その母親は落ち着いている。普段なら、ただおろおろするだけの愚鈍な女が毅然としている。それが幸恵の癩に障った。

「なによ？　なんとか言ったらどうよ？　あんたなんか完部流を継ぐ事も出来なかった癖に！」

瞬間、幸恵の頬を母が叩いた。幸恵は驚愕に言葉を失った。

母は慈愛に満ちた目で幸恵を見つめて言う。

「イザナミ流完部派の祖を継ぐからには、これぐらいで慌てふためいては駄目よ。呪詛の宗家を継ぐと言うのはこう言う事なのよ。

私はそれを拒んだ。

完部玄白の激怒は凄まじいものだったわ。でも私はお父さんと平和な家庭を望んだ。お父さんも事情を理解した上で、結婚してくれた。半ば駆け落ちだったのよ。その後、結婚を認めてくれたけどね……

でも、その時、完部玄白は新たな呪詛を考えていたのよ。お父さんを殺したのは完部玄白よ。事故だとなっているけれど、私には分かる……」

女は天井を見上げる。つと涙をこぼした。

「完部玄白は言葉巧みに貴女を騙すでしょう。でも、これだけは信じて。貴女は私とお父さんの子よ。お母さんは何があろうと貴女を愛しているからね」

女は幸恵の頭を優しく抱きしめた。

「……お、お母さん？」

幸恵は母の温かな胸の中で狼狽えた。母は幸恵を抱きしめるのを止めると、その顔をじつくりと見つめた。

その時、TVから「死ぬな！」と言う大合唱が響いた。

『——奇跡です！　一人の青年の叫びに自殺が止まりました！　集まった人々も叫んでいきます！』

幸恵の母はそれに、うつすらと笑みを浮かべた。

「——神崎先輩？　なぜ？　なぜ、叫びだけでお爺さまの術を破れるの？」

幸恵は呆然と声を漏らす。

その幸恵を母は又強く抱きしめた。

「真つ当な人には呪詛など通じないのよ。それじゃ——行くわね」

そう呟くと小泉幸恵の母は振り向きもせず病室を出て行った。

幸恵は取り残される気持ちで「……お母さん……」と呟いた。そして気付いた。今日、母はお爺さんを他人のように呼んでいた。常に怯えた小動物のようだった母。その母の気高さに幸恵は気付いた。不安に胸が苦しくなった。

陽が落ちてから、小泉幸恵の母、小泉さくらは厳戒態勢の中、誰にも気付かれない事なく光栄マンションに忍び込んだ。さくらも物心ついた頃から、呪術の基本を叩き込まれていたから陰形程度は造作もない。さくらは屋上に上がり、街を観る。多くの光りが美しい。あの明かりの一つ一つに温かな家庭があるのかと思うと、涙が出そうになる。誰にも手が届く平凡な家庭を望んだのに、さくらはそれを手に入れる事が出来なかった。怯えたりスのような顔が般若に変わる。

「鬼道！ 思い知れ！」

さくらはそう叫ぶと屋上から闇へ飛び降りた。

一連の自決事件の最後の被害者となったのだ。



走った。走った。こんな無茶は部活で自衛隊の体験入団した時以来だ。この疾走は。公園へ駆け込む。流石にもう追ってこない。

その公園が僕の家の側の公園だと気付いて、僕は少なからず驚いた。いったい何十キロ走ったんだ？

小脇に抱えた彩宮さんが曰う。「あのおく 降りして貰えると嬉しいんですけど……」

その声で彼女を抱えたまま走ってきた事を思い出した。

彩宮さんは冷たい視線で下から僕を見つめている。訂正、睨んでる。

僕は慌てて彩宮さんを丁寧に降ろした。

「凄い脚力ね……剣道部より陸上部が似合っていたんじゃないの？ あ、着崩れ直すからあっち向いてて——」

言われて僕は公園の森から抜け出し、園内のベンチに座る。

「カルピスソーダ飲む？」

そう言われて僕は頷いた。ごくごく飲み干して、今更ながらそれをくれた女性に驚愕した。

「響子姉？」

何の違和感もなく、僕たちがここへ来る事を知っていたように響子姉は座っていたのだ。「頑張ったね。TVで見てた。浩ちゃんと彩宮さん、アップで写されてたよ。奇跡の子だつてよ」

響子姉は「あはは」と笑う。目尻に涙がにじんでいた。

「浩ちゃん、なにかあつて隠れるときは、必ずこの公園だったからね。ここに来ると思っていたわ」

その勘、超能力者並だな。そう思う。

「——良い雰囲気のところ悪いんですけど、私の神崎君の隣に座らないでください」

森から出て来た彩宮さんは、機嫌の悪い子猫のような顔をしていた。そして強引に僕と響子姉との間に無理矢理座る。響子姉は苦笑しながら席を譲った。

「はい」

響子姉は水筒のカルピスソーダを彩宮さんに手渡す。

「……あ、ありがとうございます」

彩宮さんは珍しくたじろいだ。この娘はこういう無償の好意に慣れていないのだ。

二人して喉を潤すと、二人同時にお腹の虫が鳴いた。彩宮さんは顔を真っ赤にして俯いた。無理もない。もう四時になろうとしている。朝食べてから何も食べていないのだ。

響子姉は必死でお腹を抱えて笑いを噛み殺している。

「あはは…、家で、な、なにか食べて行く？ 私、料理には自信があるよ」

「——結構です！」

キツパリと言い切ると彩宮さんはベンチから立ち上がり、響子姉を睨む。

「彩宮の系列の料亭がありますから、そこで頂きます。神崎君と二人で！」

「あらまあ？ 豪勢なデートね。私は除外？」

「当然です。お隣様だからって、お誘いする義理はありません！」

「——だよね？」

響子姉は笑いながら立ち上がり、彩宮さんと向き合った。

「私も少しは見えるのよ……」

響子姉は恐い顔をしていた。

「三角マンション。あれは呪いのとぐろに巻かれていたわね？ ねえ、鈴ちゃん。浩ちゃんをそんな世界に巻き込むなら、私は認めない。浩ちゃんは私の大事な家族なんだから」

彩宮さんは唾を飲み込み怯んだ。こんな彩宮さんは初めて見る。彩宮さんは口籠もつて

後ずさる。

傍観している場合じゃない。僕は立ち上がり二人の間に割って入った。

「——なに？」

響子姉は僕を見据える。本気で怒っている目だ。恐い……。

「——違うんだ。響子姉。僕が関わってしまったから、仕方なく彩宮さんが力を貸してくれてるんだ」

「なぜ、浩ちゃんが関わるの？」

「響子姉も知ってるだろ？ 伊達が呪詛を受けているんだ。それを助けようとしているんだよ！」

「伊達君を狙うなら、他に死人が出ることはないでしょう？」

「変な爺さんが絡んでるんだよ。響子姉。イザナミ流とか言う呪詛を使うんだよ！」
必死に言うと、響子姉は腕組みして瞑目した。

「——浩ちゃんが言うのなら信じましょう。でも浩ちゃんが怪我でもしたら、私が浩ちゃんを取るからね。彩宮さん」

珍しく怯んでいた彩宮さんはそれで背筋を伸ばした。

「私は私を盾として神崎君を守ります！」

響子姉を見据えてきっぱりと答えた。

それで響子姉はにぱつと笑っていつもの顔に戻った。

「じゃ、二人とも頑張つてね♪ 不純異性交遊は駄目だぞ」
などと曰いながら、フェイドアウトした。

◇

(なぜ、こんなに孤独なの？ なぜ、こんなに寂しいの？)

病院の窓から夜景を眺めながら、小泉幸恵は思う。自分たちの住まいだった光栄マンションはライトに照らされ、異形な姿を見せている。

——人が死んだ——

呆然とそう思う。なぜこうなったのか分からない。

マンションで暮らしていた人々は結束が堅かった。都会のマンションにありがちな人付き合いの悪さはなかった。『あの日』に大切な何かをなくし、格安の家賃に逃げ込んだ人々だった。

皆、一芸に生え出た人たちだった。曲者もたくさんいた。自分よりも優れた人——例えば、彩宮先輩のような——そう言う人々に囲まれて、私は皆に嫌われる事を恐れた。

だって、私にはなにもなかったから……。人を呪う女だなんて思われたら、たちまちに孤立してしまうから、ダメッ娘を演じた。

そんな中で突き出ていたのが伊達先輩だった。良くも悪くも凄く目立った。朝礼台に彼が登るのは叱られるか、褒め称えられるかの両極端だった。

だから私は告白した。抱いて欲しいと言った。処女を捧げた。伊達先輩は友人達に「こいつ、俺の彼女なんだぜ！」と明るく紹介して回った。その時は私も幸せだった。

本当に何時変わっただろう？

先輩は肌を合わす度にだんだん笑わなくなっていた。多分、私の本質に気付いたのだろうと思う。そして私の代わりを見つけてから、振った。

ほら、不幸。

——だから、私は呪いをかけた。

でも、こんな人死に出るような呪術を望んではない！

……………

違和感があった。私は何時から伊達先輩を憎んだのか？

私は伊達先輩を憎んではない。プライドを傷つけられただけだ。

——では、この憎悪と復讐の念はどこから来るのか？

それに気付いて、愕然としたとき、部屋がノックされた。

「お母さん？ こんな遅くまで何してたのよ！」

「いえ、警察のものです。お伝えする事がありますので、入らせて頂きます」

ソプラノの若い声が答える。

背筋を怯えが走った。呪法がばれたのかと思った。

入って来たのは20代後半と見える背の高い清潔感のある婦人警官と、よれよれのスーツを着た冴えない中年のおじさんだった。

婦警さんは丁寧にお辞儀して言った。

「N県警の鷲尾と申します。こちらは刑事の相良さんです」

「どうも。夜分に済まないですね。相良です」

刑事は愛想笑いを浮かべて手を差し出した。私は握り替えさずに、その無骨な手を眺めた。刑事は私が反応しないので、差し出したその手で頭をこしこしと掻いた。そして、婦

警さんに目配せをする。

「小泉幸恵さん、ソファアに座って落ち着いて話をさせていただけませんか？」

私は無言でソファアに座る。

警察だと名乗る二人は私と向かい合わせにソファアに座る。

「煙草、宜しいかな？」

相良刑事は煙草の箱を手に笑いかける。

「病院は敷地内禁煙です。それより何のご用でしょうか？」

私の言葉に刑事さんは、又、頭を掻いた。そして煙草を胸ポケットに戻す。鷺尾婦警がその様子を見つめながら、小さく吐息を漏らす。

そして、背筋を伸ばすと私の顔を真っ直ぐに見つめた。

「幸恵さん、どうか心を落ち着けて聞いてください。TVは観ましたか？」

「……はい」

か細い声で私は答えた。刑事さんが鋭い目で私を観察しているのを意識しながら。

「先程、二十八人目の被害者が出ました。投身自殺です」

「——え？」

私は間拔けな声を漏らした。あり得ない。お爺ちゃんの話はもう効果はない。それにあのマンションに今、人がいるとは思えない。

婦警さんは瞑目すると大きく息を吸い、あり得ない事を言った。

「投身自殺されたのは小泉さくらさん。——貴女のお母さんです」

頭をガンと殴られた気がした。

あり得ない。お母さんはさっきまで、私といっしょに——

何？ この時間？ 夜の10時じゃない？

「嘘です。母は私といました。今、席を外していますが、まもなく戻るはずですよ」

感情を押し殺して私は答えた。

鷺尾婦警は瞑目すると「ご愁傷様です」と頭を下げる。相良刑事が言った。

「お嬢ちゃん。あり得ない事が起こったんだよ。現場は警察で警戒態勢を引いていた。鑑識が何か手がかりがないかマンション中を捜査していた。小泉さくらさんは、そのただ中を誰にも見られず屋上まで登ったんだ。今、完部さんに検死に立ち会って頂いている。

どんな些細な事でも良い。

何故、集団自殺が起こったのか？

何故、お母さんが死んだのか？
心当たりを教えてもらえんかね？」

このみずばらしい刑事は何を言っているんだろう？ 理解出来ない。頭が空っぽになり、同時に怒りがその隙間を埋めた。

「——嘘よ！ お母さんが死ぬ理由がないもの！」

そう言って立ち上がった私の両肩を鷲尾婦警が両手で押さえた。

「落ち着いて。幸恵さん」

私はその両手を振り払った。

「嘘よ！ 嘘よ！ 嘘よ！ 嘘よ！ 嘘よ！ 嘘よ！ 嘘よ！ 嘘よ！ 嘘よ！ 嘘よ！」

誰も死んでいない！ 死ぬ理由がない！ TVは嘘を流したのよ！」

私は狂った。

あらかじめ控えていたのだろう。医師と看護婦が飛び込んで来て私に鎮静剤を打った。

私は狂いながら昏睡した。

夜半。

私は人の気配に目覚めた。完部のお爺ちゃんが私の胸をまさぐっていた。

「——お爺ちゃん？ 止めて」

かろうじて、そう言う事が出来た。でも意識がホワイトアウトしている。夢を見ているようだ。

いや、悪夢だろう。現実ではないはずだ。黒い蛇が私の体中をまさぐっている。性感帯を刺激し続ける。

「……いや……せんばい……」

私の体をまさぐって良いのは伊達先輩しかいない。

「——くくく。それがお主の男だった者の名か？ 喜べ。幸恵。うぬが呪詛は成就する」
ねっとりまとわりつく、その声に私は正気を取り戻した

完部玄白と呼ばれるそれは全裸だった。老いた体に相応しくない男根が隆起している。それは私を知る男根とは異なっていた。大きい。凶器に似た形をしている。どくんどくんと脈動し、赤黒いそれ自体が動いている。

それは脈動する蛇そのものだった。

「幸恵、主は知るまい。お主はさくらと儂の間に出来た娘じゃ。あの男は儂が目の前でさ

くらをいたぶっても何も出来なかった。二度、儂の精を受けるお前は『凶つ蛇』そのものとなる。さくらは身をもつて儂の呪詛を成就させた。

「愚鈍な娘じゃったが、最後には役に立ちおった」

「ひひひ」

お爺ちゃんは不気味な笑いをこぼす。

「お主は呪詛を成就させ、儂は不死を得る。さくら同様儂の贄となれ！」

お爺ちゃんは私の股を大きく開かせた。

「喜悦を味わうが良い！」

性器に走る異物の挿入感に私は叫んだ。

「やめてー！！」

それが人としての私が上げた悲鳴だった。私は正気を失った。

(四)

公園の入り口で待つこと十数分。僕は目を疑った。黒塗りのリムジンがやって来たのだ。運転手は、車を降りて深々と礼をする。

「お待たせしました。お嬢様」

執事のような格好をした運転手は、顔を上げ僕を見る。一瞬、驚愕の表情を見せたが、すぐその表情を消して僕にも礼をした。そして頭を下げたまま、後部座席のドアを開く。スライド式のドアだった。僕は呆然としてしまった。そんな僕に「早く、乗って」と彩宮さんが急かす。革張りのシートなんて初めてだった。中はひんやりとクーラーが効いていた。

「私は料亭・彩宮の狭間と申します。今日の送迎をさせていただきますので、宜しくお願
いいたします」

狭間さんは、そう行って運転席に座る。

「——神崎と言います。彩宮さんの同級生です」

「恋人でしょ？」

彩宮さんはそう言って、僕の頭を軽く殴った。狭間さんはくすりと笑った。

「良いお名前ですね。神崎様。やはりお嬢様とお付き合いでする方は人間としての格が違いますね」

「——はい？」

僕は訳が分からず鉄面皮になる。

「ニュースを拝見しております。『奇跡の青年』と報じている所もありました」

(——困ったな)

僕は耳の後ろをかりかりと掻く。だが、今はそれより重要な事がある。

「それで何人亡くなったのです？」

狭間さんはちよつと眉を曇らせた。

「二十七人亡くなられたと報道されてました……」

僕は両手を握りしめて俯き、唇を噛んだ。

目の前で死んで行くのに僕はむざむざ二十七人もの人を見殺しにしてしまった。そんな僕を横目に彩宮さんが訊ねる。

「何人、無事保護されたのかしら？」

「三十二名だそうですよ」

狭間さんは深々と礼をしたまま答えた。彩宮さんは僕の背中を思いつき叩いた。

「ほら、あなたは三十二名も救ったの！ 誇りを持ちなさい。マイナス思考はダメよ！」

「本当に今時珍しい方ですね。ああ、お嬢様もぼつちり写ってましたよ。神崎様に抱かれて。帰ったらお父様に何か言われますよ」

狭間さんは唇の端をつり上げた。

「平気です！」

彩宮さんはキツパリと言い切った。

竹林の中の一本道をリムジンは走る。そのまま料亭の前で停まり、また深々と頭を下げた。入り口にはずらりと割烹着の女性と留め袖の妙齢の美女が出迎えに並んでいた。

女将とおぼしき女性は彩宮さんにほんわかとした笑顔を向けた。

「お嬢様。TVを拝見いたしましたわ。本当に素敵な男性をみつけましたね」

そして僕の手を取って、「お嬢様を宜しく願います」などと言う。

「——っ。なにも引け目はないわ！ 麻上さん、離れは押さえてくれた？ そう、それなら櫃まぶし、どんとお櫃ごと持ってきて！ 鯛茶漬けも。お腹が膨れそうなの適当に一度に持って来て頂戴！」

「はいはい。お邪魔はしませんよ。どうぞ睦み合ってくださいな」

やはりほんわかと答える女将に、彩宮さんは顔を朱に染めた。

「麻上さん、からかわないで！ 行こ！ 神崎君」

彩宮さんは僕の手を取ってずんずんと廊下を闊歩した。

——食事は凄く旨かった——

鰻のフルコースにシメの鯛茶漬け。初めて食べるものばかりだった。天ぷら盛り合わせはウチで作る物とは質が違った。彩宮さんは、あの小柄な体のどこに入るのかと思うほどに良く食べた。

「うー。もう食べられない。寝たい。神崎君、ここに泊まろうか？」

横になって足をバタバタさせながら、とんでもない事を言う。まるで別人だ。

「いや、さすがにそれは不味いだろ？ それに僕は行くところがあるから……」

「伊達君のところ？」

畳に横になりながら、感情の分からない瞳で僕を見てそう言う。黙って頷くと軽く吐息を漏らす。腕時計を確認して、彩宮さんは立ち上がった。

「午後七時半か。ちよつと遅いけど行きましよう？」

「あの、良いの？ あの映像流れているんならお父さん怒ってない？」

「ああ、父は私には何も言えないわ。彩宮の系列からは退いて貰ったから。今は私が当主見習いよ」

何か凄まじく剣呑な気がしたので詳しく聞くのは止めた。彩宮さんも続きは話さない。

「じゃあ、車を回しましょう」

僕は苦笑した。このお嬢様は世間の事が分かっていない。

「あのさあ、彩宮さん、伊達の家のリムジンで押しかける気？」

「——不味いの？」

彩宮さんは不安そうな声で訊く。なんだかしおらしくて愛おしい。

「ご近所さんの話題を提供する事になる。駅まで送ってもらえば、充分だ。後は腹ごなしに歩こう」

「神崎君がそう言うんなら……」

彩宮さんは少し寂しそうだった。

夕日の中、真昼のけだるさが残った住宅街を歩く。流石に少し疲れた。明日は筋肉痛だなと思しながら、伊達の家チャイムを鳴らす。

「は〜い〜」と明るい声で答えたのは三枝だった。

新婚気分だな？ 姉御？

「――変わりはない？」

彩宮さんが絶対零度の魔女モードで尋ねる。

「それがさあ〜 正彦が午後からおかしいの。妙に怯えて部屋から出たくないと言うし、この暑さの中、『寒い』と言って毛布にくるまってるのよ。側にいてくれと言われるし……」

(……ああ、昼間の呪詛の波に当てられたか……でも、嬉しそうだな。姉御)

まあ、小泉さんと深く繋がっていたんだ。影響が出ない方がおかしい。

「その様子じゃ、TVもラジオも聞いていないのね。昼間の騒ぎを知らないの？」

「ああ、なんか凄かったね。どっかで火事でもあったのかしら？ 気になったけど正彦がおかしくなったのも、それ位だったからニュースも見れなかったのよ」

三枝は肩を落としてため息をつく。

僕と彩宮さんもため息をついた。

「小枝さんは？」

「サイパン」

「は？」

「一週間ほどサイパン行くから、正彦の面倒を見てくれって言われちゃった」

三枝は頬をそめてキヤと笑った。

幸せモードをぶんぶんさせてる三枝には悪いが、現状を認識して貰う必要があった。

「居間にTVあったよな？ 三枝と彩宮さんは居間に居てくれ、俺は伊達を連れてくる」

「御苦労様」

そう言う彩宮さんの声は沈んでいた。

「――なんだよ？ これ？ 俺一人殺すのに二十七人も殺すのかよ?!」

伊達は毛布にくるまったらま、当たり前散らした。

三枝は顔色を無くして彩宮さんに支えられていた。

「確かにな。正気を無くしているとか思えない。完部玄白に操られているんだろうね。

今の呪詛の相手は多分、僕だ。彼女自身がそう言った。今週の土曜日の夜が勝負となるだろう。

伊達よ。

小泉さんの恨みは深い。お前の身近な人間を全て殺して、最後にお前をなぶり殺す気だよ。だが、本当の敵は小泉さんじゃない。完部玄白そのものだ」

「分かんねー！ 分かんねーよ！ なんで俺がこんな目に会うんだよ！」

僕は伊達の頬に平手打ちを加えた。伊達は呆然とした表情で僕を見る。

「三枝に申し訳ないと思わないのか？ 何の為に僕と彩宮さんが来てると思うんだ？」

僕の言葉に「みんな、すまない」と伊達は土下座した。

それを冷ややかな目で見ながら、彩宮さんは姉御に言った。

「明美。貴女ここに泊まり込んで、伊達君とSEXしまくる気はない？」

剛速球の直球を投げる。三枝は一瞬、息を飲み、顔を真っ赤にした。

「——な、なにを言うのよ。鈴。そんなの出来るわけじゃないじゃない？」

「私の家で勉強会をすると言えば良いわ。邪法には邪法ってね。実際、SEXって呪法なのよ。真言立川流とか知らない？」

「知らないわよ！ この件が片付かないとそんな気になれないよ！」

「……俺は出来るけど……」

「五月蠅い！ 馬鹿！ 縁を切るわよ！」

姉御はソファアのクッションで伊達をどつき回す。

「あのさ、彩宮さんが言いたいのは、伊達の体に小泉さんの体液がまだ染み込んでいると言うことなんだよ。それは呪詛の媒介となるんだ。だから……」

僕は赤くなりながら説明した。

「ちよっと、待って！」

彩宮さんの声に皆顔を上げる。

【緊急速報】のテロップがTVに流れていた。マンションをバックに若々しい男性アナウンサーが写った。

『現場の高坂です。たった今、三十分程前に二十八人目の飛び降り自殺があった事が警察から発表がありました。自殺者はこのマンションの所有者・完部玄白さんの娘で小泉さくらさん、四十二歳と見られています。厳戒態勢の中、再び惨事を許した警察の警備態勢が問われています。今回の集団自決について警察は九時からプレス発表を行うそうです』

—— なっ？

僕は驚きに息を飲んだ。それは皆も同じだった。伊達は涙をこぼしていた。

「幸恵のおばちゃんが死んだ？　ありえねー。俺、幸恵の家まで謝りに行ったことがあるんだ。幸恵には会えなかったけど、おばさんは俺を許してくれた……」

伊達は泣き続ける。

「だめ押しになったわね。これで小泉さんは居場所を無くした。完部玄白に良いように操られるわ……」

沈黙が流れる。僕はその沈黙を破った。

「なあ、みんな。いったん伊達の部屋に戻ろう」

「そうね。お茶でも煎れましょう。落ち着かないとね。明美お茶はどこにあるの？」

「私が煎れるよ。鈴」

「良いの。私が煎れる。貴女は伊達君の側にいなさい」

「ごめん。鈴。お茶は食器棚の下にあるわ」

「珈琲、紅茶、緑茶、どれが良い？」

「珈琲かな？」

「分かった。上がって」

「――鈴」

「なに？」

「ごめんね」

「――馬鹿。上がってなさい」

明美が上がってから、私は吐息をついた。実際、こんな大事になるとは思わなかった。女子高生のたわいない遊びのような代物だと思っていた。どう手をつけて良いのか分からない。神崎君が張った結界も人が張れる結界ではないが、その強固な結界も通用するかどうか予想もつかない。

『鈴香よ』

突然背後から声をかけられて、私は驚いた。そこには神崎君の後ろのお姉さんがいた。

『鈴香よ。私は呪詛の成就是あり得ぬと申したぞ。忘れたか？』

「すみません。失念していました。けれど、あれほどの呪詛は見ることがないもので……」

「しつかりしておくれ。あれを人の世に留めるのは、お主しかおらぬのだからな。後、迅鬼は借りたぞ。使い勝手が良いからな」

そう言うと巫女姿のお姉さんは消えた。

二階へ上がると、神崎君の結界が脈動していた。部屋に入ると神崎が立ち上がって深呼

吸をしていた。

「なにしてるの？」

私の問いに、神崎君は笑顔で答えた。

「ここの結界、僕と連動してるみたいなんだ。これならいけるかもしれない」

「そりゃ、貴方が張った結界だもの。繋がって当然でしょう？」

神崎君は耳の後ろを掻いた。

「こんな凄い結界。僕には張れない筈なんだけど……まあ、手が増えたのは嬉しい」

「どういう作戦なの？」

珈琲をブラックで飲みながら私は訊いた。

「凶つ蛇を入れさせない。結界を張り続ければ、あれは体当たりしか手がないからね。当然、傷つく。弱らせた上で小泉さんを蛇から切り離す」

思わず珈琲カップを落としそうになる。まだ、そんな事を言っているのか？ この人は？

私は——私は剣が欲しい。お姉さんが渡してくれた剣。未だ私の元には現物が届いていない。あの剣なら凶つ蛇でも切れそうな気がしていた。

鍛え抜かれた玉鋼。思わず魅入ってしまう妖しく燃え上がる波紋。私の体を微熱が覆うようになる。微睡むように瞼を閉じる。深淵の闇に浮かび上がる燃え上がる一筋の青みを帯びた銀色の輝き。妖を斬るために特化した美の結晶。その剣の姿がありありと脳裏に浮かぶ。その姿に私はしばし陶然とした。

「……すず…鈴」

誰かが私を呼んでいる。この微睡みに浸りたいのに、誰かが私を呼んでいる。

「……ん、だれ？」

私はそんな馬鹿げた台詞を言った。目覚めるように瞼を開けると、明美が私の顔を覗き込んでいた。明美は私の目の前で手をひらひらさせる。

「……大丈夫？ 今日の事で疲れたんじゃない？」

「ん？ 大丈夫。ちよっと考え事してただけ。で、なに？」

明美は微かに吐息をついた。

「だから、神崎が夜は正彦の所で一週間泊まり込むと言う話よ。貴女は良いの？」

「神崎君がそういうなら異存はないわ」

そんな私の様子を神崎君がじっと見つめている。目に感情がない。表情からは何も読み取れなかった。

「じゃあ、話は決まりだな。僕は彩宮さんを送ってから、戻ってくる。三枝は遅くなっても大丈夫なのか？」

「まかせて！」

神崎君の台詞に明美はどんと胸を叩いた。

「それでも両親からは信頼されているんだから、終電でも大丈夫だよ」

明美は朗らかに笑って見せた。

「世話をかける」伊達君は仰々しく土下座した。

神崎君と少しでも一緒に居たいので、私は車を呼ぶような野暮な真似はしなかった。神崎君が駅に向かうのに無言で付き従った。神崎君も無言だ。良く気の回る神崎君にしては珍しい。

「ねえ、神崎君疲れてる？」

そう尋ねると、神崎君は素直に頷いた。

「嵐のような一日だったからね。精神的に疲れた」

「車呼ぶ？」

「彩宮さんと居たいから、これで良い。彩宮さんは呼びたいの？」

私は首を振った。

「私も神崎君と居れるほうが嬉しいよ」

微笑みを浮かべてそう言うと、神崎君もようやく相貌を崩した。

「彩宮さん、伊達の部屋で止観してただろ？」

「弛緩？ 気を緩めたつもりはないけど……」

「違うよ。天台密教の止観。座禅は無になれと言うけど、密教は違うんだ。物をとことん思い描く。彩宮さんほとんどない剣を観想していたね」

「——見えたの？」

「ああ。あれほどの妖物ようぶつなら分かる。村正だね？」

「ええ……」

「あの剣は小泉さんには使わないで欲しい。使うなら完部玄白にして欲しいんだ」

「—————！」

罵倒も含めて色んな言葉が、瞬時に頭の中を駆けめぐった。でも、私はその言葉を飲み込んだ。確かに倒すべき相手は完部玄白だったからだ。伊達君を小泉さんの生き霊から救

うなんてレベルを遙かに超えた事態になっている。

「分かったわ。でもあの剣はまだ私の手元じゃないの。天野さんが持っているのよ。前に言っただでしょ？ 私が幼い頃、家に居た絵描きさんよ。ルーンの師匠でもあるわ」

「……今、手に入るみたいだよ……」

神崎君が哲学者の表情でそう言った。私達はいつのまにか駅前まで来ていた。切符売り場の真ん前にライダースーツを着た美の結晶が私達を見つめて立っていた。

「——ひさしぶりだな。瀬尾」

「おひさしぶり。神崎君。いや、奇跡の御子か？」

人間として美の極致を体現したようなその人は、鈴を転がす声音で答えた。怖気が立つほどに良い声をしている。ライダースーツを着ていなかったら性別すら分からなかっただろう。

「なんでインターハイを辞退した？ お前なら楽々優勝しただろう？ 伊達が悔しがっていた。瀬尾がいない大会で賞状貰っても意味がないってね」

「神崎君。僕も中々大変な事になっているんだよ。生き霊がらみでね。ニュースは見たよ。のっぴきならないことに踏み込んだね」

神崎君の後ろに隠れて睨んでいた私に、瀬尾と言う人は穏やかな笑顔を浮かべると、頭を下げた。

「はじめまして。彩宮さん。瀬尾と言います。今夜は天野さんの名代で来ました。お家に伺ったら、まだお帰りではないと言ったので、当たりをつけて、ここでお待ちしてました。神崎君とは剣友になります」

私は視線を神崎君に向けた。

「その通りだよ。中学から全国大会を制覇し続けた男だ。おそらく日本で一番強い剣道家だよ」

「それはどうかな？ 君の所の鳴神先生には勝てる気がしないし、今の君には勝てるか怪しいね。間違えたじゃないか？ 神崎君？ 彼女の影響なのかな？」

瀬尾と言う少年は揶揄を含んだ声を神崎君に投げかけた。かちんと来て私は言った。

「瀬尾様と言いましたね。初めまして。彩宮鈴香です。天野さんの名代とのことですが、貴方とはどういう関係ですか？ お稚児さんでもあるまいでしょうに」

瀬尾と言う少年は私の言葉に微笑を浮かべただけだった。応えていない。

「流石は、天野さんが見込んだ人ですね。どうかと思ったけど、確かにこれを渡すに相応しい」

彼は足下に置いたリュックサックから、絹の白布に包まれた長い桐の箱を取り出した。封印を施してあるが、それでも妖気を孕んでいる。

「村正か……」

苦々しげに神崎君が言う。

「分かるんだ……」

瀬尾と言う麗人は、驚きを含んだ声で神崎君を見る。そして、私に一礼をしてうやうやしげに、その箱を手渡した。

「役目は果たした。それでは僕は奈良まで帰ります」

「もう遅いわ。私の家でお泊まりになって下さい。天野さんの名代ならおもてなしをしなければ」

「堅苦しいのは苦手です。馬に蹴られるのもイヤなので帰りますよ。ああ、忘れていた。

天野さんからの伝言です。『通夜には行け。見定めろ』とのことですよ」

そう言う少年は駐めてあったスポーツバイクにまたがりエンジンをかける。

「わざわざ済まなかったな」

神崎君のその言葉に少年は笑った。

「死んじや駄目だよ。片付いたら、一度剣を交えよう」

私は胸に剣を抱えたまま呆然とその姿を見送った。

◇

事件から翌々日の晩。小泉さくらさんのお通夜が執り行われることになった。司法解剖とかがあって、延びたのだ。僕と彩宮さんには学校の理事長から直々に桜ヶ丘高校の代表として葬儀に出て焼香して欲しいと依頼があったが、断った。そういう立ち位置に僕等はいない。

通夜は完部玄白の私邸で執り行われた。贅を尽くしたこぢんまりとした純和風の家屋だった。彩宮さんの家には劣るが、これほど見事な庭を備えた家はそうはない。彩宮さんの喪服は黒の着物だった。紫水晶の数珠を持っている。僕は父親の物だった黒のスーツを借りて来た。伊達と姉御が是非とも行きたいと言ったが、無理矢理に止めさせた。敵陣視察に行くのに、狙われている伊達を連れて行く訳にもいかない。僕と彩宮さんが門に近づく

とプレスフラッシュが何度も輝いた。警戒に当たっていた警察官達が蹴散らしたが、死者への礼を弁えていない。

完部玄白は参列者に丁寧にお辞儀を繰り返し、その度にハンカチで涙を拭っていた。演技とは思えない。心から娘の死を悲しんでいるように見えた。僕が櫛を備えようとした時、一瞬、その目が赤く光った。

僕は息を飲んだ。

完部玄白の気など恐くもなかった。僕が息を飲んだのは小泉さんの変貌にだった。焦点の合わぬ目で天井をぼうと眺めている。何かうわごとを言っているが聞こえない。時折、笑みを漏らしていた。

僕と彩宮さんが並んで櫛を備える時、ゆつくりとした動作で小泉さんは視線を僕等に向けた。焦点の合わない虚ろな目で僕たちを見た。その目は地獄への穴のようだった。そして小泉さんは「にい〜」と笑った。怖気が立った。人の漏らす笑みではなかった。

彩宮さんが僕のスーツを掴む。顔面が蒼白だった。スーツを掴む手は小刻みに震えている。彩宮さんは声を殺して泣いていた。

僕は彩宮さんを支えるようにその場を後にした。

完部玄白の家を出ると、彩宮さんは道路にしゃがみ込み嘔吐した。僕はその背中をさする事ぐらいしか出来なかった。実を言うと少し驚いていた。彩宮さんなら何事にも動ぜず

『絶対零度の魔女』を貫き通すと思っていたからだ。

彩宮さんは嘔吐しながらも僕の手を強く握った。

「……あの娘、狂ってしまったる」

彩宮さんは泣いている。

「お母さんが亡くなったんだ。おかしくもなるよ」

そう背中をさすりながら言うと、彩宮さんは僕の手をさらに強く握り、爪を立てた。

「そんなんじゃない……。あの娘、あの娘は完部玄白に犯されたのよ。何度も何度も！

私は見てしまった。こんな、こんな酷い事はないわ」

彩宮さんは嗚咽を上げる。

僕はその言葉に角材で頭を殴られたような衝撃を受けた。

◇

『見定めろ』

その言葉が頭の中で響いていた。天野と言う人物がどういう人かは僕は知らない。けれど、この事態を推測していたとしか思えない。闇の中、寝付けぬままに僕は暗い天井を睨み続けていた。小泉さんの笑みが頭に何度も浮かぶ。すでに化生と化した者の笑みだった。正気を失い完部玄白の道具になってしまった小泉さん。それを僕は救えるのか？

横臥したまま天井へ向かって手を伸ばす。

差し出したこの手を掴むだけの理性が小泉さんにあるだろうか？

『否！ 否！』と唾う完部玄白の姿が目には浮かぶ。畜生と唇を噛む。

僕は天井に伸ばした掌を拳に変える。今の小泉さんには縋る物がなにもない。ここで僕が見捨てたら、誰が小泉さんを救うんだ？ この身に変えても！

そう思った時、瀬尾が言った言葉が蘇った。

「死んじや駄目だよ」

ああ、あれはこういう意味だったんだ。我が身を代えても人を救うと言うのは、あまりにも独りよがりなんだ。僕には家族がいる。彩宮さんがいる。剣を交えようと言う友人がいる。それらを切り捨ててはいけなんだ。だから僕はそれを小泉さんに知らしめれば良いだけなんだ。いや、苦難の道だけど出来ないはずはない。

そう思ったら眠気に襲われ泥のような眠りに落ちた。

『見定めろ』

天野さんの言葉が頭に響いていた。私は口をゆすいだけで、喪服のまま道場で富田流八の奥義の形を村正で繰り返す。激しい足技の音と空を斬る村正の音が呼応する。富田流の最終奥義『縮地』を私は会得しようとしていた。

師匠に言わずと奥義書に名前が記されているだけで、過去『縮地』を使えた者はいないと。私は違うと思う。名が残されているのなら、奥義は存在する筈だ。八の奥義その体術、歩法に最終奥義へ至る道が残されている筈なのだ。

鴉が鳴き出す頃、流石に私は疲れて、どうと前倒しに横になる。喪服は汗で濡れ雑巾のようだ。道場の床も汗で濡れている。

『はっ！ 小娘。それが主の限界か？ 所詮、人であるお主に儂は倒せぬ』

道場の中央に凶つ蛇を連れた完部玄白がいた。

これまで感じたことが無いほどの怒りが脳天を貫き、私の意識はホワイトアウトした。気が付けば、完部玄白はいなかった。迅鬼が肩から血を流し、私に組み伏せられていた。

「……体得出来たようじゃな」

『お姉さん』が淡い紫の振り袖を着て道場の入り口に背を預け、キセルを吹かしてた。

気がつけば私は四メートル程の距離を瞬時に飛んだことになる。

「最終奥義って……空間移動なんですか？」

「そうじゃな……。厳密にはちと違う」

お姉さんは道場中央の私の元へ来ると、迅鬼の肩に手をかけた。迅鬼の姿は煙のように無くなる。

「超能力じゃないですか？」

私は叫んだ。

「……そうでもない。ただ速度が弾丸のように速いだけの話じゃ。完部玄白。必ず討ち取ることじゃ」

「はい。必ず」と頭を下げた時には、お姉さんの姿は消えていた。

一週間はあつと言う間に過ぎた。私は『縮地』を試したく、神崎君に昼は家の道場へ来て貰っていた。双方、木刀を使った。私は短剣。神崎君は柳生流の木刀だ。軽いが真剣に似た作りになっているので、人を斬る刃筋を学ぶにはもってこいの代物だ。

驚くべきは神崎君だろう。

『縮地』を初めて見た時は、なすべくも無かったが、それでも心臓を狙った一撃を外して肩口で受けた。

二回目は双方隙が見いだせず、睨み合うだけで終わった。

三回目は神崎君は突きを放った。相打ち覚悟の技だが『縮地』が見えていないと出来ない技だ。感嘆した。

「初見では、まず破れない技だよ」

家の応接間で神崎君はそう言った。玉露を飲みながら栗饅頭を頬張っている。

「でも、だからこそその奥義なんだろうね。どんな凄い技でも見られたら、対策を講じられる。一撃必殺を狙うからこそ、同門でも気付いた者しか会得出来なかったんだろう」

同じ流派を学んでいる者がいないので、彼の言葉は私には嬉しいものだった。

「彩宮さんは、村正で誰を狙うの？」

神崎君は茶飲み話のように言う。まあ、現実にお茶を飲んでるんだけど……

「――完部玄白。他に狙いはないわ」

「ここに来て意見が合ったね。完部玄白をしとめるタイミングは僕が作る。僕は小泉さんを救うよ」

朗らかに微笑んで、この人は言う。

救ってどうするのだ？　ひと思いに、せめて人間としての記憶が無い内に断ってしまおうのが人情ではないだろうか？　完部玄白が消えれば、小泉さんに身内はいない。一人で母の死と二十七人もの死を背負う事になる。そう問いつめると、神崎君は「そうだね」と微笑んだ。「それでも前へ進んで行かなきゃ人間じゃないんだよ」

私は初めてこの人を恐いと思った。

伊達君の家のチャイムを鳴らすと「はい。どちら様ですか？」と言う怯えた明美の声がした。「――わたしよ」そう応えると安堵の吐息がして玄関が開いた。神崎君がわしわしと明美の頭を撫でる。

「三枝よ。今から緊張してたら保たないよ」

「分かっているわよ！　だから髪が乱れるから止めて！」

なるほど手慣れたものだ。神崎君は明美から姉御の顔を引き出した。

「伊達君はどうかしら？」

「寒気とかは収まったようだけど、二十八人死んでるのがショックみたい。お通夜にも行けなかったしね……部屋でいじけてるわ」

「じゃあ、お邪魔するわね」

私は真っ直ぐ伊達君の部屋に上がった。

「伊達君、入って良い？」

「あ、鈴ちゃんか。どうぞどうぞ。神崎は？」

「直、来るわ」

私は白に蝶をあつらった振り袖姿だ。懐には村正がある。

伊達君にも村正の妖気が伝わるのか？　「鈴ちゃん、今日は凄え風格あるな」そう言った。「そう？」にべもなく、そう応えようと私は正座して伊達君を霊視する。僅かだが黒い臍の尾のようなものが外に出ていた。

（小泉さんの体液は抜け切れていないのか……）

まあ、守りの障害となるものではない。

そうこうする内に神崎君と明美が上がって来た。

神崎君は五銚鈴と、使い込んだ密教系の念珠を手にしている。なんにも言わずに座布団にあぐらをかいた。座る調子五銚鈴がちりんと鳴ると、結界が構成を強くした。なるほど、そう言うものなのか。

「プチジュールのチーズケーキあるんだけど、みんな食べるかな？ それとも精進潔斎しないといけないのかな？」

おずおずと明美が訊ねる。私は笑って応えてあげた。

「精進潔斎？ なにそれ？ そんな必要はないわ。平常心でいなさい。夜は眠れないでしょうけどね」

明美の顔が一瞬引きつった。

夕ご飯が済んだ後、神崎君は伊達君の部屋で寝ころんでマンガを読み始めた。いつもは見せないだらけつぷりだが、私には愛おしく見えた。

「……ねえ、鈴ちゃん」

伊達君がへこへこしながら訊ねて来る。

「占いで今日どうなるか？ 分からないのかな？」

「自分が関わる事でルーンを使うのは禁じられているのよ。それに私達が動じて見える？」

「……いや、あんまり普通なので気抜けしている」

じゃ、言いましたようか？

「小便に行く準備はすませた。部屋の片隅で命乞いする準備はOK？」

伊達君の顔が青ざめる。

「大丈夫。その台詞言った若造は死ぬから」

なんにも聞いていないのかと思ったら、神崎君はきっちり聞いていた。ちゃんとネタを拾ってくれたのが嬉しかった。

「そろそろ開演だ。彩宮さん、準備をしよう」

神崎君は立ち上がり、「結界の穴はあそこに空けるから」と窓側の壁を指さした。

私はその反対側に岩塩を砕いた塩で魔法陣を描く。

「明美、伊達君。この魔法陣に入って。事が終わるまで絶対出ては駄目よ」

「……身固めも説明したほうが良いよ」

神崎君がぼそりと言う。

「ああ、そうね。明美これから起こることは全て悪夢だと思いなさい。魔物は伊達君を奪おうとするでしょうけど、貴女が抱きしめて守って。骨が砕けるくらいに抱きしめて」

「それだけで良いの？」

「ええ、伊達君の方から抱きついてくるでしょうけどね」

そう言って私は笑った。伊達君も明美も緊張した面持ちで、私を見つめている。冗談のつもりで言った台詞に反応がないのは悲しいなあ

伊達君と明美を魔法陣に座らせ、その前に私と神崎君が座る。私は正座。神崎君は結跏趺坐けつかふざ座禅の座り方である。

午前0時になった所で、ごーん！ ごーん！ と部屋が鳴った。大地震並の衝撃に感じたが、テーブルの湯飲みの水は揺れていない。次はぎしぎしと強く部屋を締め上げる音がした。部屋が潰れるかと思う程の締め上げだが、神崎君の結界はびくりともしない。

体当たりと締め上げは三度続いた。

そしてピタリと音は止まった。

次は何かと身構えていると、声が出た。

「せんばい。伊達せんばい。私です。幸恵です。部屋を開けてくれませんか？ 私、母を亡くして一人きりなんですよ。声くらい聞かせてくれても良いじゃないですか？」

伊達君が立ち上がりかけた。

「身固め！」

私が叫ぶと、明美は足を絡めるようにして伊達君を組み敷いた。

「——なんだよ？ 幸恵は狂ってないじゃないか？ あれなら謝れる」

「——伊達！ 声を上げるな！ あれは完部玄白が喋らせているんだ！」

雨戸を閉めた所から忍び笑いが漏れる。

「酷いですね。神崎先輩。彩宮先輩。私を助けると言ったじゃないですか？ 嘘だったんですね？ 私が怪物になったから見放すんですね」

あはははは。狂気を帯びた笑い声が出た。

「ならば、神崎。お主が最初に死ぬが良い！」

小泉さんの声で完部玄白が言った。なまじ可愛い声なのでぞわりとした。

部屋の締め付けが厳しくなった。結界がぎりぎりまで締め付けられる。淡い鬼火が部屋の中に浮かぶようになった。

「神崎君！ 結界は？」

「心配ない。破れはしない。今は少し緩めている。完部玄白が自らの力で結界を破らせたと思わせるのが先決だ」

数十度に渡る体当たりには、結界の締め上げが一時間ほど続いた。

「彩宮さん、結界を僅かだが開く。構えに入ってくれ！」

神崎君の言葉に私は短剣を握って身構える。抜き身の村正はこの結界の中であって、自己を顕示するかのように青く鋭く輝いていた。

窓の側を開けた、僅かな結界の隙間。並の術者なら気づきもしなかっただろう。だが、流石に完部玄白。

凶つ蛇の頭を無理矢理にねじ込ませ、結界を砕きながら、ついに室内に侵入した。明美たちが悲鳴を上げる。

「蛇が血まみれだよ。それに随分小さくなった」

神崎君はほくそ笑んで言う。

確かに蛇は小さくなっていた。全長は五メートル程、所々から出血しているのが痛ましい位だ。だが瘴気は濃密なものに変化していた——つまり全長五メートルの生身の蛇と戦わねばならない訳だ。

「むしろ瘴気が強くなっておろうか？　これが幸恵よ。生きながらにして我が身を式とする術式じゃ。イザナミ流でこれをなした者は儂しかおらん」

その瞬間、神崎君の顔色が変わった。氷の彫像のようになった。凶つ蛇よりも完部玄白よりも、私は神崎君に恐怖を覚えた。

「かんべげんぱく。見事。その身、人の域を超えた」

「——お主、何者じゃ？」

玄白が恐怖に怯む。

「生身でここまで来たのは見事だが、検討違いだったな？　完部玄白」

「——なんじゃと?！」

その時には神崎君は元に戻っていた。

「結界は封じた。自力で破ったつもりだろうが、封印されたのだよ」

完部玄白は目を見開いて周囲を見る。そして嗤った。

「これはお主の結界じゃ。お主を倒せば済む話じゃ！　行け！　幸恵！　あれこそがお主の宿敵じゃ！」

蛇が驚くべき速度で宙を飛んだ。私が動く気配を神崎君が制した。

そして、あるべき事か？

神崎君は右腕で、その一噛みを利き腕で受け止めたのだ。

鮮血が飛んだ。血の飛沫が私の頬を濡らした。大型犬の頭ほどの大きさがある蛇の頭は神崎君の腕に噛みつき、更に力を入れて体を激しく振っている。噛み千切ろうと言うのだ。蛇も神崎君も幻想ではない、実体としてそこに存在している。このままでは神崎君は剣を握れぬ体になる。今度こそ『村正』で蛇を殺さねばならない。構えに入った私を、ここに至って、神崎君は「まだだ！」と抑えた。

「よせ！ 神崎！ 剣が使えなくなる！」

伊達君のその叫びに「人一人救えずして何が剣の道だ！」と神崎君は応える。

神崎君は蛇の頭を引き離さず、抱え込んだ。

「小泉さん、僕だよ。神崎だ。約束通り救いに来たよ」

なんて人！ 凶つ蛇そのものになった小泉さんに説得など通用する筈がない。今こそ『村正』の使い時だと言うのに……

案の定、蛇はさらに激しく体を揺すり、さらにさらにと食らいつく。

「オン アボキヤ ベイロシヤノウ マカドラマニ ハンドマ ジンバラ ハラタミヤマ ウン」

神崎君は蛇の頭を抱きしめながら、絞り出すように真言を唱えた。

完部玄白は哄笑した。

「光明真言？ 光明真言じゃと？ そんなお題目に効果があると思っっているのか？」

「——それはどうかな？」

あり得ぬ筈のその声に神崎君を除く一同が、声の主を見た。

後ろのお姉さんだった、黒に牡丹の振り袖を胸が露わになるように着崩している。なんとも艶めかしい姿だった。

お姉さんは壁に背中を預け、キセルを吹かしていた。

「その者は光明真言しか知らない。だが、『あの日』から休む事なく仏壇に向かい、一体丁寧に上げていたとしたらどうする？ その真言、菩薩の位にある。それに、この私がむざむざ浩平を殺させると思うか？」

お姉さんを見る者の全てに背筋から凍り付かせる笑みを浮かべた。

ここに来て完部玄白は狼狽えた。逃げ場を探している。

「逃れる隙はこの結界にはないぞ。それにお主の生涯をかけた術、ほころんで来ているで

はないか？」

お姉さんは揶揄する笑みを浮かべた。

神崎君の側に鬼火が上がっていた。霊視するとそれは中年の男性と老婆だった。

「もう良いんだ。幸恵ちゃん。後の責め苦はお父さんが背負ってあげる。だからもう止めなさい」

「幸恵。幸恵ちゃん。お婆ちゃんだよ。幸恵、お前の名は私がつけた。幸福にまみれた人生を送れるように。ああ、幸恵やめておくれ。あの男の甘言には一部の誠もない」

小泉さんの上半身は蛇身から裸の少女のものに変わっていた。

神崎君が私に視線を向ける。その時、残っていた蛇の体からコールドールに包まれたような女性が立ち上がり、完部玄白を羽交い締めにした。

「——おのれ！ さくら！ 手を引け！」

「いいえ。お父様。そうは行きません。小泉さくら一世一代の呪詛がこれなのですから。

蛇は初めから成就しなかったのですよ」

「彩宮さん！ 今だ！」

「お嬢さん！ 今です！」

神崎君と小泉さくらさんが叫ぶ。

その声には私は弾丸となって飛翔した。

「覚悟！！ 完部玄白！」

私の魂魄の気合いと共に、村正の放つ青い妖気の輝きが一条の矢となって完部玄白の心臓を貫いた。完部玄白の体は淡いオレンジの光りに包まれると霧散した。蛇は消え、全裸の小泉さんが倒れていた。だが、完部玄白の死体はない。

「——逃したか？」

スピードを殺しながら着地した私は、口惜しさに叫ぶ。

「——なんの、鈴香よ。お主は完部玄白を滅したのだ。この現世から完部玄白をお主は滅したのだ」

お姉さんが、煙を吐いてそう言った。

「伊達。毛布を……」

弱々しい声で神崎君が言う。伊達君が毛布を投げてよこすと、神崎君は全裸で傷だらけの小泉さんに毛布をかけた。そして、そのまま力尽きるように倒れた。

「どれ……」

お姉さんは気怠げに呟くと倒れている神崎君の右腕を持ち上げた。その手はまだ血しぶきを上げている。お姉さんは右の掌を神崎君の傷口にあてがった。淡い金色の光りが輝く。神崎君の傷はみるみるうちに塞がっていった。

「骨の方はどうにもならぬ。医者を呼べ。それとその小娘、湯殿で穢れを落としてやれ」お姉さんは呆然としている小泉さんの両親とお婆さんに視線を流した。

「お主等は私と来い」

そう言うとお姉さんの体が徐々に薄れ始めた。

部屋には私と神崎君、明美と伊達君が呆然としたまま残された。

◇

完部玄白は寒さに目を開けた。

そこは何も無かった。見渡す限りの青い地平線。起伏のない氷に覆われた異世界だった。

「……ここはどこだ」

そう呟くと「よくぞ参られた。完部玄白殿」そう声をかけられた。聞き覚えのある声だった。

振り向くと古代ローマの宮殿に繋がるような白亜の門がそびえていた。その門の側に黒曜石で作られた石の椅子があった。玉座だ。黒の僧衣に身を纏った青年の姿は見間違う筈もなかった。

「――神崎浩平！」

と、僧衣の青年は険しい顔になった。

「あれと我を一緒にするな。我が体現するに適したのがあの男の姿だけだっただけのこと。あれと我とは正逆の存在だ」

青年の眼はこの凍原に相応しく冷たく鋭いものだった。

その靈威に負けて完部玄白は土下座した。

「あなた様はどなたでしょうか？」

「名などない。完部玄白。そなたは人の枠を越えた。喜べ。そなたは輪廻転生の輪から抜けただ」

青年の声はどこまでも冷たかったが、どこか喜色を含んでいた。

輪廻転生の輪を越えたと言われて、完部玄白は喜びを覚えた。あの小娘や神崎浩平にはこの喜びは分かるまい。

青年は中空に手をかざした。そこに蓮の花を模した巨大な鏡が現れた。

「――八咫の鏡！」

完部玄白は驚きの声を上げる。

青年は不快を現して言った。

「ただの鏡だ。さて、完部玄白。そなたはどの世界を選ぶ？ 三千世界のいずれでも、六天のいずれでも、そなたは選べる。どの世において汝を置く？ 天として君臨するか？ 魔王となるか？ ここにそなたの人生が映し出される。そなた自身で自らの世界を選ぶのだ。これが我の唯一の楽しみじゃ。受けて見せるか？ 完部玄白！」

「――無論！」

完部玄白は胸を張った。

鏡から人が現れた。首があり得ぬ角度に曲がった女でワンピースは引き破れている。股から出血していた。

「――ほう。これがお主が最初に殺した女か？ 戦後の飢餓の中、そなたが欲望のままに殺した女じゃな」

完部玄白は声にならない悲鳴を上げた。

「……つもらぬ」

僧衣の青年は黒曜石の椅子に座り、頬杖をついていた。門も鏡も消え失せている。

「灼熱地獄を選んだか……」

僧衣の青年は瞑目する。

「人を殺すのも徳と言うものだと言うに、なぜにそれを罪とするのか？ 次はいつかな？

神崎浩平。そなたが新たな客人を呼ぶ事を我は期待する」

風が吹いたかと思うと、青年の姿は消えていた。彼は全てが滅したこの世界でただ待つばかりだったのだ。

◇

むやみに長い夏休みの登校日。

僕は高校へと続く緩やかな坂を鈴ちゃんと並んで登校していた。

「ギプス取れないね？ 浩ちゃん」

「本当なら複雑骨折に静脈やられていたからね。お姉さんが僕に何かしてくれたのは初め

てのような気がするよ。単純骨折で済んでいるのは幸いだ」

「ふふ……」

彩宮さんは笑いを漏らすと僕の顔を見つめる。初々しい笑顔にどぎまぎした。

「なに？」

「一緒に登校するのって初めてだね」

僕は赤面を隠すため、空を見上げた。まあ、鈴ちゃんには僕の気持ちなどお見通しなんだろうけど……

「せんばい〜！」

後ろからドタバタした走る音が聞こえて、僕と彩宮さんは振り返った。小泉さんだった。

小泉さんは僕たちに近づくと肩で息をした。

「もう、ずっと、呼んで、いたのに気付いてくれないんだから……、あ、あれですか？

二人だけの世界に浸りきっていました？」

「——そうよ。何の用？」

彩宮さんは表情を一変させると『絶対零度の魔女』の顔になる。

「もう、登校出来るようになったの？」

「はい！ 本当にお世話になりました」

小泉さんは子リスのような顔で微笑む。

「あ、あの、彩宮さんに見て貰いたい事があるんですけど……私、お爺ちゃんの遺産で普通に食べて行くのは大丈夫なんですけど、やっぱり、一人暮らしは不安で……、今も怖い夢見ますし……ぶしつけなんですけど私の未来占ってくださいませんか？ 彩宮先輩！」

彩宮さんは無言で小泉さんを見つめていたが、ポケットからルーンの石の入った赤い袋を取り出した。

「一枚、引きなさい」

「え？ 今、ここで占うんですか？」

「占いと言うのは、占って欲しいと思った時にするのが一番なのよ」

「う〜ん、じゃあ、頑張って引きますね。エイ！」

小泉さんは引いた石を差し出すように彩宮さんに渡した。

彩宮さんは眉間に皺を寄せて、そのルーンを見つめていた。
しばしの沈黙。

「貴女次第よ、小泉さん」

「えと、それってどういう意味ですか？」

「貴女が未来は明るいと信じて生きれば幸せになれる。妬みや不安を抱えて生きれば、どこまでも転がる。そう言う意味よ」

「うゝ。呪詛はこりごりですよ。じゃあ、彩宮先輩。私が神崎先輩と付き合いたいと思えば付き合えるって事ですか？」

「出来ると思っっているなら、やりなさい」

彩宮さんは微笑んで凄む。

「あ、嘘です。嘘。私、彩宮先輩尊敬していますから。部活に遅れてしまうんで、先に行きますね。彩宮先輩占ってくれてサンクスです！」

小泉さんは嵐のように駆け抜けて行った。

あの夜の悪夢が嘘のようだ。

「で、小泉さんは何を引いたの？」

「見たい？」

僕は真面目な顔で頷いた。彩宮さんは小泉さんが引いたルーンを見せた。

何も記されていない空白のルーン・ウイアド。

「本当にあの娘次第なのよ。強いわね。ハガルくらいは覚悟してたけど……」

自分次第。それって全ての人に当てはまるんじゃないかと僕は思った。

空を見上げる。抜けるように青い。

「――鈴ちゃん」

「なに？」

「来週の日曜花火大会があるんだ。一緒に行かない？ たまには勉強を忘れて思い出を作ろうよ」

彩宮さんは呆気にとられた顔をしていたが、真っ赤になって頷いた。

(了)